バルカン

昭和四十二年二月五日印刷・昭和四十二年二月十一日発行

特輯雑誌

文藝・文化

座談会

日本人のくらしと教育

22

バルカン第22輯（あさあけ通巻42号）

バルカン

22
1967.2

火の會

目　次

文珠（部分）……表紙板画……棟方志功

火の矢……2
政治と犯罪・英霊の声・地方行政と流行

日本人のくらしと教育（座談会）……7
保田與重郎・清水文雄・吉川　豊
笹本　毅・竹川哲生・林田展明・六百田幸夫

短歌
昭和丙午歳回顧……六百田幸夫19
残紅集……西村公晴21
華麗なる終焉……大谷多香子23

■特輯・雑誌「文芸文化」■
回顧と感謝……保田與重郎26
「文芸文化」回顧　3章
三十年前の思い出……斎藤清衛28
「文芸文化」創刊まで……栗山理一31
その頃のこと二つ三つ……池田　勉37
「文芸文化」と私　8章
「文芸文化」の創刊のころ……南蛮寺万造40
「文芸文化」とわたし……田中克己42
「文芸文化」と私……松尾　聰47
「文芸文化」とわたし……富士正晴50
「文芸文化」と私……坂本　浩53
「文芸文化」の思い出……林富士馬56
「文芸文化」のこころ……丸山　学60
恩頼と学縁……野地潤家62
蓮田善明・その人と著書　6章
蓮田氏の思い出……浅野　晃68
蓮田善明のこと……荒木精之70
蓮田善明の死因……小高根二郎73
父・蓮田善明……蓮田晶一78
蓮田善明「鴨長明」頌……塚本康彦82
蓮田善明「予言と回顧」私感…神谷忠孝85
文芸文化をめぐる5章
文芸文化と三島由紀夫氏……古田博保88
文学は対話である……六百田幸夫92
「大陸遠望」の回顧……美堂正義94
回想……末田タカエ97
花しづめ（長歌）……山川京子 100
アンケート……66

恩頼記……清水文雄98

文芸文化・資料……（隠岐国彦編）
文芸文化叢書・解題 25, 29, 33, 39, 41, 43, 51, 55, 61, 63, 71, 87, 103
文芸文化関係年表……58～59
「新文庫」刊行書目……104～105
「国文学試論・同批評篇」総目次……36, 52
「文芸文化」総目次（付執筆者索引）… 107

加工機綜合メーカー
KKK 呉興業株式会社
本社　呉市築地町3
TEL代表 ㉑6406
東京・大阪・松山・岩国・三原

シンエイトイシ
新栄製砥株式会社
呉市若葉町一番地
TEL ㉑4594

日本水道協会広島県支部指定水道工事店
広島市上下水道指定工事店
広島ガス工事指定店
岩崎管工株式会社
広島市千田町3丁目2番31号
電話代㊶4175 倉庫㊶9590

高松宮賞受賞
ソフトで甘いパリの味…
マドレーヌ
欧風菓子 白松屋 呉・広島

火の矢

すべき政治哲学となったのである。例へば、「爾俸爾禄は、民膏民脂なり、下民虐げ易きも上天欺き難し」とは、今に見る二本松城趾の戒石銘であるが、かつては北宗の地方官の自戒であり、戦前においては内務省に掲げられ吏道振作の一眼目となってゐたものであった。

悪と同居する宿命をもつ政治権力なるが故に、而して天意をこの地に布かんがための政治理想顕現の故に、厳粛苛烈なる戒律は、政治家、行政官に要求せられたのである。

言ひかへれば、アジアの政治の理想は、道徳的状態の維持保全にある。即ちわが国においては、国民の生産とその生活基盤を護ることが政治の出発であり、且つ最終のものだったのである。

さて、近代ヨーロッパの政治観は、政治と道徳の分離状態をその出発点としてゐる。政治は道徳と切り離されて「技術」となった。そして「道徳」の担当者はキリスト教であった。そのやうな近代国家とその政府が、目標としたものは「福祉国家」の美称であった。戦後のわが国もこの例外ではない。その結果、どんな現象が起きつゝあるかは言ふまでもなからう。それは怖るべき道徳的頽廃を生みつゝある。簡単に言へば、少しでも困難なことは、すべて国家、政府の責任にし、わずかに自己一身、自己一家庭に人生における価値づけを空虚に求めやうとしてゐる。三島由紀夫氏の作品「英霊の声」はこの怖るべき道徳的頽廃を糾弾し、その救済の原理を暗示してゐるのではないか。

現代の「福祉国家」体制への志向は、同時に政治家の果しない道徳的頽廃を生んだのである。過度の、無責任な要求は、結果的には往々にして一種の無責任な放任体制ともなる。そして政治家にとっては、その日ぐらしの思ひつきの処世の中で、安易で無責任な水商売と流れていく。腐敗すべきときには、一部分だけといふわけにはいかない。腐敗はあらゆる各界各層にすでに及んでゐる。

現在の破局は、すべて政治認識の浅薄さに原因してゐる。悲しき国民は、その故を知らず、且つわれらが最大の不幸は、政治家自身が、高度な犯罪者意識の自覚を有ってゐないことにある　即ちあえて、今の国民に恥ぢずとも「先人」に対し、「古人」に対し、「天」に対し「神」に対し畏怖せよ。

すべての開闢は、既成政治認識の一新と畏怖の感情の謙恭に発する。それは又現代国家

政治と犯罪

いかなる善政といへども、人を堕落させる犯罪的要素を本質的に有ってゐるといふのが、古来まったうな人々の考へる当り前の政治観であった。だから、鼓腹撃壤を以て治世の理想としたのである。

かゝる政治観に立脚すればこそ、儒教は為政者にとって必須の道徳律となり、信奉随順として「福祉国家」をのりこえる、最も進んだ未聞の国家に近づいていく道であり、且つ、アジアの原初の政治理想に近づいていく根底である。

英霊の声

三島由紀夫氏の作品「英霊の声」について、友人間で話合ひがなされてゐた時には、まだ、その作品を読んでゐなかったので仲間に入ることができなかった

その話は、江田島の海軍兵学校跡に建立された特攻隊の慰霊碑の除幕式のあった日で、その除幕式に参列すべく、わざわざ京都から西下してきた友人母子を囲んでの小宴に出席した時のことであった。

ある人が、三島氏の発想と作品そのものをも高評価したのに対し、特攻隊の遺族であるその母子は、大いに疑義を唱えたのである

母堂は「何かひやかされてゐるやうな気がしていやな思ひであった」旨を述懐し、英霊の弟であるその友人は「あれでは問題は解決しない」と言った。

戦中派、日本人、文学、小説といったいろいろの観点から「英霊の声」は話題になったのだが、先の遺族の声が余りにも切実であったために、それが一方の結論になった恰好になり、その一方の結論に対してこちらは「しかし、それは小説の限界としてやむをえないのではないか」といふことで、大体話は了ったやうであった。

それからしばらく経ってのち、広島に立寄った三島氏と会ふ機会を得たのである。三島氏は神風連の研究のために熊本に赴く途中、寄広した由だが、江田島の術科学校に保存されてゐる特攻隊の遺書を見学するといふのが目的であるとのことであった。

三島氏との解近は、三島氏の恩師である清水文雄先生の御厚意によるもので、清水、三島師弟水入らずの仲へ相伴させて貰った。鼎談は、酒盃を傾けながら三、四時間に亘った。その時、先の友人間に交された「英霊の声」談義の模様を三島氏に伝へたところ、三島氏の曰くは「さうです。小説の限界なんですよ。その限界をこえると、プロパガンダになりますからね」であった。

なるほど、小説といふものはそんなものであらう。限界があるに違ひない。書いたことはないけれども——。読めば大体分るやうな気がする。

しかし、三島氏の発想は、小説「英霊の声」の限界をこえたところから出発してゐたであらうことが、後日、英霊の声を読んだのちにうかがへたのである。小説はたしかに有限の世界といえるやうだ。

日本の歴史に死んで逝った若者の霊を呼びおこして、それを今の現実の生身としたならば、生身から発せられる声のどこかにはあの「英霊の声」がある筈である。すくなくともないとはいへないのである。

新憲法における「象徴天皇」よりも明治憲法の「神聖にして犯すべからざる天皇」の方がよいと主張するていの国家主義者の間に、「英霊の声」はけしからんといふ非難の声があるといふことだ。

真善美以外において天皇及び天皇制を論ずることをタブーとした、つまり神聖にして犯すべからざる絶対神である天皇の御為を思って、しかもその思ひ心の激しさ、清さ、美しさは、天皇の御名において政治を司ってゐた人々よりも遙かに深刻崇高であった青年将校が、昭和十一年二月二十六日早暁に蹶起して、天皇の御名において政治を司ってゐた人々を殺したいはゆる二・二六のクーデターと称せられる事件の主演者は、天皇の御名において

叛乱軍、国賊の汚名を冠せられて葬られた。しかも、その国賊をもっとも讃仰したのは、天皇は神聖にして犯すべからざるといふ熱烈な天皇信仰の人達であった。

歴史とはこのやうな悲劇と悲歌のくり返しとでもいへようが、さればといって、今の右翼者流が怒ってゐるといふ三島氏の「英霊の声」に対する非難の声も当然といふのではない。むしろそれは野郎自大の声とでも評したいのである。

天皇を制度化した明治憲法、それから生れた天皇機関説は、法理の学説であって、信仰や思想や文学とは自ら次元を異にしてゐるのではないか。天皇以外のものは全面否定して一つの信仰に仕上げなければ承知しないといふ角張ったものが、天皇が統率し結ぶ軍隊にもあったし、ウルトラ・ナショナリズムを奉ずる主義者には特にイデオロギーとしても強烈に根ざしてゐたが、それらの中には天皇機関説を全面否定するのに美濃部博士の暗殺まで企てた純心な青年国士もゐたのである。

だが、はたして、純心といゝ青年といゝ国士といっても、それですまされるものであらうか。歴史を背負ふが故にこそ、それら様々の事件に対する反省なり検討が必要なのである。

その意味では、三島氏の「英霊の声」は極めて意欲的な作品であったといへよう。熱烈な天皇信仰者であった二・二六事件の青年将校が、自ら絶対神と仰ぐ天皇から、もっとも忌はしい国賊逆臣ときめつけられたのだから、ことは穏当ではない。その国賊の英霊たちが天皇に恨み言を申す遣瀬なさと、天皇は神にしませば、帰命帰一し奉らんと自が心に誓って散華した特攻隊の英霊が、戦後、私は神ではない人間であると公開された天皇の「人間宣言」に驚愕して、怒りと慨きを切々にうったへることを根抵にしたのが三島氏の「英霊の声」であるとするならば、その表現において小説の限界を感じながらも、限界点のみを抉り出すのは、いはゆる揚げ足とりに類する放言にすぎないといってもよからう。

たゞ、ここで大切なのは、前述した特攻隊の遺族の声には、限界をしらない怺嘆があることを、三島氏に会得して貰ひたいといふことである。

× × ×

「英霊の声」を入れて三部作と称せられる他の二篇の小説「憂国」と「十日の菊」について、若干の見解を述べるならば、歴史的主題を小説とすることの、いかに困難であるかを味はったのである。

どうして、あゝまでこまごまと自刃する夫と、そのあとを追って殉死する妻との間にくり展げられる肉体と性の行為を描写しなければならないのだらうか、さうしなければ小説にならないといふなら、小説にしなければよいのである。

もちろん、歴史には黒い影があらう。だが、その黒い影は、貴重の記録に忠実であってはじめて理解できるもので、小説的手法や、読者を念頭においての構想からは、イデオロギーによる史観と同様、歴史的真実から大きく逸脱するのが、先ずオチであるやうだ。

だから、三島氏の場合、小説よりも、三島氏自身の談話や、エッセイや随想めいた文章の方が、より三島氏の人柄と、その志を知ることができるやうに思ふのである。そこに表れた三島氏は、三島氏の言を借りるならば観念的なのである。つまり精神的なのである。

その精神的三島氏では、ノーベル賞の候補には上らなかったであろうが、三島氏の小説は、三島氏本来の思想的、精神的なものを遙

かに飛びこえて、実に刻明な現実的描写に移るわけだが、それを三島文学といふのかもしれない。

橋川文三氏の「日本浪曼派批判序説」の中には、三島氏のことがよく出てくる。その中に「私は、かつて、三島の小説に対する私の関心は、芸術作品に対するものというより、むしろそこに戦中戦後の青年の血腥い情神史の精緻なスペクトルを見る思いがするからだという、甚だ非文学的な感想を述べたことがある。そのことに関連するのかどうかわからないが、私にこの選集の解説を書けという三島の依頼はほかならぬその精神史的背景を書けというものであった。」とあり、またの一節には「戦争のことは、三島や私などのように、その時期に少年ないし青年であったものたちにとっては、あるやましい浄福の感情なしには思いおこせないものである。それは異教的な秘宴の記憶、聖別された犯罪の陶酔感をともなう回想である」云々、とも記されてあった。

橋川氏が三島氏を論ずる上において、そこばくの先入観、つまり、三島氏がかつて、日本浪曼派の系譜につながってゐた文人であったことを意識してゐたかどうかといふことは定かではないが、橋川氏の著書名が日本浪曼派云々であることからすれば、若干の類推は成り立つかもしれない。

いふならば、橋川氏も一時、日本浪曼派だったのである。だからこの二人の共通点は橋川氏がいふ如き、「戦争のことは、三島や私などのように、その時期に少年ないし青年であったものたちにとっては」云々、だけではなく、つまり単なる同時代のことだけでなく、同じ文学の流れの中に生てきた、それこそ同期の桜といふノルスタルジアに似たやうなものが、意識するとせざるとにかゝはらず、一つの紐帯感をなしてゐるやうに思はれるのである。

たゞ、三島氏は、橋川氏のやうに「戦争前一時、保田與重郎にいかれた覚えのある私」とか、（註＝こゝのところの傍点は橋川氏自身が付したものである）

それが証拠に東大生の学徒出陣に際して保田與重郎が尊皇攘夷と寄せ書に大書して、煽動してゐるではないか、といったやうな愚痴めいたことは、流石に言はず、「もし、再び、この前の戦争のやうな時代がきたとしても、私は文学報国などといふことは決して言はないことを心に誓ってゐる。そんなことを言はなければならないときは、ペンを捨てて銃をもって戦場に出るつもりだ。」と、毅然とし、さっぱりしてゐるところが、三島氏の本領といふべきであらう。

天皇・戦争　愛国・生命・生活、それをどの様に言ったらよいのか？。嗚呼。

地方行政と流行

地方行政にも流行がある様である。ここ十年を振返ってみても、企業誘致に血道をあげた時代、猫も杓子も観光々々に明け暮れた時期、近くは地域開発に刺戟されての長期計画の立案、そして社会開発から消費者行政へと目まぐるしく動いてゐる。

企業誘致と観光は地方財政の問題と関りがある。戦後、地方自治の強化といふ面からの地方への事務委譲、或ひは社会国家、福祉国家といふ目標の為の行政サービスの拡充により、地方行政事務が大幅に増大したことに加へ、公選首長の選挙の為の安易な人気取政策は、多額の財源を必要とするに至ってゐるが、我国現行の地方財政制度は行政とバランスがとれないで、拡大した地方事務を賄ふに充分でなく、補助金や交付税等によって辛うじて維持されてゐる状況で、「三割自治」といふ奇態な言葉が使はれたり、陳情政治が幅をきかす温床となってゐるのである。

この様な地方財政の貧困から税収増大の戦略として、地方団体が先行投資によってゞも土地を買収造成し、企業を誘致して工業を主軸に産業を振興しようとしたことは理解出来

ないことではない。しかしどこでもかしこでも用地さへ造れば工場が来るといふものではない。企業の立地を促すものは、如何に企業の社会性が強調されるとしても、依然として「利潤」であって、決して住民への奉仕の精神ではない。バスに乗遅れまいとして莫大な資金を投じながらペンペン草の生えるの余儀なきに至り、反って財政を悪化させた団体の少からずあったことを想起するのである。

観光ブームも基本的には原因は似てゐるが、これには消費を美徳とし、消費者を王様とするバカンスムード、レジャーブームが加はった為に始末が悪い。自然的歴史的資源もロクに無いのに人工の美を競ひ、反って自然を破壊することに何のためらひも感じない。スカイラインとかハイウエイといふものが全国で如何程出来たゞらうか。又鉄筋コンクリートで復原されたお城は数限りなく、城趾に佇んで懐旧する浪慢は失はれた。そこにあるのは露骨な商業主義だけである。現代の観光の救ひ難い堕落を嘆き、真の観光の次元の高さを言ふてみても、今は理解出来るもの も少い。

さて最近大流行の長期計画の策定はどうであらうか。それは行政の計画性、総合性の確保に貢献するものではある。しかしそれを一時の流行に終らせないで実効あらしめる為には、計画の内容とその取扱に慎重を期さなければならない。即ち計画の内容は経済開発を足掛として住民の明るいくらしを指向してこそ意味がある。所得の増大は精神の豊かさ、道義の恢弘に結びつかなくては意義はない。真の教育の振興と住民意識の昂揚が基本である。「物」より「心」である。その為には社会開発を単なる高度経済成長のヒズミ是正でなく、住民にくらしの夢と理想を与へる積極性を持たせなくてはならない。それなくしては生活環境施設の整備も、福祉サービスの拡大も遂に惰民の保護に終るしかないであらう。又計画は固定したものではない。時代の進展と四囲の状況の変化に応ずる柔軟性が必要である。計画に振廻されてはならない。今日の政治家は中央と地方を問はず、遠大にして高邁な理想に欠け、国民の心を心とする態度を失ってゐる故に経綸がない。官僚に振廻され流行を気にする所以である。

地方行政も社会経済の発展と科学技術の進歩につれて変化することは当然である。しかしそれは、思ひつきであったり物真似であってはならない。まして流行を追ふが如き態度は厳に慎まねばならない。

日本の真の詩歌の伝統を守るとともに更に新しく格調高い浪曼精神の展開を期す
風日
京都市中京区西之京馬代町五
風日社
新しい浪曼精神に基き短歌を中心として広く文学芸術を研究する
桃
東京都杉並区西田町一の七〇七
桃の會

日本人のくらしと教育

■座談会■

保田與重郎
清水文雄
吉川豊
笹本毅
竹川哲生
林田展明
六百田幸夫

笹本 こんにち、私共がわが国の状態をみまして、いろいろと憂慮すべき状態に在ると考へるわけですが、その本源をなすもの、そして又、その故にこそわが国の正しい状態への回復の根本になるものとして、どうしても「教育」を考へざるを得ないわけです。

それでは最初にこれは一番基本的な問題ですが、「教育の本質とは何か」について御意見をお聞きしたいと思ひます。

教育の本質とは何か

竹川 吉川先生、常識的にはどういふことが言へるんですか。所謂教育と云へば、例へば智育体育徳育の三つがあげられるとかですね。その本質的なものはかうである、といったことでは如何でせうか。

吉川 まあ、分けていけばね、智育徳育体育といふ分け方もあり、又智情意とも言ひますがね。だが、大まかに言ったらどうですかね。吾々人間の、ある本質的なもの、神から与へられてゐる本質的なものがあるわね、それを本当に引出してやる仕事が、私は教育の仕事だと思ふんでね。

竹川 清水先生の場合は、現在は大学教授

といふお立場ですが、吉川先生は孤児を扱はれたり、非常に現実に密着してゐるといった感じですね。だからナマの声を聞かして頂けるんではないか、理論的なものではなしにね、現実の問題についていろいろ御意見を承りたいんですがね。

吉川　ですから今言った様に、一般的に考へてゐる教育といった場合にはね、高い次元のものをもって教育だと一般的には見てゐるけれどね、特に最近さういふ傾向が強い。さうでなくて、人間のもってゐる本質的なものをね、本当に見出してやる、まあいのちの触れ合ひといふこと。

私はさういふ表現の仕方をしてゐるけれど。

竹川　さういふものと現実の施設の教育の在り方といったものは如何ですか。

吉川　といふのは、私はそれをさかんに力説してゐる訳だけどね、だから今の姿から見ると知的なものにだけ走ってゐますよね。もっと情の教育、情緒を豊かにしてやる教育といふものが、或ひは日本人らしい教養といふか、永い日本の歴史の中に伝承されたいのちのふれあひを感ずる様な教育といふものが「教育」としてもっと本質的なものを持ってゐるんぢゃないだらうか。かういふ考へ方を私はしてゐる。

竹川　清水先生は大学の先生と小学校の校長先生を兼ねてをられるのですが。

無意識の教育

清水　情操的なものの教育はですね意識的な教育、それと無意識な教育とあると思ふんです。さういふ一番基本になる情操といった様なものを養ふのは意識的に入る以外に、子供の環境とか、家庭の中の雰囲気とか、さういふいはゞ「無意識の教育」といふものが、むしろ大事な役割を果してゐるんぢゃないですか。せまい意味の教育、即ち意識的な教育もむろん必要ですが、それはおもに知識の教育とか、道義の教育とかにおいて必要なので情緒を養ふのはやはり自然とか子供の生活環境とか親の生活態度とかにみんなかゝわってきますね。さういふものから子供が無意識のうちにうけるもの、これが子供の基本的なものを養ふのだと思ひます。特に最近は意識過剰です。母親など子供をとてもいびつにしてゐるやうに思ふ。さういふ事例に幾つも接してゐるんです。戦後特に、教育ママなどといふ言葉で言はれてゐる様な事態は、矢張意識過剰といふことでせうが、無意識の教育といふことが非常に大切ではないですかね。

林田　かういふことが考へられるんぢゃないでせうか。結局マスコミ教育とですね、家庭教育の非常に分裂が甚しくなってゐる。教育ママといふのは結局マスコミ教育への追従であるといふ風に思ふんです。ところが、やっぱり家庭教育が根幹をなすべきであって、マスコミ教育がそれに補助的な意味しかないんぢゃないか、これが本質ぢゃないかと思ふんですね。家庭教育への本質的在り方といふものを、もう一度考へ直してゆくことが矢張大本の問題ぢゃないか、とかう思ってゐますね。

笹本　今、清水先生が無意識の教育と言はれましたですね。それに関連して林田さんは家庭教育の根幹は何か、と云った風な家庭教育の根本に触れた様な問題が出た訳ですがね結局どうでせうかね、無意識の教育の根底にあるもの、それから本来あるべき家庭教育の根底にあるもの、これは簡単な言葉で言ひますと、どういふことになりますか。

清水　私はね、親の現実に生きる態度が大事ぢゃないかと思ひます。そこから子供が、

何時知らず一等大切なものを享けるんぢゃないですかね。

林田　今、大体家庭教育いひましてもね、短兵急に物を言ひますと、神棚やら仏檀を持ってゐる家庭といふものが、おそらく統計上微少化してゐると思ふんですね。吾々の爺さん婆さんたちは、朝起きて先づをがんでゐたのは太陽、日拝行事をやってゐた訳なんです。さういふのが今は稀有になって了ったですね。太陽が出た、パン／＼と音をたてゝ拝んでゐた様な姿を殆んど見かけない。朝起きてさういふ行事を子供なりに見つけてをったり、或ひは神棚にお燈明なりお水をあげたりする様なこと自体が、家庭教育の根幹をなしてゐた、と思ってゐる人も殆んど影をなくして了ったことがですね、情操教育喪失の第一原因ぢゃないかと思ひますけどね。

それからそんなことに基いて、百人一首だとかですね、訳も判らず教へて頂いたといふのが、昔の教育の在り方だったと思ひますけど、全然さういふものが取除かれまして、マスコミ的な立身出世の方向に追従した教育ママ的な意識がですね、やたらに旺盛になって来てるんです。これは全然教育の本質に逆行してゐるとかういふ風に考へてゐるんですがね。

吉川　今ね、清水先生のお話を伺ってゐて、私、やっぱりさうだと思ふんですね。教育といふことになった時、大上段にふりかざして行くときには、そこに何か作為的なものがある訳ですね。所謂とらはれがあるからそこには教育ママが出来てくる。しかし家庭の中の親子の関係の中に、さっき環境とおっしゃったけれども、そこに実は本当のものがあるんですね。日常親と子が一諸に生活してゐる中にね。だから親の態度いふものが実は子にそのまゝ移ってゆく訳ね、だから私、教育といふ面を見た時に、その「教」する面と「育」する面がありますね、むしろ本質的には「育」する面が「教」する面をより止揚化するのにですね、現実は「育」する面といふものが忘れられて、「教」する面だけが非常に教育の本質だといふ様なね、あやまった受取り方が横行してゐる。本当のものは先生がさっきおっしゃった、無意識でなくちゃならんといふことぢゃないかと、私は思ってゐるんですがね。それが、一寸結論になる様ですけど、今日一番大切なんぢゃないかなあ。

清水　林田さんの言はれた神棚とか、神聖な部屋がね、やっぱり一家に必要だ。これは保田さんが常に言ってをられることですけどね。

何でもないくらしの中に

保田　今、話のあった普通の形の在り方、それが大事です。それをもっと微細に分析して行かんといかんです。今の話の当前のくらし、それが全部間違ってます。一言ですむことですからね、昔は一言でよかったですけどね、今は一言でいかない。今日こゝへ来る途中、汽車の中で景色見てたんです。広島県だったと思ふんですけどね、とってもきれいな村に出て来たんですね。四・五人の女の人が通ってる。一つの門の中に入っていくんです。その門、寺か民家か判らない、大きい家です。大きい家言ふても中流の百姓ですかね、もし寺としたら一番小さい寺です。そこへ日傘みたいなのさしてね、着物きて四人位、さっさと歩いていくんですね。

それが非常にきれいなのね、そのうしろにね、子供が三・四人ついてるんです。年頃は後だからよく判りませんけどね、髪の形なんか見ましたら、お婆さんと違ふ、四十代。それがちょっちょっと入っていってね、あとから

子供がついてゆく。それ見て非常に気持よく思ひましたね。あゝいふ風な形でね、やっぱり子供は何か物を覚えますわ。

一番大事なことは、そんな時に覚えたんと違ひますか、それで今時でしたら、親が子供を連れてゆく時は、あゝいふ時に、あゝいふ所には連れてゆかないですね。休みでも、土曜日の昼からでもね、行くとしたらね、動物園へ行くとか天文の博物館とか、美術博物館、でなかったら遊園地ね。

清水　人ごみの所へね。

保田　どうもね、最近そんな風な情景見なかったですからね、見てたら非常に美しい。その村は必ずしも最も美しい村やないんです。沿線で言ったら。もっといゝ村もあります。それでね、一寸思ったんですけどね、日本の美術とか、道徳とか言ってもね、こんなくらしの中にあったんですわ。教育にしましてもね。その何でもないくらしの最も美しい時、それが心の中に印象づけるんですね。孔子の書かれた中にあるでしょ、春の日になって、晴着を着て子供と連れ立って、琴でも弾きたい言ふのが孔子の理想ですね。

さういふとこに日本人の考へてゐた学問の仕方とか教育といふものとがあったわけですが、明治以後になってヨーロッパの考へが入って来てから、全然正反対のものになったんですね。ところが、吾々の時代は未だ遺産が、非常に強固な遺産があったです。旧幕時代は芭蕉とか近松とか、あんな偉い人を生むだけの力あったんです。徳川三百年間の鎖国時代に、それを一生懸命護ってましたからね。何処へも出て行かんし、攻めても来んし、それで結局東洋文明の一番大切なものが道徳として日本に残ってました。

「岩にしみいる蟬の声」、このことを教へることは教育技術では出来ないね。しかしあのころの人、それが平気で判ってね。吾々も判ってる。これは遺産として受け継いでるのです。

さういふ風な「岩にしみいる蟬の声」と言ふ様な一番難しいものをわからす方法といふのをね、あの今日見た情景の中の女の人達がちゃんと子供に教へてると思った。それを見ますとね、見てる方も気持いゝですしね、行ってる者も気持いゝです。

西条に入るずっと前です、倉敷、笠岡なんか汽車から町が見えますが、そりやいゝ町ですけどね、さういふ風なね、も一つ別のきれいさがあったなあ、こちらの方。

爺さん婆さんの意味

吉川　いやあ、今保田先生がおっしゃった様にね、私自身のことを反省してみて、私が今日まで歩んで来た人生を辿ってみてですね、さっき家庭といふものの話があったけども、今私は学園の子供二百何名預ってみて何時でも思ふことは、私自身が何時、何処で一番訓練されたか、それで何処で私が育ったかを反省してみると、さっきおっしゃった子供時代のことがあります。

私達沢山の兄弟の中で、大きな家の中でね、それで物心ついた時は先づ床柱を拭かされたり、例の大黒柱がありますね、これを拭かされたりね。それから囲炉裏があって、そこでちゃんと坐る場所がきまってゐる。

清水　秩序がちゃんと保たれてゐて。

吉川　えゝ、こゝに坐るんだ、こゝはお前坐るんではないぞと言はれことね。それから、最初のご飯の時に仏様に持って行って、鉦をカーンとたゝかねば食べさせて貰へなかったとかね、さういった様な自然の中にね、何らそこにはカリキュラムだとか、何かいふものは無いんですな、それで家の中には柔和な

ものがあって、何か抜けとるとこもあるんだね、その中に非常に残っとるものがある、それで今、学園の教育の中に、さういふものを出来るだけ取入れてやりたい。ところが二十年たってみて、出た子供が何が一番思ひ出になってゐるか言ったら、非常に厳しく色々やったことが残ってゐる、こちらが教育しようと思ってることでなく、一生懸命に生活を築かうとしたことが、むしろ子供には残ってゐます。教育だと言ってお膳立した分は残っちゃゐない。それから、山へ苦労して登って朝詣に行く、夜明けにね、これが未だに皆に残ってゐます。

保田　もとはね、小学校には偉い先生がをられたものです。何も教へずに教へるんです、何か知らん偉い人居ったです。小学校の先生に多かったですね、中学校にいったら非常に少くなりますね。高等学校にいったらも一つ尠くなったです。それから私ら大学は東京でしたが、大学に行ったらもう全然なかった。

そりや、小学校の先生で何か訳の判らん偉いボーとしてなあ、それで何を教へたかと思ったらね、やっぱり「道」ですね。東洋文明の理想といふものは何かちふことを言はずに、教へたんですね。

清水　おのづからといふことですね、おのづからにと言ふこと。

保田　おのづからにね、何でもない形で。さういふ先生、考へてみたら若かった、偉い学問あったんですね、もとは伝統に。

林田　結局、家庭生活と家庭教育を考へてみますと、昔の家庭教育は、爺さん婆さん、それが中心をなしてゐたんではないでせうか。直接の実母は無関係ですね、この祖父母といふ存在が今は全然無視されてゐる。

保田　若い親でしたらね、一寸気がひけます、道徳を説くのはなあ。それを平気でやったですからね、爺さん婆さんは。

林田　それで現代の教育者はですね、爺さん婆さんの気心をしっかり身につけると言ふことが使命だと思ふんです。

保田　さういふ先生が居ったんです、小学校には。四十位で校長先生になったですがね、髯をはやしてね、「教鞭」といふのを持ってます、昔あったでしょ、こんな細い棒です。人間のする仕事の中で「教鞭をとる」といふこと、これは一番の偉いことや言ふてね。私「教鞭」を最後に見たのが中学校四年生の時で終りです。それから、もう、使はなくなったです、「教鞭」をとる人居らなくなったですよ。

教育言ふのは教へることも大事でしょ。

清水　そりや、無論さうです。

保田　何かを教へんといかんですね。

清水　大事なことを繰返し繰返しやってゐましたね、お爺さんお婆さんは。要らぬことは言はない。

父を知るは東洋文明のはじめ

保田　人類がね、人類の文明が起って来る時に、一番始めに知ったこと、沢山あると思ふんですね。すると先づね、まあ何処の国にもある自然現象にあった時に、当然全滅しますわね、ノアの洪水みたいに。その時誰かゞ、此処に居ったら、その、生き残るちふ方法を教へて導いたのです。これは神さんが教へた智慧でせうね。私、それから考へるのは、親といふことを知ったことですね。人類でなくて東洋人が知ったと思ふ、人類と言へません。今でも西欧人は親といふものを知りません。母親は知ってますわ、動物でも、犬でも猫でも、乳飲む間はね、母親を。でも犬や猫は父親は知らん、父親を知ってゐる生物は人間以外にない。人間の偉いとこです、

これが道徳の基ですよ。そこから、それを知るためにはね、いっぱいいろんなこと知ってゐるか知りませんよ。何で父親を知ったかちふこと言へといっても、誰も言へる人ないと思ふ、人類だけが父を知ってね、「孝」といふものを知った。他の生物はある期間母は知ってますわ、母を知って、母に養はれることも知ってますがね。人間は、死んでから三十年しても五十年しても死んだ父親のこと知ってゐる、三百年前のことも、二千年前の先祖も覚えてます。古墳なんか見てたら感じます。しかし、自分の先祖の墓やさかい、堀ってくれたら困ると言ってもね、通らんです今の法律では、証拠ないちふ訳ですわ、それなら父親に関して証拠があるかといふわけです、誰もない。（一同笑）

自分の先祖の墓やさかい堀ってくれたら困るといっても、文部省の文化財保護委員会が通さない。父を知ったことが、人間の文明の第一歩ですからね。

父を知ったちふとこから入って「孝」といふ文明の根本が出て来る訳ですわ。

林田　西欧は、結局聖母マリヤだけをですね、やはり中心に置いてるですね。

保田　父を言はない。

林田　言はないですね。

保田　キリストは、新訳でも、父を発見してないんだ。それで、もう父といふものはね、道徳であって悲劇であると萩原朔太郎先生が言はれた。あれを、何のために、何で言はれたかとおきゝしたらね、説明されなかったです。それで違ふかってね。何も説明せずに違ふか、いふところがね、これが大事なとこです。これが教育です。父は悲劇である、なぜかと言ふと道徳であると。これは守らねばならぬもの、道徳ぢゃ。母の愛情といふのは守らんならんといふものちゃ無いですからな。それを、今は、父といふものをうすくして、子が母を思ふといふことをもう戦争中から始めた。たとへば戦争で死ぬ時に、父親を言はず母を言ふ人は大体程度の低い人だった。程度の高い人は、もっと深いもの考へてます。人類とか、歴史とか、道徳とかね、死ぬ時にでも。それ考へんと安心して死ねません。吾々は色々なこと知ってますからね、第一、父とか孝いふこと知ってるでしょ、道も忠もね、それで簡単に、犬や猫と同じ動物状態で死ねないです。それで死ねる位だったら仏教も必要ない。（一同笑）

林田　仏教にしましても、父親を中心にした感覚で進められてゐる様ですね。

保田　そりゃ、こまかい証拠調べ知りませんけどね、一番素朴な原理だと思ひますね。「孝」といふものがあってね、何でそれを人間が知ったかと言ふこと、知ってから、どういふ風に吾々人間が動いて来たか。

東洋文明といふのは、始りにそれが出て来るんです。その前のこと何も誰も言ふてないですわ。永久的なものが始めにあった訳ですね、東洋の場合は。時間のない時に。日本の神話でしたら、もっと進んでますからね、始まった時に、もう道徳が始ります。動物から、始まらん、北欧神話とかヨーロッパの普通の未開国の神話はね、全部、動物からです始まりは。

その点、日本の場合はね、あんな原始宗教みたいなタブーとかトーテムとかいったもの、全然無いでしょ。あゝいふ風に言ってるのはね、今の連中はをかしいんです、学者達ね。釈迦とか孔子、日本の古事記とかね、丁寧に読まないといふか、さういふ風な、一番あたり前の生活が無くなったんですね。今日大学の先生になりたがってる、したがってる様な家庭といふと、全部さういふものないですね、一番下等な連

中がね、息子を大学の先生にしたいと云ふやうな考へ持ってますね。

清水　えゝ

保田　教育勅語にもね、「父母に孝」と書いてあるですわ、父を上に置いてある父をね。母父といっても良い筈ですがね。ところが、今の福祉国家ではね、もう「父」といふもの無くする方向へ向ってます。（一同笑）福祉国家ではね、もう父の存在は要らん、母だけでもまあ、やっと残してをいて、そのうち母の形もなくして（一同笑）子供はみな福祉施設に入れる。

吉川　こりゃ先生、困るんですよ。今日ね、見てゐるとやっぱり本当の親のね、母権といふことでなくて、私はね、親の権利を復活せなきゃいけんのぢゃないかと、今は福祉いふ前に、親の自覚といふものが必要ですね。父いふものの中には母が含まれてをるでせう。

保田　さうですか。

吉川　どうですか。

清水　子供はある所にくると、母にない父を見出す、年令的に。子供の時は本能的に結びついてゐる訳、母にね。だけど、父の発見はある年令が来ないとできないようですね。

吉川　子供達にとっても、一番、成長率を見ますとね、十五才頃からですね、父の分野でないと育たない面がある。

保田　それが困るんですよね、父親のない家庭。見てましたらね、それがよく判るんですね。あれは何とかする方法はないですかね。昔だったら、そんな場合には父に代る人が居ったですからね、郷土生活ではね、田舎に行きましても、その武家でも商家でも百姓でも、皆父に代るものがあった。

吉川　カナ親といふのがありましたですね、仮りの親といふ意味だけどね、もとはね、考へてみますと、立派な人間にするためにある家に付く訳ですよ。私の家なんか何人か居りましたよ、親が居るのに、お父さんが居るのに、やはり私の父につけて、それで経済的に足らない処を、そして色んな問題が起きると、そこへ行って相談して、その事に絶対従ふんだといふ、さっき先生が一寸おっしゃった、法律で書かない道育がね、やはり秩序を保ってゐたね。

保田　もっと子弟に対して全般的に責任をもってゐますね。責任といふのは愛情ですね。

東洋の教育と西欧の教育のちがひ

笹本　東洋の教育の理念と目標ですね、それとヨーロッパの教育の理念と目標といふものは、簡単にいふとどういふところに根本的な差がある訳ですか。

保田　簡単に言ったら動物的な生活を教育の基にしてゐるか、道徳的なものを基にしてゐるかの違ひですね。どうもね、分らせる方法ないと私は思ひますね。もし分らす方法あるとしたら、革命以外にないですね。全然違ふんだ。そりゃ、福祉国家といふ考へだけ持って来てもね、孔子さんが考へられた理想国家といふものと、今のと全然違ひます。孔子のは自然にして遊ぶ、野原へ行って琴をひくだけでね。今はさうやないでしょ、福祉国家は。あたり前の生活してないですわね、希望してませんわね、電気製品置いてみたり、ピアノを買ふてみたり、それを教養と思ってますわね、そのために子供をおきっぱりにして夫婦で共嫁ぎしてみたりね、そんなこと必要あるんかと思ひますね。

林田　結局、日本の国の成立がまあ、今まで農業立国であったのが、工業立国といった様な形でやたらに変貌してゐるんですが、さういふところから教育の崩壊といふものが出てくるんぢゃないでせうか。

保田　しかし初期の文明の時代にね、それ程矛盾してなかったのと違ひますか。機械文明、物質文明、工業立国とかいふもんとね、東洋道徳的な考へ方と、それは必ずしも矛盾してなかった様に思ひますがね。今は矛盾だけしかありません。元来は案外矛盾してないとこある様な気がしてるんです。それが途中で全然別の方向へ行ってね、その間の事情よく分りませんけどね。

竹川　今、出してをられる「教育日本新聞」、あれは何時頃からですか。

保田　昨年、一年位になる。

竹川　発足の御趣旨は。

保田　発足の趣旨は、今の世界を良くするものは教育以外にないです。

今は、沢山の人間を殺して世の中を良くするといふ考へ方と、沢山の人に良い考へを持たすといふ考へと、二つしかないのと違ひますか、現在世の中を支配してゐる力は、沢山人を殺すために教育のしくみをたててゐる。本来の教育の力といふのは微弱といったら微弱です。昔から今だにね。しかし文明の残ってるところを見たら、逆にやっぱり強いですね。人を殺して政権とった権力といふものはそれ程続かない。繰返し繰返し権力にあこがれるものが出て来てね、どんな場合でも権力といふものは、人を殺すことです、生かすことでない。人を殺すといふこと、今の時代は簡単ですよ、封建時代の方が、人命に関しては厳粛だったです。

政権の交替の時に人を殺さん様にしようとしたのはね、奈良朝から平安朝になってからです。千年前の日本ではどれだけ苦労したかわからんですよ、政権をスムースに交替して、人を殺さん様に。

それで、まあ、平安時代のはじめからで、それで源氏物語とか、清少納言とかね。大したもの出来たのですわ。

それが鎌倉時代になったら、又逆行して全部殺すんですからね。

それから足利幕府がやはりさうですね、皆子供みたいなのが将軍になって、子供のうちに殺すんですからね、むごいことです、武士の世界はね。

宮中はそんなことないです。宮中はもう殺しません。北朝の天子と南朝の天子が会ってね、お互に相手をいたはり合ふんです、大平記に出てますからね。北朝の天子が河内の方何処かへ連れて行かれます、そこへ南朝の天子が行ってなぐさめてをられます。別のとこで争ってるんですなあ。

時代と教育

笹本　二番目の「時代と教育」と言ひますか、その時代、その時代の教育の心持、しくみ、仕方などの移り変りについて一つ。

林田　日本武尊が、倭姫から薫陶を得られたことが古事記に明瞭に出て参りますよね。

竹川　つゝしみて怠ること勿れとか。

吉川　教訓だなあ。

林田　やはり、爺さん婆さんの教へごと。伯母君ですからね。景行天皇にはむしろ、日本武尊はうらみさへ含んでゐる様な言動ですね。父への返逆がありますからなあ。

竹川　吾を死ねとや思はすらむ、といふ様な。

笹本　あれはどうなんですか、父といふものに反撥するものがあるんぢゃないんですか。

保田　父に対して反撥するものがあるといふことがね、それが父といふものの道徳的な存在。

清水　さういふことでせうね。

保田　この問題な、今度胡蘭成先生にきゝます。儒教とか道教とか、よく知ってをられますからね。そりゃ、向ふの方が日本の神道よりか丁寧に教へてます。父といふのをいかにして発見したかといふことも。孝といふものを人間が知ったといふこともね、具体的に細かく理窟いふのに対して精緻です。日本人の考へでは、むしろ恐多いと思ふんですね。恐多いといふのはね、他にいゝ言葉ないかね、憚りだ。そんなことを口にして言ふだけでいかんちふ、さういふ風な気分ですね、理窟でなしに。理窟を言へといったらね、言ひますが、宣長なんかでも、理窟言ふときは、徹底的に言ってゐますわ、言ってますけど、言ってはいかんといふてます、ですからね、弟子達は言はんことになる（一同笑）

六百田　大伴家持については先生の御本なんかで学んだ様に、一つのサロンがあって、勿論歌人その他の雰囲気といふものが良く分るんですが、柿本人麿の場合はどうなんでせうか。謂はゞ教養を受けた場ですね。

保田　吾々の想像出来んものやっぱりあったんでせうなあ。想像でけへんやろな、作る方法あらへんものなあ、教育ってあれ、作ることではないですからねもっと素朴な、いゝ事でしょ。

林田　それこそ、結局、言ひ継ぎ語り継ぎといふ風な形の教育でせうねえ。

清水　人麿あたりは、さういふ風な家持的な師弟関係といふもんではないですね、もっと大らかな。

保田　時間にしたらなんぼも経ってゐないですけどね。

清水　さうです。その点非常に不思議な様な気がしますね。

保田　人麿なんかゞ出て来るについてはね、何千年かゝってるか分らないですね、人麿から現在まで千三百年ですけどね、大体ね、それより、人麿に来る前に持ってゐた文明の方が長いでせうね、でなかったら、あれだけのもの出て来ないです。それから後も出て来んものね。まあこれから千五百年かかったら出て来るか言ったら、出て来ないですね。

清水　詠人不知の歌に、人麿的な発想の歌、沢山ありますね、さういふ風なものを地盤にしてね、そりゃもう、時間的にも随分長い間かゝって、やっと人麿が生れたんですね。

保田　あの時代に、近い者沢山すでに居ったんですな、殆んど同じ位に、その中に一番大きな塊みたいな、女王蜂みたいなのが出て来た。

私の子供の頃、人麿屋敷といふのがちゃんとあった、えらいもんですなあ。人麿が此処に住んではった言ってたんだもんなあ。今は皆が言ひませんけどね。

清水　さういふ風に語り継いだところがね、やはりね、いゝですね。

笹本　紫式部と和泉式部のうけた教育、この点を。

六百田　これも素朴な疑問ですが、誰に、どういふ雰囲気から、又どういふ風な先生から、さういふものをうけて、あれだけ情操的な作品が出来たか——といふ事なんですがね。

シンポジウムの正しい方法

保田　まあ、全般的な雰囲気、あの当時は、やっぱり今みたいにね、理窟を言ふのが多かった、シンポジウムといふ形。しかし奈良朝時代のシンポジウムは違ひます、これは、世界が違ひます。シンポジウムといふのは、酒飲んで遊ぶことです。その間にいい智慧出るんです。

座談会といふのも、酒出してから座談会する（一同笑）酒以上に人類に智慧を与へて呉れたものほかにないですよ、飯食っても智慧

出やせん（一同笑）東洋にはお茶、お茶と酒です、お茶の方がむしろ幸福かもわからぬ。

今、裏千家や、表千家のやってゐる観光茶と違ひます、本当のお茶。さっき言った四人位が行ってね、集ってお茶を飲もうかといふ風なお茶です。お茶飲んで、全然とりとめもない話をするんでせうねえ。しかし、それは近所の井戸端会議と全然違ふ話で。井戸端会議と違ふも一つ別の、全然高尚で自然な話をする様な機会が、もとはあったんやなあ。井戸端会議では一寸ね、ほれ現実的な問題がなあ（一同笑）

お茶の時はそれだが、酒の時はね、こりゃありますで。酒の時には積極的な酒飲んで、悪いこともしますぜ、良いこともしますしね、それでね、平沢興先生が言はれましたな、酒の害といふけどね、酒がね、人間につけた智慧とね、人間を愉快にしたことね、さういふもんと較べたらね、害の方は微々たるもんである。本当にさう、思ひますね。

吉川　僕、それを分析してみて思ふことはね、だから間脳教育をやらにゃいかんと言ふとるんです。それが教育なんです。

だから保田先生がおっしゃる様に、酒を飲んだりね、といふことは、人間は同化するからられね、だから、智慧がおのづからなるものが出る訳、先刻先生が無意識とおっしゃったですけどね、自分を捨てゝるからね、小我を。

保田　そこに一番大事な智慧あるんですからね。

手習と琴と古今集と

清水　紫式部の時代の教育について話が出ましたがね、一寸先輩にね、村上天皇の女房で、宣耀殿女御といふ人がゐました。お父さんは小一条左大臣師尹といふんですけど、これが娘の時に、お父さんが教訓を与へる所が枕草子に出てゐます。先づ手を習へ、それから琴を習へ、といっておいて改まって、古今集の二十巻、千百数首ばかりの歌を全部誦んじることを学問とせよ、かういふ教へ方をしてゐます。古今集を全部暗記するのですね。あの頃の女の一番大事な学問は、歌学びだったのですね。歌が出来なければ社会生活が出来ない。男女の交渉も出来ないといふ。歌学びといふことを学問せよ——学問といふ言葉を使ってますね。

林田　稽古といふことですね。

清水　稽古なんですが、暗記させるといふところが大変意義が深いと思ひます。古今集が歌のテキストですね、あの頃は

和泉式部も紫式部も大体同じ様な教育をされてきたと思はれます、ただ紫式部の場合は、お父さんが漢学者でしたから、兄に史記を教へてゐるのを傍で聞いてゐて兄より先に覚えたので、この子が男に生れたらよかったなあと、お父さんが嘆いた、といふことが日記の中に書かれてゐます。源氏物語を書く時などにその教養が非常に大きく物を言ってゐます。

林田　でも、現在、教育が非常に慨嘆せざるを得ない状態をさまざま指摘することができますが、最後はですね、入学試験とか、就職試験とかいふ場合には、天神様に必ずお詣りに行くんですね（一同笑）太宰府の天満宮が物すごく繁盛してるんですよ。

保田　先程の清水先生のお話の、琴といふのは万葉集時代から、教育の課程のなかにあったのでせう。

清水　女の教育にはまだ外に裁縫とか、染物とか、そんなものがちゃんとあるんですけどね、それを言はないで、三つだけ言ふんですね。

林田　琴と歌とがですね、琴歌としてです

ね、それから音楽と歌とが一諸になった教養で、非常に音楽的に、文学的に、一体になった形で感染教育が行はれてゐる状態ではなかったんですか。

保田　その琴の話でね、私ね、宮城道雄といふ人をったでしょ、その宮城さんの死んだ時にね、河井寛次郎先生の奥さんといふのは、これはたいした名手ですよ、三日泣いたといふのですよ、なぜかいふと、もう宮城さんが出した音といふのは、誰も出せないといって三日間私泣きましたと言ふてをられました。西洋の音楽と日本や東洋の教養をむねとした音楽とは一寸違ふんですね。

一つの音が出るか出ないかいふのが生涯の目的でしょ。結局、自分の心を正すのでしょ。礼楽が乱れたら国が亡びるちふのはね、あれです。朝廷の礼楽を見て国の治乱を察するといふ。

ところが日本は、もう一つ上がある。大山祇の女の機を織る神話、手玉玲瓏（テダマモユラハタオ）に織紅る少女といふのです。邇邇芸命が降臨された時に、皇后を選ぶべく機織ってゐる二人の娘を見られるんです。手玉玲瓏に織紅る少女です。織をおる手玉の音によってね、その心が分ったのです。黙ってゐたけどね。それをいったら産業立国、国家安泰のモデルになる訳ですなあ、

これが。これね朝廷礼楽以上のところで考へてる、日本の神話は、もう一つ、もとのとこで考へてる。それはいくら言ってもあかんね、誰も納得せんなあ。（一同笑）

一番はじめ出て来るでしょ、あの、国を見にいって、何を見にいかれたかといふとね、政治を見にゆかれるんですわ、政治はマツリゴト、つまり産業です。日本の天皇は醇朴やさかい政治を見にいってね、一番はじめね、人を支配すること考へないです。正しく働いてゐるかどうかいふところを判断された。

それからも一つ面白いんです、そこに姫（コノハナサクヤヒメ）が二人居られる、木花佐久夜毘売と石長比売（イワナガヒメ）と木花佐久夜毘売には寿命がある、石長比売は無窮の現身の寿命をもってゐる。それでね、皇孫の命は、寿命の有限の方、つまり不老不死の方をやめられた。その通り世の中の者、誰も不老不死の者ないんですからね。（一同笑）

清水　はかなき方を選んだんですね。

保田　今は不老不死に一生懸命。人生の目的の一つにしてるでしょ。不老不死の薬を得たい、人の命が長生きしたい、何のために長生きするんか言ふと、それは判らん。（一同笑）

何もないけどね、それは人間の本能といふ。それは生命の本能だけど、楽しみといふのも、生命の本能です。毎日毎日が楽しくなかったら、長生きしても苦労するでせうしね。その辺の人の気持の分析を、もう少しせねば、非行少年の問題なんか分らんです。

笹本　西行、実朝の和歌の先生。

六百田　西行については林田さんに教へられましてね、尾山篤二郎さんの本、それと川田順さん、窪田空穂さんですか、川田順さんの方が有名ですけど、尾山さんていふ方が、うんと偉いと思ひましたね、どうでせう、本を読んでましてね、違ふんですわ。それ読んでましたらね、西行の歌の先生といふのが出てきます。あれ歌人としての立派さを考へて、段違ひですね、尾山さん。

保田　仲々の学者です。人にざっくばらんで。

林田　斉藤茂吉なんかとても及ばんですね。

六百田　尾山さんの書かれたのによると、大原の三寂といはれる莫逆の友がゐた訳ですね、それのお父さんで木工頭で為忠ですか、といふ人が居られて恐らくまあ、その人あたりが近いから、その人に教へられたんだと書

いてありましたな、恐らく十五、六才頃から歌を学ぶことを覚えて、西行の師匠はほかに考へられぬと書いてありましたな。それと実朝の場合には、定家の弟子に内藤朝親といふのがをって新古今集を鎌倉に持参した。どこであれだけの歌をですね、どういふ風に学んだかといふのが全然出て来ませんね、実朝の場合は。

清水　初めはやっぱり自分で新古今集から入って、それから万葉集を、定家から近代秀歌とか万葉集を贈られてゐる。

保田　あんな偉い人をったですなあ。定家とか、俊成とか偉い人をったです。あんな人をったらね、矢張習ふ気するでせうなあ、誰でも。

林田　先生、後鳥羽院といふ存在はですね、西行にしても実朝にしても一応意識してをったんぢゃないですか。

保田　西行さんはね、むしろ崇徳上皇です。崇徳上皇のことが頭からのかなかったでせうね。

うちでね京の家をつくった時、梅の木を庭に植ゑたんです、一本ね、梅は植ゑんといかんのです。教養がないちふことになる。昔から文人墨客の習慣でね、田舎の習慣です。白い梅より紅い梅といふ。初め蕾の時は真紅ですっと開いたらね、淡い色になるのが最高といふんですね。

それを昔田舎で聞いてね、その時は穿鑿せんかったが、後に崇徳上皇の御製読みましたら、そのこと書いてあるのです。

さういふ風なね、千年程のことが崇徳上皇といふ御名前で伝はってる。今の御所に行くと、真紅のも薄いのもあります、御所の中ではそんな差別してないですね。

かういふ教育も日本にあるんでね、面白いですね。

もっと古いものにあるんか知りませんけどね、今のところそれから先は、知りません。清少納言にあるのと違ふかといったんですけどね。

封建時代の教育と理想

笹本　次に参りまして封建時代の教育と理想につきまして。

保田　うちの方では、学問の伝統も、生活に密接な教育もね、まあ殆んど南朝時代からの習慣です。村の形にしても、道にしてもほんの最近、大東亜戦争前までは年中行事でもね、ずっとその時代からですなあ。大平記に、鎌倉の政権が倒れた話を書いてるでしょ。関東武士が楠公に敗れて、歴代の名器とか系図といふものを全部捨てゝ帰った。

あれはえらい革命です。習慣なんかでも室町時代からのち、場合によったら記録でも残ってます。

清水　室町時代ぢゃないですか。今の生活の中に一番残ってゐるのはね、料理だって、住居だって。

保田　それから大閣さんが出て来て、天下統一するね、何も大閣さん一人がした訳ぢゃないけれど、まあ、色んなものがね、あの時花やかに出てくる。

芸術に関しては、少くとも足利時代、お茶にしましても。お宮座なんかもさうですね。

竹川　熊野の山王さんいふのは何時頃ですか。

保田　あれは平安朝ですわ。

竹川　それがですね、平清盛が作ったこゝの厳島神社の行事といふのは、すべて熊野の山王さんのものださうですね。お烏喰式神事にしてもさうなんださうです。厳島神社固有のものは一つもないといふんですね、と言ひますのが、厳島さんの前に熊野の山王さんが

昭和丙午歳回顧■六百田幸夫

睦月

筑紫嶺にみ雪ふるらしほの明る頂あたり神のごと見ゆ

如月（遭難後三年）

夜もすがら海に鳴る風熄まざれば醒めてののちは苦しかりける

弥生

この朝の光りをうけて明る妙さゞめくと見ゆ春の笹原

卯月（出版記念会）

眼くるめく花の宴や計らひにそぞろ歩きの泣くべくありけり

皐月

朝鳥のひき群れさわぐあかときをうつつの夢と思ひゐるかな

水無月

也良の崎とほく見えつつ夕霞みむかしの人ぞ漕ぎわたりにし（也良の崎は歌枕）

文月

香椎江に玉と拾ひしさざれ石よ泣きぬれてこしこころのいたみ

葉月

かねたたきふと鳴きいでて秋の夜の浅き眠りをまた醒ますなり

長月

夜をこめて秋の雨ふるひそけさや布団かきよせこほろぎを聴く

神無月

夕まぐれ風冷えまさるをりからに雲間をきりて満月のぼる

霜月（笹本兄に）

観世音寺の鐘の音暢びて消ゆるならむ宝満山のふところあたり

師走（展明兄に）

遠賀川なる　水上の　太古さながら　澱む瀬に　生れしいのちか

さもさうず　火をも怖れぬ　おほ河童

祀られとったさうです。たゞ平清盛がこの地方の海賊—水軍を鎮撫するために、海の神さんである市杵島姫を厳島に勧進なされた訳です。ところがあれが海べりにあるでしょ、海べりにあるといふのは、何もあそこを下したんぢゃないさうですね、岡に山王さんがをられるから、その陸に建てるのは御無礼だと、まあ仁義に反するいふ訳ですね、それで海のそばへ遠慮して建てたのが謂れらしいでゃね。それでその行事が全部山王さんの行事だったさうですね。

保田　院政時代でしょ。院政時代といふのは不思議な時代ですからね。色んなもの沢山出てくるでしょ、宗教にしても何にしても、彫刻にしても絵にしても、不思議な絵ありますよ。いゝです、今まではね、悪くいってましたけどね、考へてみましたらね、院政時代の芸術、いゝですね。あれからあんまり変ってません。

後白河法皇とかね、後鳥羽上皇とか、あんな偉い方々です、三十三間堂あっと言ふ間に造ってみたりなあ。大変なことですわ。かと思ふとびっくりする位小さい仏像を作ったり。不思議な時代ですなあ。それで、世の中は悪かったんですなあ。支那の国が乱れまし

たからね、随分乱れたですよ、あの頃。あれからしばらくすると、どんく日本へ逃げてくるでしょ、元寇の前ですもんなあ、向ふでは異民族が度々侵入して来るんですね、日本にはそんなことなかった。

竹川　儒教、所謂孔孟の学といふのが、相当広範に普及しだしたのは何時頃からですか。

保田　非常に広範に普及しだしたのは徳川時代から、やっぱり五代将軍位からでせうね。その先からも偉い儒者沢山居りました。しかし偉いのが一人居った方が地方教化はいゝのと違ふか。

林田　儒教的な教育のきっかけをお作りになったのは、やっぱり後醍醐天皇だと私は思ふんですがね、徳川以降になりまして朱子学と、さうでない徂徠だとか熊沢蕃山だとかいった様な二つのものが出て来ますけれど、やはり直接的に宣長の学問に脈うつものは、蕃山だとか徂徠ぢゃないかと思ふんですがね。

清水　徂徠から非常に享けてゐるでせうね方法的にはね。

「小倉百人一首」は江戸に入って歌留多になって、家庭に入ってきた。玩具の形で子供達の心の中に歌のリズムがおのづからに入ってゆく。教育しようとか何とかいふのでなく遊びですね、楽しく遊んでゐるうちに古い歌のリズムに親しんでゆく、さういふところから歴史を大事にするとか、古い物を大事にするとかいふ情操がおのづからに養はれたんぢゃないですか。これは明治まで生きてゐますし、今日まで尾を引いてゐるかも知れませんね。これはやはり、先程言った無意識の教育といふことに関聯するんだけど。結果から言へば、やっぱり大きなね、教育的な、役割を果してゐると思ひます。

笹本　心学といふのがありますね。あゝいふ心学の学問と儒教の学問とのつながり合いといふのはどういふ風になりますか。

清水　色んなものが入ってゐるでせう、あの心学の中には。儒教も、仏教も入ってゐますし、神道も入ってゐるでせう。色々な要素が流れ込んでゐるんですね。そして庶民を教育する。庶民に働きかけるものになってゐる。

同文同種の発想

保田　胡蘭成先生の話では、日本の神道と言ふのは、支那では老荘の教へのもととなるものと、あれと殆んど一緒で、その点で儒教とは仲悪い言ふてました。殆んど神道に似てる、ところが日本の神道の方が、も一つ上等や言うてました。本居宣長は老荘の説を批評する時は随分苦労してゐる。

それで胡先生の田舎の話を聞くと、行事は神を祀る行事から、暮し、食ひ物までよく似てゐる。あなたの家に来たらね、自分の田舎の事を思ひ出す、かう言ふんです。中国のこと書いた本あるでしょ、大方は何も知らないでみな嘘書いてるんですって、本当のこと書いた本一冊もないって（笑）それで、そんな嘘ばっかりをあてにしてね、大東亜戦争したんですからね、こりゃ大変なことになるね。胡先生の話なら殆んど同じ習慣持ってます、五四運動のころ学生の暮しぶりでもね、吾々と同じ事してをった。

革命といふのは、よそから金貰ってきて酒飲んでるだけやないかと高島（賢司）が言ふと胡蘭成先生、その通りや言うたもんです。（一同笑）

竹川　仏教との問題はどうです。

保田　仏教の方は、儒教とも道教とも違ふ言ひます。大分違ふ言ひますね。いくとこまでいったら一緒でしょ、印度人の考へには、納得いかんとこ大分あります。日支同文同種

残紅集

故河上利治先生追悼

西村公晴

君この世にいまさずなりていたづらに寒きしぐれの雨ぞ身に沁む

このゆふべそらもこゝろもかきくれてうつろごゝろに雨ふりいでぬ

あまりにも惜しきいのちぞ君すでに世にいまさずと思ふに耐へめや

いへばとてせんなきものを今十年生きていまさばと言ひて声のむ

悲しともくやしともつひに言葉にはいひ難きこのおもひ身にしむ

大道直門たれはゞからぬ益良夫の大人が雄ごころ我はたのみゐき

かゝる世の嘆きおもへば大いなるきみが雄ごころ我は忘れじ

やる方なきおもひは遠くいでて来てこゝろむなしもよ那智の大滝

さだかには何おもひゐしとおぼえねど道あるきつゝ涙おちたり

散りいそぐさくらのおちば冬の日になほあえかなるくれなゐ残す

といふ言葉あるでしょ。戦争中この同文同種の話をよく聞いたけどね、納得いかなかった、それで胡蘭成先生に言ったんです、誰があの言葉を言ひ出したのか。するとね、はじめ考へてましたですね、そして孫文と違ふか言ふんですね、孫文がどういふところで同文同種といふことを判断したかいふとね、多分ね、九州あたりの田舎の習慣で暮してゐたでしょ、その時知ったのが同文同種なんですね。胡蘭成さんから田舎の行事など聞いてましたら、成程これは同文同種と分った。田舎の暮しからです。書いたものの同文同種と違ひます。あれは、みな嘘です。「文」は、これはまあ大体分るわ、「種」の方は本当かどうか分らんですよ、「文」の基になるもの、「たね」の方はね。

胡蘭成先生の話を聞いて、「たね」のも一緒だといふこと分ったですね。「文」は文明で「種」はその文明の種だったのです。それはぐらしからわかります。

うちの方の田舎で、ある家に他から養子が入るとその家は格が落ちるんです。それをこの間考へてたのですが、その家の爺さんがね、養子にはもう教へないんです。何で教へないかといふと、排他的ではないのです、そ

んなこと教へたら、軽蔑されると思ふんですね、家の行事、祭祀にはそれ程馬鹿々々しいと思へることが沢山ある。それでね、男子の生れるのを一生懸命待ってる、長男が生れた時に教へようとするんですね、そのうちに年寄って来たら忘れる。（笑）教へることを全部忘れることはないですけどね、すると少し位学問が減るでしょ、それで家柄がおちるんです。それが又、縁組なんかの時の話に出る。（一同笑）

そりゃもう、阿呆らしいことですわ（笑）合理的やないですね、そんな阿呆なこと何でせんならんか思ふたらね、それでもうがっかりする。（笑）

考へてみたらね、それに意味あるんです。同文同種とは、同じ文字を書いたとか、孔子の教へを習ったとかね、そんなことと違ひますね、そんなのは付け焼刃です。

何から直していくか

笹本　最後に、吉川先生は現場で教育に従事してをられて、今の教育で一番問題になる点は、どういふ風にしなければならぬ、この問題だけは一日も早く正さなければならぬ、といった御意見があれば。

吉川　今ね、色んなことがあるけどね、戦後の教育で一番大切なのは、先程も鞭の話が出たけどね、先づ鞭を取返さなければいかんと思ふ。それから制度的にいかんわなあ、六・三・三で分断してあるから、これがいかんね。何か一本すーと透ったものが必要です。男女共学は考へる必要があるね。男女共学でいゝのは小学四年生迄と大学だらう、大学でも、先生、別の方がいゝんぢゃないですかね、あの中学・高等学校は特に、男は男として、女は女として、育てるべきぢゃないかと、これは制度の問題。それからね、多過ぎるよね、色々教科書がね盛沢山、御馳走が多過ぎる、だからもっと単純化すべきぢゃないか、教科内容が。

こりゃ制度が悪いんだけれども、猫も杓子も大学へ行かうとしてゐるね、これをね、無くしないと駄目だね、だから試験地獄になって来て。入れちゃったらいゝんだ必要なんなら。さうするとね、今に馬鹿大学まで皆出来る、精薄大学が出来るだらう思ふ。

保田　大学へ沢山行きたがって、行きたがるのは無理ないです。それでまあ卒業させてます。あれ、を卒業さすのがいかんですなあ、あれ、さす資格ない者は卒業させなからいゝと思ふんです、入れるのは入れてもね。

吉川　昔の高等学校の生徒は、こんな下駄はいてなあ、あゝいった様などっかゆとりのある教育をやらした方がいゝんだ。近頃はもう、入ったら紳士になってなあ。学生らしい服装もしてゐない。かういったところがね、制度の面から根本的に、もう一ぺんもとに返へさなきゃいかん。

笹本　天才教育といふ面ではどうですか。

吉川　そりゃいゝだらう。真面目にそれなら、私は賛成するけどね、どちゃ〳〵ぢゃ駄目。今はもう、単位だけを問題にしてゐる、だから私は単位修得株式会社だといふ、今の教育を。

をかしいと思ふことは、七十になってもね、帝国大学を出たとかね、何とかいって。学歴が必要なのは三十代迄でしょ、あとはもう皆ね、大日本帝国大学を出てるわ、日本人であるなら。そこらに問題があるんぢゃないかな。

林田　やっぱり、国の責任のある教科書を作るといふことが。

保田　全部の教科書はね、共通してなくてもいゝですけどね、一冊だけはある方がいゝですね。例へていったら国語読本みたいなもの、一番必要なのは国語読本ですね。私たちハタ、タコ、コマ、ハトといふ本を習ったですけどね、教科書が国中共通してゐるといふことは共同意識の原因となります。

林田　ハナ、ハト、マメ、マスですね、花の次が鳩、そしてマメ、マスと季節の移変りとですね、句づけだとか物づけだとかね、かう繰返してゆくところに、すっかり芭蕉の俳諧調の文章。

保田　さういふとこはね、日本人の気持、性格から抜けきらないですね。

清水　俳諧などあそこがもとですからね。

保田　それは従って、何か、先生といふんでなしに、同じ道をゆくんですね。西行法師なんかにしてもさういふ風な先人がをった、その人の暮しぶりの真似をするのですね、歌を上手になんて考へをもってないのです。同じ暮しをしたいちふ考へ方です。西行法師のしはった暮しをね、吾々でもしようと思ったら出来るでしょう。芭蕉の真似でもね、さうすれば芭蕉みたいな気持に多少なる。

清水　佐藤春夫先生、晩年に俳句をやられましたね。

保田　談林の俳句でね、あれが一番面白い、庶民ののんびりした暮しです、談林はね。

華麗なる終焉　大谷多香子

緋牡丹の卓に花びら重ね散るこの華麗なる終焉のさま
老残の身を憩わせて眺めおり散らんもみじのこの華麗さを
老来の夢なお失せず死ぬまでにせちに逢いたきいち人を秘む
鎧いたる心ほぐるる過程にて緑色のキュラソー、グラスにゆらぐ
灯を消して皆寝しずまる奥露地の庇あわいよりのぞくレモン色の月
食物の嗜好もいよよ相反し争いやすく余生刻みゆく
あらがいし夫は出でゆきて我のみの世界がおもおもとたちかえり来る
権威なき母の言葉とわがなりて保つ平安に沈みつつ座す
死してなおみ開く魚の澄みし眸に生きて見難き街を写せり
ぼけの花からくれないに咲き盛り燃え切れぬものの如きかげ持つ

清水　指で数へながら作ってをられた。あの大詩人がね、かうして机の下で。

保田　佐々木（信綱）先生。六つ位の時から作って、八十何年間かね、指を折って、（指を折って数へる手つきをしながら）

吉川　リズムがあるんですね。

保田　それやらんと歌ができない。

吉川　さっき宮城先生の話出ましたけどね、例の何か来てるね、カラヤンか、あれ、テレビで見てゝね、はからずも宮城先生を思出してね、あの人眼は見えないんだけど、弾いてる時眼があいてるんだなあ。ところがテレビなんかで見る指揮者。かういふ風に（身振りしながら）してるけど、あれ寝てるよ、ねえ。

保田　私もテレビで見てましてね、もう、こんな、恥かしくなったなあ。

吉川　私もいゝと思はんですなあ。それで、さっき先生のおっしゃった様に、日本人といふものとね、西洋人といふものゝね、発想から違ってゐるんぢゃなからうかと。

保田　もうねえ、考へてることが違ふでしょ。そりゃ、今の絵にしましても、全然違ひます。考へ方違ひます、そりゃ、もう、合ふとこないと思ひますね。

吉川　ピカソなんかの絵を見ても、むしろ日本の俳画やなんかの方が影響が多い様な気がするんですがね。

保田　あゝいふ風なものが今の念願でしょピカソなんかの様な強烈な、言ったら動物的な、あゝいふものはつまらんといふこと分らん限りどうにもならんです、分らすのは、えらいことですぜ。

それで、あれは駄目やなあといふことが分ったら、それは人間の精神革命です。岩にしみ入る蟬の声が、分るか分らんかは、えらいことですからね、分らす方法がないでせう、教へても分らんものなあ。日本人にすら分らす方法なくなってきたです。それでさっきの教育の話ですけどね、文部省の作ってる指導要項といふのあるでせう、あんなもんに拘らなくてもいゝと思ったんですけどね、だんゞこの頃ね、丁寧に世の中のことゝ照し合してみて、やっぱり悪いですね、あれは。あれが一番の悪いもとになってますなあ。

吉川　考へない人間作っちゃふ訳ですよ。

笹本　では一応この程度で。

（構成・笹本）

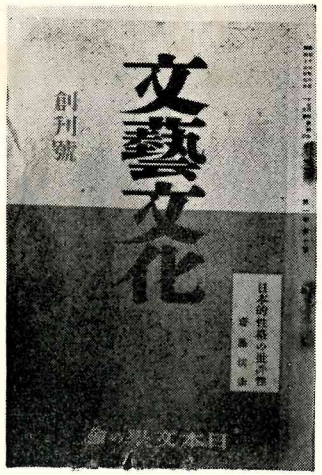
桑原武夫
小高根二郎 編
富士正晴 共
伊東静雄全集
人文書院

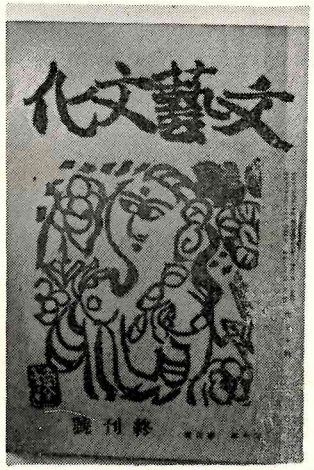
浅野晃
忘却詩集
黄土社

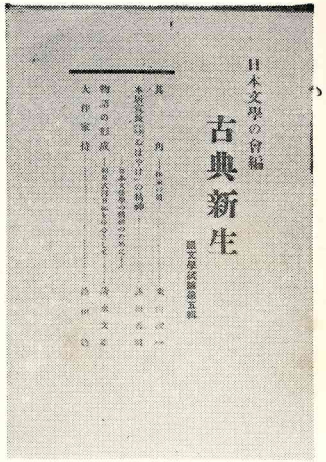
定本
中河与一全集
全十二巻
角川書店

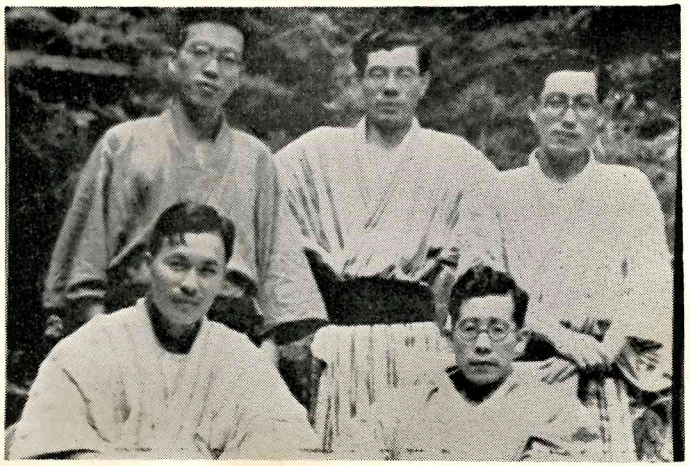
マダーチユ・イムレ
今岡十一郎訳
人間の悲劇
審美社

特輯
雑誌
文藝文化

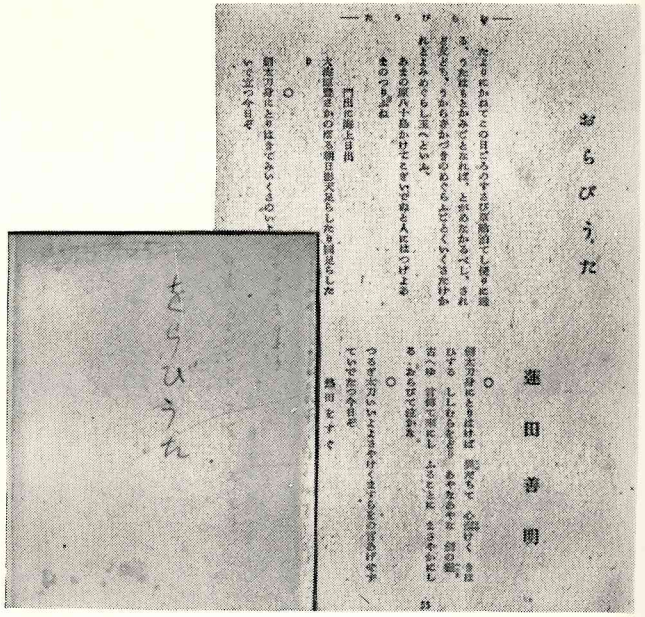








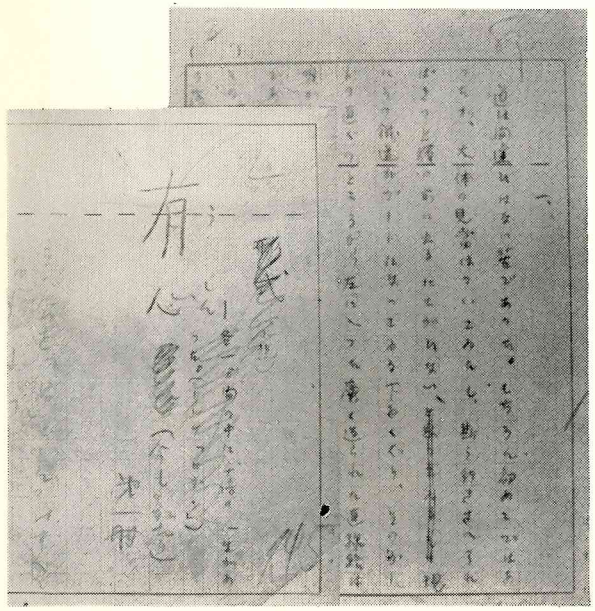
昭和12年8月
高野山遍照光院
池田勉
清水文雄
斎藤清衛
栗山理一
蓮田善明



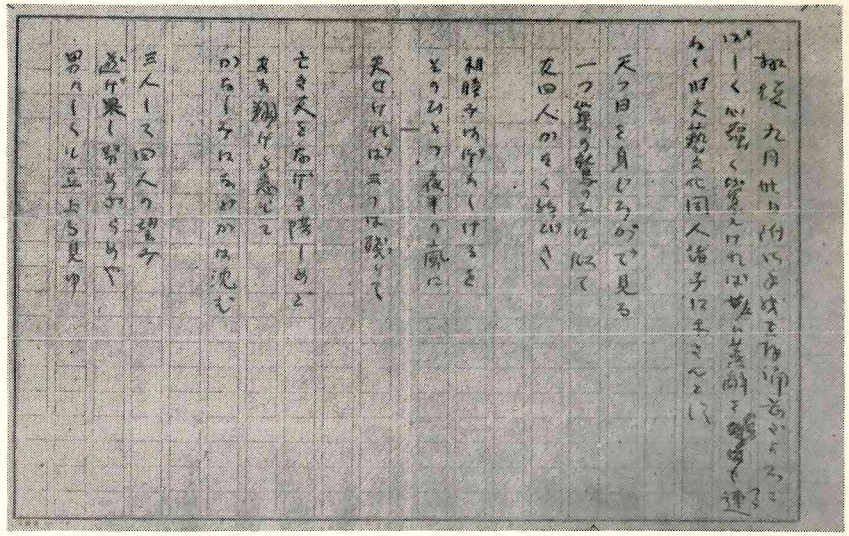
おらびうた

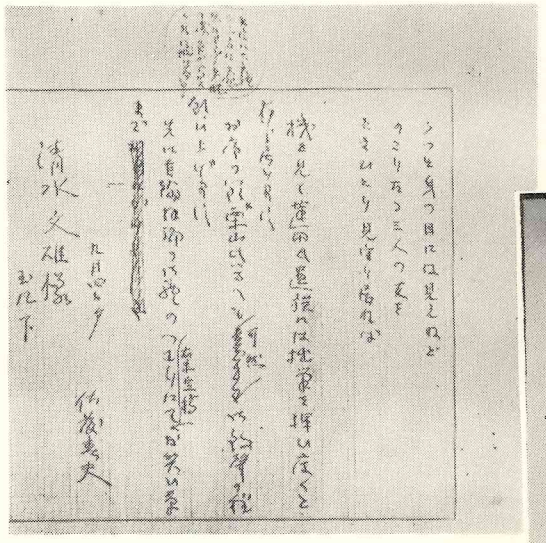
蓮田善明

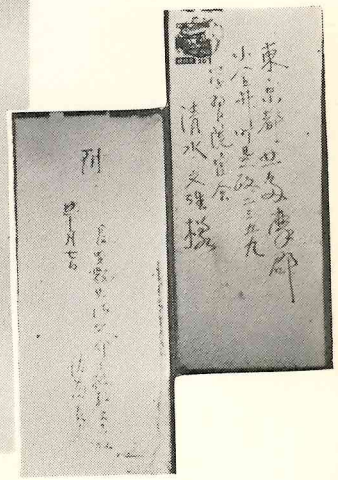
右「文芸文化」終刊号55頁所載。
左昭和18年12月　佐藤春夫氏がジャワ島スラバヤで遭遇した蓮田善明氏より託された手帖の扉。この手帖は縦13㎝横10㎝、表紙は淡青色のクロース、背に蓮田善明と金文字で印刷されてゐる。本文はすべて鉛筆書。



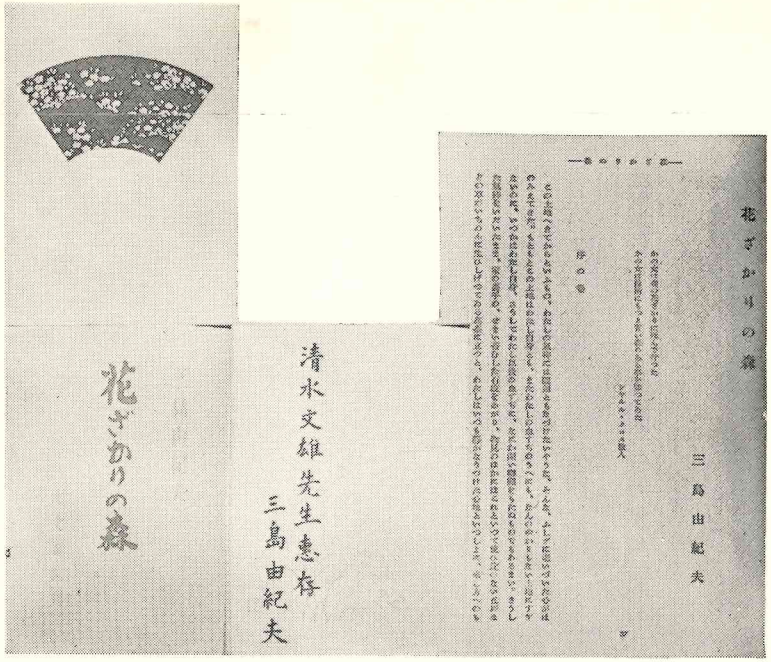
蓮田善明の遺稿の一つである小説「有心」（今ものがたり）は、氏が第一次応召から帰国した昭和15年暮、郷里熊本の温泉で静養中発想し、昭和18年10月第二次応召で渡南間際に一旦帰国し、現在までに二度公表された。そして第一回目は雑誌「祖国」（バルカノン第20輯を参照されたい）の第一回目の予定であったが板行に至らなかった「祖国」同人の手で単行本として昭和25年5・6月号に連載され、第二回目は雑誌「樹園」の第一〇四号から第一〇九号を除き六回に亘り連載されてゐる。第一一〇号まで、ここに掲載の写真は小説「有心」の原稿の写真であるが、左はその第一頁目で本文はこゝからはじまる。







昭和21年10月7日　長野県北佐久郡平根村
佐藤春夫氏より　東京都北多磨郡小金井町是政2359学習院官舎内　清水文雄氏宛書翰



右「文芸文化」昭和16年6月号37頁所載.
これが第一回で、同年12月号まで連載された　左上「花ざかりの森」（昭和19年10月七丈書院刊）の表紙。　下右同書見返、下左は同書の扉　そして、装幀者は徳川義恭、ちなみに、この「花ざかりの森」の紹介写真として、著者名・書名・出版社名を大きく三行にレイアウトしたのが使用されてゐるが、それは本書のカバーである。

昭和11年6月28日
清水文雄宅庭
（東京府北多磨郡千歳村下祖師ケ谷）
斎藤清衛
池田　勉
栗山理一
清水文雄

創刊の辭

傳統の權威地に墜ちて古典を顯彰するの醇風も亦地を拂つて空しい。日本精神の聲高く宣傳せらるるあれど、時に現實粉飾の政論にすぎず。藝文の古典は可惜功利一片の具と化して、無法なる截斷に任され、所謂國文學の研究は普及せるも、故なき分析と批判とに曝されて、古典精神の全貌は顯彰せらるべくもない。嗚呼、古典の權威は地に墜ちたり。今にして之が復活を想ひ古典の黎明を呼ぶにあらざれば、我が古典の精神は終に喪はれんのみ。

此に思を致し、我ら相寄りて「文藝文化」の創刊を以てその所信を述べんとす。蓋し偉れたる古典は生命の頂點に於ける開花であり、高揚せる傳統は精神の醇化されたる成果であること、今更言ふを俟たない。かゝる開花と創造とに拂はれたる人間の營爲と献身とは、之を計量する術もないが、その開花の古典は燦然として今日の我等を指導する。今や我等の義務と責任は、この傳統への心からなる感謝と安んじての信從とであらねばならぬ。寧ろ今日の日に在つては傳統は神さびて嚴しく命ずるを聽く。かく命ずる傳統の何ものであらうとも、内に命ぜらるる嚴しさを我等は信ずる。

されば我等はもはや傳統について語る必要を認めない。傳統をして自ら權威を以て語らしめ、我等はそれへの信頼を告白し、以て古典精神の指導に聽くべきである。

傳統については屢々語られもした。然し傳統をして語らしめ、傳統の權威への信頼を語りしものは近來未聞に屬する。これ今日の義務ある營爲として我等に課題するところ、本誌の刊行によつて、その達成を期しうれば、以て瞑するに足る。

いささか所思を披瀝して、創刊の辭となす。（池田　勉）

「文芸文化」創刊号 2～3 頁所載

文芸文化叢書・解題1

■刊行趣旨　文芸文化叢書の発刊について

ひさしく、日本文学の優しくして高貴な精神や崇い倫理を心になつかしんでゐると、いつしか、この愛情の底から、私達には、新しい日本の宏遠な決意がよびさまされ、育まれてくるのを感ずる。すると、これまで単に遠い過去と考へられてゐたものが、この決意の燈の中で、生ける伝統となって燦然と輝き初めるのを観た。そこに私達は信頼すべき日本の血統を発見した。献身の場所を見出したのである。ここに身を置いて、私達は、はじめて世界への新しい繋がりと拡がりとを意識する。これは今日に於ける、日本の正しい体験ではないか。さう考へるならば、私達の生んだ此の一つの思想と雖も、現下の日本に存在の理由を確かに持ち得ないものではない、と信ずるが故に、敢へて私達は此の叢書の成立を企てた。日本を愛しその芸文のこころをなつかしみ、うるはしい伝統を慕はれる方々の清鑒を希ってやまない。

昭和十四年十一月　日本文学の会

■叢書一覧

叢書番号	部別	書名	著者	発行年月
1	①日本的性格の文学		斎藤清衛	14/11
2	①鷗外の方法		蓮田善明	14/11
3	①風流論		栗山理一	14/12
4	②詩集夏花		伊東静雄	15/3
5	①言霊のまなび		池田　勉	15/5
6	①女流日記		清水文雄	15/7
7	②日本の味		大山澄太	15/8
8	②詩集大陸遠望		田中克己	15/9
9	①文学の発生		風巻景次郎	15/10
10	①預言と回想		蓮田善明	16/1
11	①二葉亭四迷		坂本　浩	16/3
12	②門の中		南蛮寺万造	16/5

■体裁　新四六版　洋装・カバーは全巻同じ、厚表紙は白地、上部に書名は一号明朝、著者名は三号明朝で横組（但四冊は別装）

■本文　約二五〇頁、■価一円平均

■発行所　子文書房（東京市小石川区白山前町四七）

回顧と感謝 ■ 保田與重郎

昭和某年、多分八、九年ごろかと思ふ、斎藤清衛先生の旅行記が出版された。そのころ、我国の国文学研究法について一種の反省と、それ以上に新風を要求する気運がこの界裡にあった。すでに明治以来の「国文学」に代って、「日本文芸学」といふやうなよび名で、新しい学問方法をつくる努力をしてゐた一つの傾向もあった。当時私は「コギト」を創刊して二、三年をへたころで、この「文芸学」「芸術学」の領域では、その時代のドイツ風だった「ユダヤ的文芸学」と、あはせてカント派後期以後の所謂文化哲学的傾向を排し、初期ドイツ浪曼派の漠然と描かうとしたミュートス的なものや、ゲミュート風なものを、我々の見地から考察する主張をしてゐた。初期ドイツ浪曼派や、あるひはゲーテの「西東詩集」的感銘と憧憬を、我々の親しいものとうけとってゐた。

私は、その当時、東北大学の岡崎博士を代表とする「日本文芸学」や京都大学の和辻博士を主峰とする芸術や文学についての思弁方法を批判してゐた。斎藤博士の「旅行記」や折口信夫博士の「古代研究」にあらはれた国の文学の一つの学び方を、国のこゝろ、国の魂、国の精神、国の感情に即して、私は尊重することを、明白に主張したのである。

私のつけたこのけじめは、わが国の近来の国文学研究史上からも大切なことだが、当時所謂国文学者の間では、このけじめの大切さと、その原因をみることを殆んどなし得なかった。これは国文学者が、西欧の美学や芸術学の系譜や方法についての教養と理解がうすかったからで、このことは今日さらに甚しいやうに見える。

折口博士の古代研究の方法は、その後「民俗学」といふ呼び名で流布した。しかしこの「民俗学」の後継者は、私の見るところでは博士のこゝろをこゝろとせず、その一番皮相的な手口だけをまねてゐるやうである。枕草子や源氏物語、さらには和泉式部といふやうなものの出現する文明の歴史を解することなくして、国の伝統観はないのである。また文学のこゝろや美を解し得ないことも明らかである。後鳥羽院以後の日本の文士の懸命の願ひがわからなくて、何が日本の文明史の解明であらうか。

「文芸文化」といふ雑誌が出た時、私はその以前から清水文雄氏の王朝風文学観を珍重敬服してゐたが、この人々が斎藤博士の教へをうけた人々だといふことを私はまだ知らなかった。「文芸文化」の人々は数少なかったし、斎藤博士のまねやすい手口をまねるやうなことをせず、こゝろを思ひとして多分に別個の領域へ進んだ。これはすが〳〵しい学問の性格であって、我々の方の伊東静雄の詩など、この人々の心情を通じて、多くの人々の理解を得た。この多くの人々の理解をうるといふことは、その詩の世界を現実界でひろくゆたかに大きくすることである。内包してゐたものが、かうして現はれた。この私の言ひ方は、両界曼荼羅観に相似してゐるととられてもよい。

清水氏の国文学研究方法は、さういふ意味で、心持がその師に通じ、しかも氏自身のものだけでなされてゐた。その古典研究に於ては、精密細心だったので、私は多くの恩恵をうけたし、今もうけてゐる。その文学史観も作品批評も私と非常に親近だった。清水氏の学風は、詩人性と学者気質が、均衡してゐるのである。それは詩人のこゝろが、たとへばテキストの考証をしてゐるといふやうな云ひ方が、常識的には通り易い。清水氏の学問には、口でいへない大切な目的がありそれが熱情に現はれる。その目的は、卑俗の目的でないから、完全に文学であり、その人は詩人のこゝろを現はしてゐる。もっとすゝんでいへば、国の第一義、民の第一義、人道そのものの第一義を目的とした。

この「文芸文化」の蓮田善明氏は、その最後に於て、最もはげしく厳粛で、畏怖を思はせるやうに見られてゐるが、その「文学」と「詩人」に於て、根抵本質では清水氏とよく似てゐた。このことは、最も温雅秀麗な清水氏が、内に日本人の最もつよくきびしいものを蔵してゐるといふ意味である。その片鱗は、清水氏とつきあった人なら、温和の座談の合の手に必ず経験したことと思ふ。高い文明と美を解するものが、清水氏の学風成果を最も珍重するといふわけである。

私は蓮田氏を畏敬してゐた。その悲壮の死のあと、清水氏の見識が、戦後二十年、一貫不変にして、外容いよ〳〵精緻優雅になるのを眺めゐて、顧みて国に対する自信と民族への希望を失はないのである。

三十年前の思い出 ■ 斎藤清衛

生涯の中、三十カ年の間隔は、個人々々にとり、時に長くも感ぜられるが、時に短くも思われる。天分に溢れた昔の文人例えば藤原通俊、芭蕉、漱石など何れも五十一、二才で死去し、明治の作家一葉のように三十才たらずで瞑目したものもある。これらの人々にとっては三十年間というものはまことに永く追憶の谷となっていたことであろう。わたしは生来健康に恵まれていず、幼時虚弱であったので、小学校入学も一年遅れて七才となっている。しかし、中学校（山口県徳山）に入学以降、まずは人並の健やかさを取返したと見えて、学校のボート部員になって瀬戸内海を漕ぎまわり、学舎から郷里まで二十余キロの道を徒歩で歩むほどにもなった。もっとも、高等学校入学時代から、いわゆる小説濫読期に入り、校庭でスポーツするより、欧米文学書にかじりついている時間が多くなり、いわば本の虫のような毎日を送った。しかし相当の健康は維持して、閑暇さえあれば、小説や詩歌に出てくる名所旧蹟を単独でどこまでも巡遊したものである。これが因果の初まりなのか、十数カ年の教壇生活がわが身にしっくり合わなくなった。何でも思い切りよいのが本性なのか、旧広島高師の職を退きたいと申し出た。無鉄棒といえばそのとおり、収入のめどもつかぬに東京に飛び出して、漸く現代の大正大学、昭和女大などの講師をつとめて、原稿かせぎである。国文、国語、学校教育、一般雑誌など、求められるままほとんど毎月四五種の雑論雑文を書いて満足していたものだ。今、昭和十年前後を回顧しても古いことであるから、清水氏、池田氏、栗山氏、蓮田氏（蓮田はやゝ遅れて参加した）などが同人となり、国文学の雑誌を月刊する計画を立てたりした。その初めは記憶にはっきりしないが、大学時代の旧師垣内松三先生に懇願し、高野山で近畿地方に呼びかけ夏季大学（講習会）を催したりしたものだ。平日は東京郊外の千歳村に住み、しかも農家の一室を借って自炊でその日暮らしをするなど、今顧ても、やや乱暴にすぎたようだ。妻子を郷里に留めていたので、しばしば同人たちからそれを注意されたものである。これは一カ年足らずの期間であったが、欧州旅行、即ち世界一周を胸裏に予定していた結果かもしれぬ。とあれ昭和十一年の年末、米国から帰朝し、農家の軒先に鳥の巣のような小屋を造らすことにし、昭和十二年妻子を郷里から漸く招くこととした。（現代、居住している家が、その時建てたそのままのものである。この数年間に周囲に高いビルが建てられ、当時農家の草葺などは影を消した）しかし、家であれば小人数で住むに差支えなく、客間にあたるところには、「文芸文化」の同人たちがしばしば集会し、ハイカラに云えば一つのサロンというべき室となった。時の移りというべきか、時には同人と小宴を催して、文学将来の革命を討論したことなどもあった。月刊雑誌には、「国語と国文学」「国語・国文」の以外に、「解釈と鑑賞」「短歌研究」「俳句研究」「文学」「国語教育」などがあって、何れも採算よろしく売れたものらしい。前記した垣内松三先生は昭和十二年をもって還暦となられた。そこでわたしの提案で、東条操氏、西尾実氏、岡崎義恵氏、久松潜一氏、山岸徳平氏などに計り、還暦記念論文集を編纂して献上する手筈を立てた。七百ページ、洋綴の大冊であったが、出版社が承諾してくれたので三十一名の寄稿を集成することができ、内容を「方法・理論」篇七論文、「様式」篇五論文、「文芸史」篇十一論文、「ことば」篇五論文、「思想」篇四論文を収めることができた。こうした還暦とか古稀とかに作られる記念論文集は、何れも部数が少いため今日、大学研究室や地方図書館などに収蔵されている例が乏しく、従って研究資料に利用されている場合が尠いけれど、その中には、東条先生の「関東地方の方言

（カバー）

「日本的性格の文学」斎藤清衛著（叢書一）
■14／11／18刊（16年四版）・300頁・一円20銭
■文部省推薦図書（15年）
■目次

序言　日本文学の本質とその自覚の必要
総説　自抑の文学／人間像としてのわが文学／文学伝統と外来文学の同化
和歌・俳諧　万葉文学に於る素撲性の吟味／芭蕉文芸と現代文化／精進道としての和歌
物語文学　源氏物語をつらぬくもの／狭衣物語の表象／わが戦争文学の性格
日記・随筆　記録より随筆へ　天暦期を背景としての蜻蛉日記／日記物について
結言　新時代の日本文学

■紹介の言葉

日本的のものへの関心と根強い探究心－わが肇国以来およそ今日ほどこの風潮の強化され高潮化されたものを見ない。しかも、つねにその問題がその帰趨をえないのは、日本文化の固定的一面と共に流動的の半面あるを無視するからである。本書は日本文芸文化に関する課題を解明したものであるが、日本精神に於る遠心性の意味を充分考慮した点に特色がある。いはゞ、日本文学に於る求心的のものの内容が、博士の卓抜なる史観によって、始めて生命化されたと評することが出来るだらう。

「日本文学の本質とその自覚の必要」「自抑の文学」「人間像としてのわが文学」等の諸篇は、何れも、全体論的のものであるが、その他に律文学、小説文学、日記随筆文学等、文学の各形態に亘り、さまざまの細論が加へられ、豊富なる問題が提示されてゐる。

（「文芸文化」昭和14年11月号奥付広告）

■書評（文芸文化15年2月号）

「日本的性格の文学」について（風巻景次郎）

分布」とか、鈴木敏也先生の「馬琴の歩いた俳諧の迹」などの論文も含まれていた。それから、文芸文化同人の企画から、「文芸文化叢書」が逐次発刊されたことも時代相を語っている。蓮田善明著「鷗外の方法」栗山理一著「風流論」清水文雄著「女流日記」池田勉著「言霊のまなび」拙著「日本的性格の文学」南蛮寺万造著「門の中」などが、最初出版された書名である。一般に月刊の国語国文学雑誌も内容豊富で中には、春秋二季に特輯号と題して二三百ページもあるものを売出したものである。最近は、物価騰貴につれ、月刊研究雑誌とは、名ばかりで、それも六七十ページのものを一百円以上の価格をつけている実状である。大学の国文学科はまさに国内に一千に達するという噂さえあるに対し、購買者はあまりにも少数である。たとえば、全国大学国語国文学会から一カ年四冊出している研究雑誌は、会員ふくめて、せいぜい六七百部しか刷っていない状況である。売り出される数量によって、学界の上下は判定しかねるが、これは編輯方法に係わるものが多いのではないか。つまり、戦後の社会に純文学が衰えたように、今日の国語国文学界は、骨董趣味に淫せられ、異本の考証、初版本の収集、古写本重視――などに偏し、ある方面では、明治時代の稀本を集めている神田の古本屋の手先になっているような弊さえもないではない。

こうした学界の傾向に比較すると、三十年前の学徒は、今少し良識を持っていたようだ。何も研究の目的は精神方面にのみ限定されるべきではないが、当時の学界に岡崎義恵氏著の文芸学の各書、津田左右吉氏著の国民思想の研究書などが遺してくれた功蹟はまことに偉大である。昨年、小高根二郎氏が「伊東静雄の研究」を著作されたことで聯想されるのは、伊東静雄氏が清水氏の案内で、時折、文芸文化同人の会合にも出席されたことである。小高根氏編輯の雑誌「果樹園」には、すでに三十一回にわたり「蓮田善明とその死」が書き続けられていることも、こうした因縁に基いている。昭和十三年、清水氏が成城学園から学習院へ転任し、そのあとに蓮田氏が、成城学園に就職することとなったのである。

その年前後から、わたしは国民性や、国民文学の中に「陰の理念」の深刻なこと、虚無的思想の色深いことを看るようになって、古人の中、西行、兼好、芭蕉などの生涯に対し多分の味を感ずるようになった。その基本はヘーゲルの哲学や西田幾太郎氏の説から来たものか否か明言できないが、柳田国男先生から民俗学の指導をうけ、清水精一氏から、人間として大地に生きる説を承るなど、学者としてはやゝつむじ曲りの方向になってしまった。これには、戦争の勃発、家族内の不幸という事実も係わっていると思うが、文芸文化同人にはいろいろ迷惑をかけたことと思う。ともあれ、学界を逸脱するように、いろいろの規範をすてて、大陸北京に住居を変えたのである。さらに、京城大学に赴任するなど、いわば放浪に近い年月が数年続いた。終戦後は、一時帰郷し、広島高師に就職もしたが、昭和二十年、二十一年当時の朝夕を回想すると、まったく茫漠（ソール）ということばで形容しなければならぬ。所蔵の書籍はほとんど京城で焼かれ、内地においては古典一冊を求めるに如何な労苦をしたことか。その頃の日記はブランクになっているが、ノート一冊買うにさえ意外の苦心を味わせられた。（以上の雑記が何等か、現代の学徒に思わしめるものがあれば幸と思って綴ったものである。）

「文芸文化」創刊まで ■ 栗山理一

このたび『バルカノン』で『文芸文化』に関する特輯が企画されるということで、拙文をも求められた。戦後いちはやく戦時下の文学運動に対してさまざまな批判が試みられるようになったが、そのなかには『文芸文化』や同人の名をあげて俎上にのせ、言及したものも、いくつかは私の管見に入っている。公的な仕事に対する批判であるかぎり、それは甘んじて受けなければならないものだし、弁明の必要などあえて認めない態度を持してきた。しかし、たとえば塚本康彦氏が『古典と現代』誌に発表した「文芸文化」（『国文学私論』再録）や目下連載中の小高根二郎氏の「蓮田善明とその死」（『果樹園』）を除けば、精密な検討を加えた批判とはいいがたいものが大部分であった。情勢論としての歪みだけを摘発してことあげするなどは、いとも容易なわざである。敗戦という民族の悲劇を経てはじめて可能となった声高な非難の容易さと、情況として与えられたもろもろの課題にとにかくにも必死に対決しようとする痛苦に彩られた心情の軌跡とはかかわりのないことである。われわれが追尋しようとしてあがき求めた軌跡は、三十年余をすぎた今日においても、やはり苦悩にみちた軌跡として消え去ってはいないはずである。あの頃が「病める時代」であるなら、今日もまた「病める時代」といえよう。すくなくとも古典研究の乾いた風土は、われわれの残した歪みを摘発することによってすべて一新されたとはいいきれまい。

私が今求められているのは二十数年前に終刊となった『文芸文化』についての回想であって、今日の時点における古典研究ないしは文学研究のありようを語ることではない。そのことに触れた発言は、一切省くことにする。『文芸文化』が今日の時点で再検討されることの意味については第三者の判断に委ねるほかはないが、すでに文献も稀覯に属するものが多いので、『文芸文化』創刊の頃までを回想風に綴ることによって、参考に供することにしたい。

私が大学を卒業したのは昭和八年三月である。一級上の清水はすでに卒業して東京の成城学園に就職していたが、一級下に池田、二級下に蓮田が在学していた。つまり、蓮田が大学に入ってきた時、池田は二年次、私は三年次の学生であり、清水はその年卒業したということになる。しかし、その前の高師時代は、私と池田が入学した時には、清水が二年生、蓮田は最高学年の四年生であり、ともに文科第一部（国語・漢文専攻）の学生であった。大学の年次の相違は、蓮田は高師卒業後、中学教師や軍隊生活などの道草を食ってか

らの学生生活への復帰であり、すでに家庭をもっていたし、池田は一年間の浪人生活を味わってからの復帰という事情によるものである。高師時代は、池田は同級生として親しく、級友と図って文芸雑誌『群盲』を創刊した時も同人であった。仲間には後に日支事変で戦死したアララギの歌人渡辺直己や今次の終戦に際し満州で客死した小糸夏治郎（建国大学で哲学を講じていた）などがいた。清水は歌人として注目をあびていたし、蓮田は詩や小説をさかんに発表し、学内の文学活動の中心人物として、新入生のわれわれにとってはるかに仰ぎ見るような存在であり、人物も重厚の風があった。もとより言葉を交す機会はなく、たまたま寮の浴場で顔を合わせた時など、広い浴槽の片隅で小さくなりながら、級友と「あれが蓮田さんだ」と囁き合ったほどである。

昭和五年三月に高師を卒業することになったが、ひどい不況でめぼしい就職口もなく、それに教室のことよりも好き勝手な読書や遊びにかまけていたので、教師になる自信もなかった。その頃になってようやく学問への意欲もすこしは湧いてきたので、そのまま大学へ進むことにした。一級上に清水がいた。大学に入ってみると、さすがに研究熱心な学生も多く、そういう雰囲気にも刺戟されて、下宿の机にかじりつく時間も多くなった。その前後から斎藤清衛先生の自宅をしばしば訪問するようになっていた。斎藤先生は大学の講義は受け持っておられなかったが、学界活動ははなばなしく、当時、東北大学の岡崎義恵教授や東京大学の久松潜一教授と並んで、新鮮な学風をまき起されていた。これは大きな魅力であった。

しかし、一方では池田亀鑑を主軸とする文献学的研究も異常な熱気をはらんで流行の兆しを示しており、大学の学生の多くはむしろ

大栄興産株式会社

プラスチック新建材センター
店舗装飾コンサルタント
土木建築設計施行

大谷栄助
呉市西二河通六の十
電㉑3690 夜㉛7560

その驥尾に付して、功を急ぐ者が輩出していた。目標は異なっていても、学会全体は一種の興奮情態につつまれ、活気がみなぎっていた。あたかも日本はほぼ時を同じくして戦時体勢に突入していたのである。

前述したように、私が大学三年の時になって蓮田が入学してきた。清水は卒業し、池田は二年生であった。いずれも斎藤先生の恩顧を受けてはいたが、お互いの間には格別の連絡や交歓の機会はなかったように思う。その頃私は大学新聞の編集長をやっていたので、蓮田を迎えると、さっそく原稿を依頼したのがきっかけとなって、急速に親密の度を加えることになった。斎藤先生の恩顧をひとしく受けたという気持のつながりがあったことはいうまでもない。蓮田は新入生というより、もはや新鋭の学徒といってもよいほどに蓄積もあり抱負もあった。私も斎藤先生の推挽によって、中央の研究誌に未熟な論文をいくつか発表していた。学界の新しい気流は広島にいても胸苦しいほど感じとっていたし、とくに文献学派の動きにはもとより無関心ではいられないという情況にあって、自分の学問的方向や姿勢を決定しなければならぬという、ぎりぎりの線に追いつめられたという感じを次第に強くいだくようになっていた。そのこと

で蓮田とたびたび話し合っているうちに、すでに東京に去っていた清水にも呼びかけようということになり、さらに池田も加えようという私の提案が容れられて、四人の仲間が結ばれた、というわけである。これまでは、清水、池田、蓮田という三人のつながりは、時期のずれもあって、それほど密接なものはなかったように思う。

斎藤先生に相談をもちかけたのは、それから間もないことであった。詳しい記憶はもはや薄らいでしまったが、先生はわれわれの熱意に共感されて、自分の印税の一部を提供するから研究の発表をせよとうながされた。有難いことであった。さっそく論文の作成にかかり、各自百枚前後という見当で、数か月は緊張した時間の連続であった。清水は卒業論文にとりあげた和泉式部の歌集を選び、池田はやはり後に卒業論文となった源氏物語を主題とした。私は卒業論文に、中世歌論を考察したが、それにつながるものとして「ディレッタンティズム」をとりあげ、蓮田は古事記を選んだ。

かくて「国文学試論第一輯」が創刊されたのは昭和八年九月初めであった。印刷所は広島であったが、発行所は東京の春陽堂である。当時、春陽堂にいた高藤武馬君は斎藤先生とも知遇があり、その斡旋で春陽堂が引き受けてくれた。装幀にも苦心し、表紙は厳島平家納経五百弟子品の部分を複写し、題字は宝生院蔵「調玉集」より集字した。

文芸文化叢書・解題3

「風流論」栗山理一著　（叢書3）
■14／12／17刊・276頁・1円〒10銭

■目次
序／風流論／文人論／其角／上田秋成

■紹介の言葉
芸文の真実の伝統と偶像とは似て非なるものがあらう。しかし尽く国民の偶像を破壊し去ることは学問の権威を以ても容易に許されることではないし、またさうして後に残されたもののみが果して真実の伝統となりうるかは問題であらう。近去の数々の偶像破壊も畢意は新しい偶像の信仰であったやうに国民はつねに信仰の対象として偶像を求めてゐる。かかる偶像信仰に於ける国民の愛好心の単純と固執を責めることは出来ても、その享受の素直さと無言の批評を蔑視することは出来ない。まことは芸文の伝統もこのやうな国民の享受と批評を通じて形成されてきたし、その偶像も凡て何らか真実の囁きをこめないものはない。風流とはいはばかかる国民の芸術信仰の表面に外ならなかった。かつて風流は吾々の国民生活の審美であると共に倫理でもあったが、しかもつねに風流の太宗が宮廷風にあった事実は、西行、宗祇、利休、芭蕉といふ如き風流偶像が親愛と共に厳しい規律として国民の胸に描かれてきた所以であらう。

（「文芸文化」昭和14年11月号奥付広告）

■書評（文芸文化・15年5月号）
風流論について（岡崎義恵）「風流論」を読みつゝ（中島栄次郎）「風流論」に就いて（伊東静雄）「風流論」を読む（小糸夏次郎）

■表紙は栗山・伊東静雄両氏によるデザイン

しかし、この同人紀要は、「あとがき」に「我々同人の研究相互間には、何等の特殊の連繋乃至制肘はない。従って必ずしも統一的な学問運動ではなく、各々向々の、自由な方向を有ち合っている。」と誌されているように、全く各自の自由な態度を認め合ったものである。文学運動という名には値しない。この「国文学試論」は昭和十三年六月刊の第五輯まで、ほぼ毎年一冊ずつ刊行されたことになる。なお別冊として「国文学試論批評篇」の第一輯を昭和九年十二月に、第二輯を同十一年八月に出している。前者には岡崎義恵先生を、後に出している。前者には岡崎義恵先生を、後者には斎藤清衛先生をとりあげて特輯を試みたものである。そのことはとりもなおさず同人の学問的志向を物語るものがあろう。

同人紀要が回を重ねるにつれて、われわれの間には月刊の研究誌をもちたいという機運がたかまってきた。しかし、年一回の紀要とは異なり、月刊誌ともなれば出版の費用も増大するし、講読料でまかなえる自信はもとよりない。その頃、斎藤先生は京都の星野書店から作文教科書（中学校用）編纂の依頼を受けておられ、われわれにその実務を託されることになった。その印税を月刊誌発行の基金にせよというわけである。そこで昭和十一年の夏休みを利用して、高野山の遍照光院に合宿して仕事にかかった。同人の外に先生も参加された。翌十二年の夏、再び同院に籠った。これは書店の希望で、さらに女学校用を作成するためである。この時、伊東静雄が誘われて遊びに来た。教科書はさいわいによく売れた。

やがて月刊誌『文芸文化』創刊の企画にとりかかることになったが、同時にゆかりの地である高野山において夏期大学ともいうべき「日本文学講筵」の準備もすすめられた。雑誌は東京在住の同人が主として担当し、講筵はその頃大阪に居た私が交渉の責にあたった。『文芸文化』の創刊号は昭和十三年七月一日の日付であり、講筵は七月二十八日より四日間、高野山の大師教会を会場として開かれることになった。創刊号に稿を寄せられたのは、垣内松三、斎藤清衛、風巻景次郎、松尾聡、井本農一、吉田精一、西尾実、久松潜一の諸先学や同学であり、これに同人が揃って名を列ねた。外に伊東静雄の詩篇「稲妻」が掲げられている。講筵に招待した講師は、垣内松三、久松潜一、斎藤清衛、源豊宗の諸先生であった。雑誌、講筵とも協力をよせられた方々は、もとよりほとんど斎藤先生の縁につながるものであった。

これより前、昭和八年大学を卒業した私は大阪の南にある堺中学校に赴任したが、翌九年には大学を出た池田が同じく大阪の今宮中学に職を得て来阪することになったのは好都合であった。さらに十年に大学を卒業した蓮田は遠く台湾の台中商業学校に赴任した。これは同人の活動には支障をきたすとも思われたが、いくらかでも多くの収入を必要とする蓮田の経済事情からということで、やむを得ないことであった。蓮田は昭和九年夏の室戸台風のさなかにも、広島から困難を排して大阪で開いた同人の集まりに参加したし、台湾

土木建築請負
設計施行管理
代表者 永野 昇
永野建設
呉市西二河通七丁目五
電話㉑五六五〇

に行ってからも毎夏はるばる内地に帰って同人と生活を共にしてくれた。容易ならぬ決意であったと思う。

伊東静雄との出合いも誌しておく必要があろう。伊東は昭和四年京都大学を卒業すると、ただちに大阪の住吉中学校に職を得ていた。すこしおくれて、昭和七年には大学で私より一年先輩の加藤惣一君が同中学校に赴任し、伊藤と同僚になった。その後、私と池田が大阪に在住するようになったのを機会に、加藤君のすすめで、三人が月一回会合して懇談することになった。そのうち、加藤君から、同僚に伊東静雄という詩人がおり、仲間に加えてくれないかという話があり、これが伊東を識った最初の機会であった。昭和十年の末か十一年の初め頃だったと記憶している。伊藤の第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」が出たのは十年十月であり、私が会ったのはそれ以後のことだからである。その頃、伊東は大阪市西成区松原通に住んでいて、私が訪ねた時、たまたま辻野久憲も来合わせていた。小高根二郎君の『詩人、その生涯と運命』に収録されている伊東と辻野が並んだ写真は、その時私が撮したものであり、したがって同書に「昭和九年冬」とあるのは誤記である。十一年八月、同人は高野山に合宿したが、登山直前の八月二日、堺市七条通の拙宅で、伊東を初対面の蓮田や清水に紹介した。そのことは清水の日記につぎのように記されている。

「夕刻、池田が詩人伊東静雄氏を伴って来る。一同ビールを飲みながら、快談する。伊東氏大いに気焔をあげ、自作の詩や、他人の詩を朗吟して興をそへる。純粋の詩人らしさに打たれる。池田と伊東氏帰る。」

十一年の暮に伊東は私と同じ堺市に転居してきた。北三国ケ丘町四〇という地番で、反正御陵の斜面であり、詩篇「夢からさめて」は転居後まもない作品であった。伊東と私との往来は頻繁となり、やがて伊東の紹介で、小高根二郎君や富士正晴君とも相識るようになった。故人となった中島栄次郎や杉浦正一郎を紹介されたのは、もう少し後のことだったように思う。翌十二年夏の高野山での合宿には伊東も招かれて遊びに来た。すでに同人と伊東との交遊は密度を加えていた。私は伊東との触れ合いで多くの影響を受けたし、とくに伊東の詩作の密室をかいまみえたことは幸いであった。このことは私ばかりでなく、他の同人たちも同じであったことは、たとえば目下連載中の小高根君の労作「蓮田善明とその死」（『果樹園』）によっても知られよう。

『国文学試論』で結ばれた同人の路線は、斎藤清衛先生への師事とその恩頼によって導かれたことはいうまでもないが、さらに伊東を識り、伊東を通じて『コギト』の同人たちと直接間接に触れ合うことによって、次第に一つの方向に収斂されていくことになった。かくて昭和十三年七月に創刊された『文芸文化』には池田の執筆になる「創刊の辞」が掲げられた。その中にはつぎのような言葉がある。

「芸文の古典は可情、功利一片の具と化して、無法なる裁断に任され、所謂国文学の研究は普及せるも、故なき分析と批判とに曝されて、古典精神の全貌は顕彰せらるべくもない。（中略）されば我等はもはや伝統について語る必要を認めない。伝統をして自ら権威を以て語らしめ、我等はそれへの信頼を告白し、以て古典精神の指導に聴くべきである。」

これはまた同人すべてに通じる立言の場に外ならなかった。

国文学試論・同批評篇 総目次（その1）

国文学試論第一輯　昭8・9・1刊　245頁1円
和泉式部正集の形態に関する研究　清水文雄 1
ディレッタンティズム―中世文学の一観点　栗山理一 85
「もののあはれ」の深化過程に於ける一契機―源氏物語の背景　池田　勉 133
創刊に際して　蓮田善明 187
表紙　厳島平家納経五百弟子品第八表紙部分　真福寺本古事記書写の研究　蓮田善明 245
題字　宝生院蔵「凋玉集」より集字

創刊に際して

（国文学試論第一輯二四五頁所載）

恐らくこれは初めての試みであらうかと思はれる、国文学研究の同人紀要である。未熟な我々が烏滸がましくも、研究を世に公にしようと企てたことと、僅か四人きりの発表機関としてこれを専有することと、この二つに対して、共に我々は十分に弁ずる言葉をもつてゐる。併し結局この方法は、現在の我々の仕事として、最も適したものであることを、誰人にも、好ましい理解を以て見ていただかなくてはならないだらう。

✕

我々同人の研究相互間には、何等の特殊の連繋乃至制肘はない。従って必ずしも統一的な学問運動でなく、各々向々の、自由な方向を有ち合ってゐる。併し乍ら、我々は単に世の研究に追随して、惰力的な、自己のない研究を推積して行くことを以て、満足しようとは思ってゐない。今日の国文学研究に考へられ得る種々の目標と方法に於いて、互に批評し合ひ、共同的展開をも図りたいと考へてゐる。

所載論文の長さは各百枚前後、刊行の度数は少くも年三回位に考へてゐる。何時迄続くか、そんなことは考へてゐない。苦し不幸にして或は我々の仕事が弛緩して来た時は、それを以て終刊とする覚悟だけはもってゐる。

✕

これを生み出す迄に、種々と指導、激励、援助を賜った方々、並びに刊行を快諾された春陽堂の厚意に対し、創刊に当って、心からの謝意を捧げるものである。希くは、今後も我々の成長のために、大方の忌憚なき批評、鞭撻を寄せられんことを。

昭和八年八月　同人　池田勉　栗山理一　清水文雄　蓮田善明

✕編輯者・蓮田善明（広島市千田町三丁目藤浦知方）
✕印刷所・藤浦印刷所（広島市千田町三丁目八二八ノ四四）
✕発行所・春陽堂（東京市日本橋区通三丁目八番地）

国文学試論　第二輯　昭9・6・1刊　330頁1円30銭
心敬僧都論　栗山理一 1
源氏物語に於ける文芸意識の構造　池田　勉 85
古事記の文学史的考察序説　蓮田善明 148
新資料能因法師集の研究　清水文雄 207
編輯後記

✕編輯兼発行者　和田利彦　東京市日本橋区通三丁目八番地
✕印刷所　東陽印刷所　東京市神田区鎌倉町五番地
✕発行所　春陽堂

国文学試論　第三輯　昭10・12・20刊　234頁1円
日本文芸史理論　蓮田善明 1
和泉式部日記考　清水文雄 41
富士谷御杖　池田　勉 127
連歌論史攷　栗山理一 179
編輯後記

✕編輯者・国文学試論編輯所　東京市外千歳村下祖師ヶ谷五七（清水文雄方）
✕印刷所・東陽印刷所
✕発行所・春陽堂

（52頁につづく）

その頃のこと二つ三つ

■池田　勉

文芸文化のことも、今は昔の物語と、そんな言葉が思はず口に出てくるほどの、遠い気持の過去になってしまった。過去は、過ぎ去ったものとして、きれいに流れ逝かしめるほかはない。それが道理であらう。が、若い日のいのちを燃え立たせた仕事であっただけに、今になほ、ほのかに愛惜の情はのこる、といふものである。

文芸文化の編輯の仕事を進めるために、私が東京に出てきたのは、たしか、昭和十五年四月初めだった、と記憶してゐる。蓮田君がその前年の秋に応召して、支那の戦場へ渡って行ったので、編輯の雑務までが全部、清水君ひとりの肩にかかることになり、私どものうちの誰かが早晩これを助けねばならない事情に当面してゐた。私は広島の大学を出てから、六年ばかり勤めてゐた今宮中学の職をすてて、上京することに決心した。生活の上では、やや無暴のうらみはあったが、家族たちは大阪にのこしたまま、単身での上京だった。感傷的にいへば、いくらか悲壮な気持にとらはれてゐたかもしれない。が、さういふ時勢だった。

祖師谷の梅村さん宅に、下宿できるやうに、清水君が取り計らってくれてゐたので、そこに落ちついた。清水君の宅まで歩いて三分ほど、斎藤先生のお宅へも近かった。やがて、編輯所を私の所に移すことになって、その門札を玄関わきにうちつけた。その頃は、門を出ると、あたり一帯はまだ武蔵野のおもかげを色濃く残してゐて、向ふの大きな森ぎはまで、まっ黒な土の上に麦畑がひろがってゐて、その緑青いろのあざやかさが、目にしみて、望郷の情を誘った。私は、浪々の草莽の身の上を自らに思った。五月の夜の灯のもとで、私は身をいれて伊勢物語などを読んだ。在原業平の東下りの条などが、心にしみた。そして業平についての文章をいくつか誌上に綴って心を慰めた。

文芸文化の編輯計画は、清水君と二人で相談しながら進めて行くのが楽しかった。月々の原稿は、書いてほしいと思ふ方に、多くは書面でお願ひした。わけを話して、ほとんど稿料なしの執筆であったが、みな気持よく書いて下さった。この誌上に執筆して下さった方々は、みなで百三十数名にものぼるといふことであるが、さういふ皆さんの好意のおかげで、この小誌は数年間にわたって非常の時期に続けることができたのであった。毎月一回は必ず出張校正になって、清水君と二人で、浅草にあった細野印刷所へ出かけた。そこは、地下鉄の階段を上って、細い露路をいくつか曲ると、うす汚れた小さな町工場だった。校正をすますと、夜になっていた。二人は浅草寺の雷門をくぐって、よく夜店の灯の前を歩いた。春めいた灯が妙に美しく花やいで見えたこともあった。一冊の小誌が出来あがって届いたときのうれしさは、まづ、手にもってみて、心にひびいた。月刊だったので、一か月余り前から、その月号の準備にとりかかるので、十月ごろから、もう新年が来てゐるやうな妙な気持がした。

十六年の春には、無事に中支から帰還した蓮田君が上京してきた。まだ戦場のきびしい空気を身につけてゐる蓮田君を、できるだけ、のびやかに迎えてやりたいと思った。私の隣の一部屋を譲って、起居を共にすることにした。戦場でたえず、いのちといふものに対面しつづけてきた蓮田君は、その見つめた生命の底から噴きあげてくるものに、形を与へようとするもののやうに、リルケのロダンを語り、鴨長明の生き方に、心を興奮させてゐた。そして一心に小説を書いてゐた。それが「有心」の作であった。それから数日の後であったか、暖くなり初めた春の光に誘はれたかのやうに、急に蓮田君は高熱を発して、仆れ臥した。まるで、戦地で心身にしみこんだ重い苦渋を、すべて汗にして、流し出し、洗ひおとすやうな、はげしい、ひどい発汗の状態だった。三日ほどの病臥の後、彼はつきものを追ひ払ったやうな、さっぱりした顔を見せて全快した。部屋さきの庭に、乙女椿の花が、むらがるやうに咲いてゐる日のことであった。編輯の仕事かたがた、伊豆へ一泊の旅を試みたことがあった。修善寺の新井旅館に泊った。夜、庭の大きな池で鯉のはねる水音が、たびたび聞えた。その頃まだ学習院の高等科の生徒であった平岡公威君の詩を、清水君が教へ子の作といって、ときどき見せてくれたことがあったが、この日は、初めてみる彼の小説「花ざかりの森」の原稿を、たずさへてきてゐた。皆で読んでみて、よければ、文芸文化の誌上に載せてみては、といふことで、皆で回読したが、立派に出来あがった完璧の文章で、学生のものとも思はれぬ、本格の作品であった。みな感銘ふかく、ただちに衆議一決して、収載することになったが、作者の彼がまだ学生なので、かりの筆名を考へておかうといふことで、誰言ふとなく、三島を通ってきたこの機縁や、白雪の富嶽を仰いだ印象もあったのかもしれぬが、作品の清新な読後感にぴたりと合ってゐるやうな感じもして、三島由紀夫といふ筆名が、その場で出来あがってしまった筆名なので、この名を今日も持ちつづけてくれてゐる三島君には、すこし気の毒なやうな気もするが、しかし機発して、一気にこの名に結晶したのであるから、「花ざかりの森」へ添へられた友情の一つの花たばと、うけとってもらへれば、これも人生の縁といふものであらうか。この作品は、のちに佐藤春夫氏に一読を願ったことがあった。

その佐藤春夫氏の関口町にあったお宅にも、皆で訪ねていって、著書など頂戴して帰ったことがあった。佐藤春夫といふ芸術家を、私たちは尊敬してゐた。その文学に蓮田君は特に心酔してゐた。後に蓮田君は二度目の応召で、南の島の護りについてゐたとき、たまたまジャワのスラバヤを訪れてきた佐藤春夫氏に会い、氏から時計を贈られるといふ奇遇深縁談は、誰かが書いてくれることだらう。

誌の表紙の絵を書いてもらった縁で、棟方志功氏の中野のアトリエは、いくたびか出かけていった。画のいのちの熱く噴き出してくるやうな勢の烈しさで、大声に語りつづける棟方氏の談論を聞いてゐると、強い嵐が身内を吹きぬけるやうな快さを覚えた。そのころ、参謀本部の若い将校たちが、氏を招いて画の話をきいてゐたさうだが、その息吹きにふれると、作戦が雄大豪放になるといふ話だった。蓮田君は氏を、現代のスサノオノ命と評した。

大阪の友人の伊東静雄さんが、何かの用事で上京してきたことがあって、幾人かの詩のお弟子を引きつれて、私の家へも立ち寄ってこられた。東京で何ごとかに心激するところあったらしく、しきりに東京といふ田舎の野蛮さをなじり、東京人の薄情さを、口をきはめてののしってやまなかった。私は、この当時不遇であった詩人の上京を、心あつく迎へて、もてなしてあげたいと思ひながらも、折からひどく手もと不如意で、気持ばかり、やきもきしたことを覚えてゐる。この詩人も今はこの世にない。

戦局が重大になって、ふたたび蓮田君は、召しに応じて出で立つことになった。こんどは南方だった。私たちは、彼の行を壮んにしようと一夜相集ひ、酒を酌んで、別れを惜しんだ。その翌朝、早く、東京駅を立つ前に、彼は皇居の二重橋の前に直立して、黙して敬礼した。日本への心こめた祈念であったのだらう。そして、身をかがめると、足もとの玉砂利を数箇拾って、軍服のポケットにおさめた。二重橋も、白い壁塀の上の松のしげみも、皇居前の広場一帯も、一様にうす緑いろのもやに、静かにかすんでゐた。駅の改札口で最後の敬礼をして別れを告げると、彼は駅の階段を軍装のしっかりした足どりで昇って行った。一度もふりかへらずに、その軍装の背中は、上に消えた。

それから何日か経って、情報局から編輯者の呼び出しがあって、私が出向いて行った。物資の欠乏にともなって、用紙の配給も乏しくなった現状なので、群小の諸雑誌は統合して一誌にするといふ通達だった。紙をつかう雑誌刊行は、もうやめろ、といふにひとしかった。それが国策に従ふことであった。帰って、右の事情を伝へてはかると、終刊に一決した。時に利あらず、気持はさっぱりしてゐた。まもなく、私にも動員令が来た。

終戦になって、私たちは、蓮田君の無事に帰ってくることを、心待ちに待った。しかし、蓮田君は八月二十日に、南のジョホール・バールの地で、自らの志操に殉じて自決してはて、帰って来なかった。このことを、かねてから蓮田君をよく知って下さってゐた桜井忠温氏に伝えると、この老将軍は声をあげて慟哭された。その桜井氏も、その後、郷里の松山で、さびしく亡くなられた。

佐藤春夫氏は、蓮田君の死をふかく悼み、さらにあとに残る私どもまでを励まして、一篇の詩作を寄せて下さった。その好意の詩品は、清水君が紹介してくれることと思ふ。その佐藤春夫氏も、今はこの世の人でない。

西郷南洲に、明治六年に書かれた、集義塾建設本旨といふ文章がある。西郷や大久保たちは、維新の勲功を賞せられて、恩典の禄を授かることになったが、私するにしのびず、この恩典の禄を集めて、維新に忠死した人たちの志を継ぐものを教育しようと考へた。それが集義塾建設の本旨である。その文の末尾に曰く、

只忠死の心を以て志とし、人々自ら責めむ事を希ふ。

とある。古いことばであるが、志といふものが歴史を作り、歴史を導いてきた。その志を述ぶるところに詩は生まれ、したがって詩は志の証しにほかならなかった。もし文芸文化のささやかな願ひが何であったかと問はれるならば、私はためらはずに言はう。それは、志といふものの美しさを護ることであったと。

文部文化叢書

言霊の幸はひ

池田勉著

5

東一書房

文芸文化叢書・解題4

（扉）

「言霊のまなび」池田勉著（叢書5）

■15／5／17刊・325頁1円50銭〒14銭

■目次　序／日本の抒情／文芸精神／古典の倫理／東洋の回想／感傷と信従／物語の擁護／中世作家の運命／西行的人間／知性の放蕩／言霊のまなび

■紹介の言葉　そのものゝ内から何を力とし何処を道として日本文芸学を築くべきであるか。それを探究して著者は日本の美と精神を貫いて伝統する「芸術の倫理」を見出してゐる。芸術の倫理こそ日本文芸の過去を古典として現代を指導する精神でなければならぬ。日本文芸学の今日に待望せらるゝ好著として斯学の発展に寄与する所多きものがあらう。（「文芸文化」昭和15年5月号奥付広告）

■書評（文芸文化・15年8月号）

古典への回想（唐木順三）礼讃と疑問（藤田徳太郎）

「文芸文化」の創刊のころ

南蛮寺万造

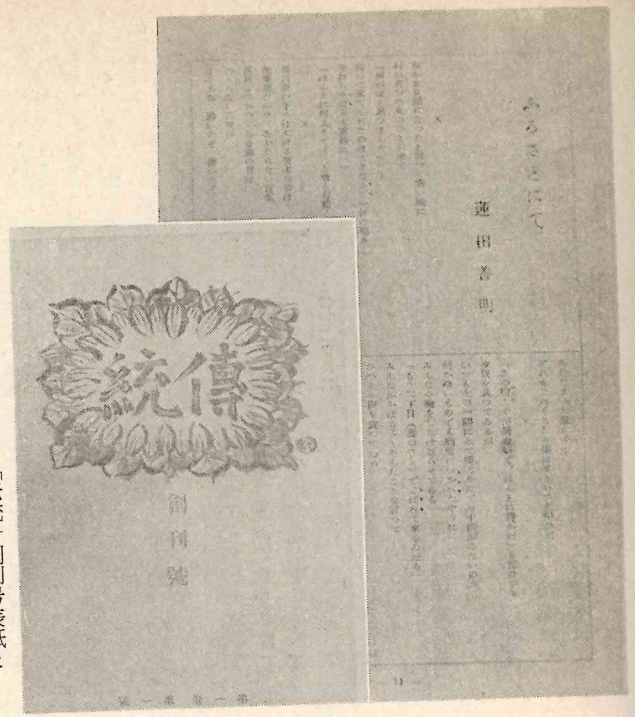
この雑誌が創刊されたのは、昭和十三年七月である。その前に、池田勉・蓮田善明・栗山理一・清水文雄のの四編集委員によって、「国文学試論」が、すでに第一輯から第四輯まで、春陽堂発行で出されていた。そして「文芸文化」の創刊号には「試論」の第五輯「古典新生」の発売広告も出ている。つまり、この雑誌が誕生するまでに、右の四氏は、すでにじゅうぶんに雄飛の土台をかためていたということである。ちなみに、そのころの四氏の所在を明らかにすれば、池田氏が大阪住い、栗山氏が泉州堺住、蓮田氏が台湾住、清水氏が東京住ということになる。なお、「試論」の発行所が春陽堂になっていることについては、当時、わたしが春陽堂の編集員であったことから、しぜんと橋わたしの役を果たしたように記憶している。

もう一つ、創刊以前のことをいうとすれば、昭和十一年十月を以て雑誌「伝統」なる四十八頁の小冊子が発行されている。これは「文芸文化」とちがって純然たる随筆雑誌であった。編集名義人は高藤武馬、すなわち小生であるが、同人が毎回五円ずつの会費を拠出して維持していた同人雑誌であって、「文芸文化」の四氏のほかに、青木健作、斎藤清衛、水野葉舟、前田夕暮、大山澄太、宮崎丈二、唐木順三など十人あまりの人の集りであった。この雑誌も春陽堂が発行所になっている。昭和十一年十月号を以て創刊し、翌十二年十二月の終刊号までに、十冊を刊行して終焉となっている。むろん、廃刊の原因が経済的ゆきづまりであったことはいうまでもない。前記四氏が、もっとも熱心な執筆者であったことも忘れられない。なんらの主義主潮も持たない微々たる趣味の小冊子ではあったが、第三種郵便物の認可も得ていたので、途中二回の欠号はあったとしても、ともかくこれが月々出ていたということは、これが廃刊の翌年わずか半歳を置いて「文芸文化」が創刊されている事実と考え合わせてみると、この小冊子がその胎動へのいさゝかの刺激剤の役割を果たしていたかもしれない。

もう一つ、重要なことは、前記四氏は斎藤清衛氏の名義で、京都の星野書店から「作文」と銘打った国語の副教材を編集刊行していて、これが全国の中学校に歓迎されて、その方の印税収入は、当時としては相当の額にのぼっていたということであった。これが雑誌経営の見通しの上に、自信と安心の裏付けになっていたわけであって、その点では、たいへん恵まれたスタートが出来たといえるであろう。

わたしの思い出の中には、だいたい以上のようなことが浮んできたのでそのまゝ書きつづけてみたのである。「文芸文化」の創刊号には、「日本文学講筵」の広告が掲載されているが、それを今見ていると旧懐の情がひし〳〵と湧き起こってくる。時は七月廿八日から四日間、場所は高野山、講師題目は、

日本文学精神史序説（漱石の間隔論）　垣内松三
国学と国文学　久松潜一
宗祇より芭蕉へ　斎藤清衛
美術史より見たる源氏物語　源豊宗



「伝統」創刊号表紙と同号14頁所載蓮田善明氏「ふるさとにて」

とある。ちなみに、会費は三円五十銭、宿泊料は別に一日三食付一円五十銭となっている。わたしも東京から参会して、四日間、四先生と共に親しく遍照光院に起居を共にし、夜は座談会に、昼は源豊宗氏の指導の下に古美術を見て回った四日間が、今でも目の前にあり〳〵と思い浮かぶのである。二、三年前に、わたしは、家内をつれて思い出の遍照光院に一泊し、当時をしのんで若かりし日の「日本文学の会」同人の天を衝く意気込みをなつかしくも、亦尊いものに感じたのであった。

「文芸文化」の果たした歴史的役割などについては、幾多の人が書かれるであろうから、わたしは、雑誌が発行されるまでの若干の思い出を綴って責めをふさぐ次第である。なお、わたしは、同人諸子と古いつき合いでもあったし、日本文学の会のあった祖師谷に住んでいたので、同人ではなかったがしば〳〵編集会議をも傍聴していて、雑誌にも二、三度寄稿したことあったし、又、「文芸文化」叢書の中にも、大山澄太の「日本の味」や、伊東静雄さんの「夏花」と共に、研究書以外の著作として「門の中」という随筆集を加えてもらっていて、その都度、前記署名の仮名で発表していたので、この稿も、それにしたがって署名したわけであった。

なつかしさが先に立って、筆が思うように滑らなかったことをお詫びしなければならない。十一月卅日。（筆者法政大学教授）

文芸文化叢書・解題5

「門の中」　南蛮寺万造　（叢書12）

■16／5／15刊・265頁・1円30銭　〒10銭

■目次　月夜／猫の日記／門の中／一発の花／その他／芭蕉三年／子供について／きさらぎ・やよひ／夏二題／月見の記／村居／おなじく／おなじく／朴亭春信／はい談／芋の味・酒の味／恒春園／高原の秋／歳暮記／巻末記

■紹介の言葉

人皆がきほひ立ってゐるやうなときにこれは平凡な無名の市井人がその生活を敍したものであるが、読みゆくうちに自ら日本の風韻を感じ拍案快哉をおぼえしめる底のものである。芸術がすべて静的なものとは決して云はないが、擾乱に疲れたるものは、よろしく来って故山の慈味を満喫したまへといいたいところのものである。

（「文芸文化」昭和16年6月号表紙3）

「文芸文化」とわたし

田中克己

小高根二郎氏主編の同人雑誌「果樹園」に「コギトの思ひ出」といふのを書いて、われながら呆れる悪文で反響もなく、二年でやめたが、もし書きつづけるとなら「コギトと文芸文化」といふ一章があるべきだった。さう思ってゐるところへ清水文雄さんから文芸文化について書けとのお話があったので、渡りに舟と喜んで書かしていただく。

文芸文化は昭和十三年七月に創刊号が出て編輯兼発行人は故蓮田善明さん、発行所も同氏のお宅（世田谷区祖師谷二ノ六六）となってゐる。創刊の辞は池田勉さんが書かれ「古典の権威は地に墜ちたり。今にして之が復活を想ひ、古典の黎明を呼ぶにあらざれば、我が古典の精神は終に喪はれんのみ」といふ高らかな叫びがしるされてゐる。

昭和十三年七月は日華事変のはじまってから満一年、国家総動員法の成立したあとである。張鼓峰事件といふのがあり、日本軍はソビエトの火力に手ひどい打撃を受けて、これとの正面衝突を避けざるを得なくされた。国内では人民戦線は一斉に検挙され、国論は一応定まったかに思えながら、弱い中国あひてにのみ、なぜ戦はねばならぬか一向、国民にはわからず、武漢陥落を機会に戦争は止むかと国民みな大喜びをし、宮城前に提灯行列をしたが、敵は重慶に遷都し、徹底抗戦を呼ぶといふ予想外の結果となった。このやりきれぬ混迷の中に、古典の見直しが叫ばれたのは当然といってよかろう。

わたしはこの雑誌の発刊の時には大阪にゐて伊東静雄（伊東さんといふのが呼びならはしであった）と仲好くし、文芸文化の同人が斎藤清衛博士のまな弟子清水・蓮田・栗山・池田の四氏だといふことも伺ひ、創刊号を伊東さんからいただいたやうに記憶する。いかにも斉藤先生の「日本的性格の批評性」といふ論文が巻頭にのり、四同人みな力筆をのせたほか、伊東さんが「稲妻」といふ良い詩を書いてゐる。コギトのやうにドイツ文学の飜訳はのってゐないが、仲間を得た気持がしてうれしかったとおぼえてゐる。

さてこの雑誌の発刊の直後、わたしは大阪での教職をなげうって妻子をつれて上京する。その直前に池田勉さんに会ひ、その直後には池田さんのいとこである旧同僚の金川（旧姓池田）春三さんが上京して来て「大丈夫ですか」と心配されたが、わたしは意気軒昂として退職手当全部をなげうって「詩集西康省」を出版する。この詩集の反響は斎藤茂吉先生からほめられたのをはじめ、ありがたいはげましばかりだったが、最もわたしを喜ばせたのは十月応召、翌年

三月大陸に出動の命が下った蓮田善明氏が、速達で一冊を購入し、背嚢に入れて大陸にゆかれたことであった。わたしが礼状を出すと、蓮田さんは二篇の詩を送って来られた。このころ小高根二郎さんが蓮田善明伝を果樹園に連載してゐられるが、蓮田さんが詩をよくされたことは述べられながら、言及されてないので、写してみると、この二篇は（十四年七月に着いた）

草

出征の日に、あなたの話は、
遠征の彼方から私を呼んだ。
わたしはあなたの詩集を何処に置かうかと携へて来だたけ。
わたしは探険家が、その大古秘匿されたるたからを、
奇しい絵図そこに開きて索すやうに、
あなたの詩集を戦のにはで繙く。

文芸文化叢書・解題6

「詩集・大陸遠望」田中克己著　（叢書8）

■15／9／17刊 121頁 ・1円・装幀平松幸彦

■目次　捧ぐることば／偶得／ツングース／わが誕生日／Ein Marchen／小さな市で／機械についての感想／不吉な夕方／少年／期待者／少女／海浜ホテル／皇紀二千六百年の朝／曠野／大陸遠望／われらの詩論／千年／海獣／公園にて／行者／夏草／富士に寄する恋歌／諏訪湖の朝／城址にて／花木によせて／鯉／やどり木／冬日感懐／一日／佳きひと／凍る湖／日本の春／温室の会話／詩人の生涯／老／冬夜箋記／旧大学生の詩／市井に虎あり／北に向って／公園で／広東の塔／諷詩の如き／小祝典／低い土地／天馬海を渡る／孝感の戦／死者に散礼せよ／墓地

■紹介の言葉

日本の新詩は、著者の詩に於て、初めて真にその確立を見たといふもあへて過言ではあるまい。著者の詩は、折にふれて、極めてさりげなくうたひあげられる。

その清潔な詩の姿こそ、その裡に幾重のあらはな抒情への羞らひと拒否とがつゝみかくされてゐることであらうか。そこに人々は、東洋の詩の姿を、日本の深い叡智のうたを見出すことが出来るであらう。

この「大陸遠望」は著者の「詩集西康省」につぐ第二の詩集であり、昭和13年以後の詩集およそ五十篇を集めて一巻とした。作詩の年月に於いてさきの「詩集西康省」に近接するものではあるが、その詩境にはおのづから相異なるものを見られるであらう。

（「文芸文化」昭和15年10月号表紙3）

縹渺たる巨姿と虔しい愛憐。稀なる知性と感との目もあやな霊胎。四十六章。

（「文芸文化」昭和16年6月号表紙3）

■書評（文芸文化　15年11月号）

詩集大陸遠望（富士正晴）

ここで私はただ石を見た。
石の上には草が風に吹かれてゐた。
わたしはその処処で草を摘み、あなたの詩集にそっと挿んだ。

押　花

友の美しい詩集に、わたしは
時々、所々で摘みとった草や花を挿んだ。
（ああ、こんな時、こんな所々！）

日経て、詩集を開く時、それら草花
其儘に押し花となりて、ひったりと
やさしい姿を、眠ったまゝ残してゐた。

もはやあのやはらかさは無く涸れて
悲しい一つの形になり果てゝてゐたが、
残し得た花の、草の見事さ。

その一つの花を、わたしは或る日見めでて、
破れぬやうにそっと指もて剝がして見たるに
花に添へる葉の裏にも匿れて又花がしっかりとついてゐた。

実際、蓮田さんがわたしの詩集を行李に入れてをられたことは、昭和十四年四月十四日、九江より日本文学の会あてのハガキにも見えてをり（「果樹園」五二、小高根二郎「蓮田善明とその死」に引く）、およみになった証明は「文芸文化」第二巻第八号の「新風言」に「北村透谷全集、パールバック『戦へる使徒』『古今和歌集』と『西康省』とで大抵読書欲は満足してゐる」とある。小高根二郎氏によれば山上から下りてのこの読書は大雲山から岳陽に帰っての休暇のときであらう。

わたしはともあれ、この二篇の詩に感激して、蓮田さんを喜ばすため詩を書きつづけ、やがて伊東さんの紹介で文芸文化叢書第二部の第三冊として、わたしの詩集が選ばれると、これに「大陸遠望」の名をつけ、序文に長々と蓮田さんを目がけて作った趣を書いた。これは蓮田さんが負傷し、全快帰隊し、内地では学習院に転じた清水さんをたすけるため、池田さんが大阪から東京へ転任されたあと、昭和十五年九月に発売された。蓮田さんはこのころ召集解除の内命を受けてをられ、年末には帰還される。わたしはそれを聞くとすぐ世田谷のお宅を訪れた。たぶん十六年の二月だったらうか。お宅にはだれかお客があったとおぼえてゐるが、池田さんではなかったらうか、ともかく蓮田さんは「未見の知己」の帰還の喜びをのべるわたしに、にっこりともせず言葉すくなであったので、わたしは早々に退去した。これがあとにも先にもただ一度の面晤だったと思ふ。蓮田さんはわたしをはじめ内地にゐる文弱の徒に怒っておいでだったか、わたしがのちに二度経験する帰還ノイローゼ（失礼だがわたしはこれにかかって、はじめて蓮田さんが本当にわかったと思った）にかかっておいでだったかのどちらかである。

帰還後の蓮田さんの諸論文は格調高く、ひとつとして非のうちどころはないが、わたしには氷山のごとく近づきがたく見えた、やっとわかりかけた時は、蓮田さんは二度目の召集を受けて南方に赴かれてゐた。南方がへりのわたしはノイローゼの癒りかけに愛児をなくして、また死をまちこがれる状態が長くつづいて、他人に会ひたくなくなったのである。

このノイローゼの原因をなす詩人徴用で行った先がシンガポールで、わたしはブキテマ高地の写生にゆく藤田嗣治画伯の自動車に便乗して、ブキテマまでゆき、ここで毎日新聞記者柳重徳君戦死のあとの標を見て、その傍らの花をつみ（これは便に托して御遺族に送った）、ついでジョホール・バールへ行った。橋もまだ仮橋で王宮の高楼は日本軍が砲兵の射撃観測に使ったせいか、弾痕が生々しかった。この辺りが蓮田さんの自決の地である。思へば蓮田さんとは縁も深く、似てゐたと自任してゐる。

蓮田さんはじめ同人四人の恩師である斎藤清衛博士は今わたしの勤め先である成城大学の教授でいらっしゃるので時々お目にかかる。はじめてお会ひした時、名のると、「田中克己といふ人は三人ゐますね」と仰しゃった。東京の電話帳では去年は八人、今年は十人になったので、珍しい名ではないが、わたしが答へにあぐんでゐると、先生は「漢文と詩人と人類学と」とおつけくはへになった。「前の二人は同一人でわたしです」と答へたかどうか、わたしはもう詩を作らなくなって、漢文の教師として職を奉じてゐるのである。先生はいい教へ子をもたれたほか、北京の生活を経験しておいでである。文学の話のほか、北京のお話を承りたく思ってゐるが、なかなか機会に恵まれない。

清水さんとは学習院の官舎にお訪ねしたほか、わりあひお会ひしてゐると思ふが、いまは遠くはなれて残念である。四人の中ではご年長で、はやく長者の風格をそなへておいでだったが、保田の教へてくれた和泉式部を岩波文庫で二冊も出しておいでなところを見ると、情熱をお秘めになるご性格かもしれないと思ふ。文芸文化には土佐日記、曽祢好忠、伊勢物語、古今集からはじまって平安文学をお教へいただいたので、わたしもお世話になった。わたしは茂吉先生に傾倒して、歌は万葉、物語は記紀だけですますつもりだったのである。蓮田さんの応召後は文芸文化の編集を一人でなすったので、この長くつづいた良い雑誌の最大功労者であらう。

あとのお二人、栗山・池田両先輩は年齢的に一番近く、そのうへこの十年ちかく同僚として公私ともお世話になってゐるので、お礼をこの機会に申しのべる。池田さんとは昭和十三年にお目にかかったことは「コギトの思ひ出」にしるしたが、栗山さんとお目にかかるのは戦後も昭和二十七年か、大阪の三越の芭蕉展であった。これが初対面と思へないほど親しくお話し下さった。栗山さんは明治四二年、佐賀県の有明海に沿ふ鹿島市にお生まれになり、伊東さんの生れ故郷諫早とはたいへん近い土地の出でもあり、堺に永くお住みになって、伊東さんからわたしを「篤学の士」とお聞きになって、今でもこれを信用していらっしゃるやうである。新花摘など俳文学の第一人者で、昭和四一年にはわたしに「蕪村と朔太郎」をお書かしになって、その後はわたしの上司として陰に陽に庇護していただいてゐる。文芸文化を通読して気がついたことであるが創刊号の「富永仲基の方法」はともかく、その後の論文は「的と性」「騒人（ヘルデルリーンの一句）」、「狂（芭蕉論）」「風流論」と題だけ見てもわかるやうに、非常にコギトに近い学風をもっておいでである。昭和十五年一月発行の文芸文化第三巻第一号でも、最近目にとまった論文や書として、「保田與重郎氏の諸著、中島栄次郎氏の鬼貫」に何より心ひかれたとお記しである。わたしがはじめてこの雑誌に書かしていただいたのは「文学伝統の問題」と題するアンケートで、阿部六郎、中河与一、中島栄次郎、保田與重郎、伊東さん、中村草田男の諸先輩とともにであるが（文芸文化第二巻第一号）、わたしが日本文学に父方と母方の血統があるとし、前者に大河内秀元の朝鮮記（これが文学だかどうかは疑問であるが、朝鮮征伐に出発する将士の舟を母や妻が泣き叫びながら送ったといふ箇所、しかもその将士の困苦欠乏に耐へる有様をまざまざ写してゐる点でわたしを感動させた）、後者の代表として栄華物語の「花山たづぬる中

内外アスベスト広島支店
中川　近正
広島市加古町1丁目
TEL㊶8144～45

納言」をあげたのに、偶然、栗山さんは巻頭言で「荒魂と和魂」と題して、日本文学の二要素をいっておいでである。栗山さん御自身、北九州人の荒魂と和魂との混和した大胆にしてかつ優しい心情のもちぬしなのである。わたしは上司としてこの十年近くいろいろ庇護を賜ったので和魂に関してはいつでも詳論してよい。

池田さんはわたしと同県の御出身だが、わたしは淡路島、池田さんは丹波境に近い多可郡中町の御出身で、ガサツで好色な（岩野泡鳴を出した）淡路島出のわたしと全く趣を異にした紳士である。御専攻も家持から源氏などにつながるみやびの追求で、「言霊のまなび」といふ御著者は蓮田さんもほめ、わたしも教へを受けた。文芸文化創刊号の「文学の神話」、「民衆と詩人」といふ論文の示すやうに民俗と文学とについても深くお考へになっておいでなので、これも同学の士と畏敬まをしてゐる。わたしは老年になって柳田文庫のある成城大学につとめ、東亜民俗学を教へねばならないことになったので、今後も池田さんに教へを乞ふことが多いかと思ふ。お願ひを重ねる次第である。

同人ではないが文芸文化といへば、これとコギトを結びつけ、創刊号に詩をのせたほか、たえずよき同志であった伊東さんを語らないわけにはゆかない。伊東さんは前掲の「文学伝統の問題」では御手紙拝見いたしました。

正当な、又時にとって大へんしんらつな御質問に対して、醜態な弁解にをはらぬ返答をすることは、大へん困難に感じます。

これだけではお答へになりませんでせうか。

といふ、わたしなど長々と答へた連中には、赤面にたへぬ返事をしてゐる。わたしなども永いおつきあひの間に、この種類のすっぽかしにあって困惑したことが多かったが、今から考へると二千年の日本文学の伝統について、無智なくせに長々と答へたわたしの醜態をよく指摘しておいでだと思ふ。しかも困難を明らさまにいってゐるところなど、詩人としてふさはしいと思ふ。伊東さんはこんな工合で文芸文化には数篇の詩を発表しただけだが、いつも最良の友であったことはまちがひない。コギトの詩人だとか四季派とかいはれる以外に文芸文化の準同人としての資格も加へねばなるまいと思ふ。

鬼才三島由紀夫氏が文芸文化から発足したことは知る人は多くあるまい。学習院で清水さんの教授を受け、その才能を見出され「花ざかりの森」（この小説は単行本となって、わたしが昭和二十一年三月天津から帰還した時、高田町の本屋にあった）の初めを発表したのは昭和十六年九月号（第四巻第九号）のことで、蓮田さんは編輯後記に

「花ざかりの森」の作者は全くの年少者である。どういふ人であるかは暫く秘しておきたい。それが最もいいと信ずるからである。この年少の作者は併し悠久な歴史の請し子である。我々より歳は遙に少いがすでに成熟したものの誕生である。

と記してをられる。戦後の三島文学は五年前にすでに予言されてゐたのである。この蓮田さん、清水さんの慧眼が文芸文化の存在を高めることにならう。

なつかしくこの筆をとったが、文芸文化は通巻七十号とある。わたしはその四十八号（昭和十七年六月発行）にシンガポールから蓮田さんあてに送った短歌四首をのせられ、五十号では伊東さんの「夏花」（文芸文化叢書）、大山澄太さんの「日本の味」（この人も文芸文化の同志であった。今もご健在である）とともに「楊貴妃とクレオパトラ」といふ雑文集が透谷賞となったお祝ひをしていただいても、お礼もろくろく申し述べないでしまった。戦争ボケのせいである。なつかしいありがたい雑誌だったと思ふ。それにしても今回ふたたび見ることを得た五十四冊のあと十六冊はどんな形で、どんなことが記されあったかは、全く記憶がない。おゆるしいただければと思ふ。

（書き了へて影山正治氏の「民族派の文学運動（昭和四十年、大東塾出版部）」をひもとくと、文芸文化十九年八月終刊号には佐藤春夫先生にスラバヤで托した蓮田さんの長短約二百首に及ぶ歌集「おらびうた」がのってゐると記されてゐる。これが全く記憶から逸してゐるのはどういふわけだらうか。ほとほとわが身の老いたのを痛感する。）

「文芸文化」と私

松尾聰

「文芸文化」は、私にとってまことになつかしい雑誌である。ただ、申しわけのないことであるが、私は「文芸文化」の果そうとした文芸運動の目的とその成果についての感想などに関しては全くのべる資格もなく、又、のべる力もない。というのは、私は、創刊号から四十八号まで四十八回にわたって、「平安朝散佚物語攷」なるものを掲載させていただいたが、それは同人諸賢の原稿の穴うめをさせてもらうという、清水文雄さん個人との話し合いによるものであって、それ以上のものでもそれ以外のものでもなくて終始したからであった。これをすこしくわしくのべてみるなら、昭和十三年の春のある日に、当時学習院中等科の国語の同僚であった清水さんから、近く広島文理大国文出身の同志四人で雑誌を出すが、自分たちだけの原稿ではかたよりすぎるし、依頼原稿をたくさんたのむのも経済的に大変だしするから、何か書いてくれないか、というようなお話がでたので、「それじゃあ、穴埋めに勝手なことを書かせてもらえるのなら、毎号十枚か二十枚見当のものをさし上げようか。」というようなことになったのであった。清水さんが成城高校から学習院に移られたのは、その年（昭和十三年）かその前年の春かであったと思うが、私とのつきあいは、もっと古かった。私が旧制高校の三年のとき、当時東大国文研究室副手であった池田亀鑑博士が国文学史の講師として来任されたが、私が東大の国文科の二年（旧制）の暮のころ、そろそろ卒業論文にかからなければなどと仲間で話し合っているうちに、ほとんど寄りついたことのない国文研究室に何かの用事で立ちよったところ、副手としての池田博士につかまってしまった。卒論は何にするか、などという話になって、私はその頃精神史ふうのものを実証的にやってみるつもりでカードを採っていたので、そんなことをお話ししたら、「それよりも」というわけで、本文批判とか書誌とかをまずやるのが、現在時にめぐり合わせた君たちの義務ではないか、と熱心にすすめられて、同じ国文学史聴講の仲間たちの数人とともに博士の指導を仰ぐことになってしまった。そんなことで博士のお宅の資料を見せて頂いたり、昭和六年の春、卒業後は、博士の源氏物語校勘の仕事のお手伝いに専心したりしていたのであったが、そんな頃に、清水さんは池田博士宅に現れられた。どなたの御紹介でか、私はついぞ清水さんに尋ねてみたことがなかったので知らないが、斎藤博士などのであったのだろうか。ともかくそんなことで、私は池田博士とのつながりで、清水さんに初対面したのだったと思う。学生服学帽であられたような記憶があるが、あるいは覚えちがいかも知れない。清水さんが上京されて成城高校に勤められるようになってからは、日曜ごとに池田博士宅に来られて、われわれの源氏校勘の仕事に加わって無料奉仕をつづけられた。当時この仕事の専業員は鈴木知太郎氏（現・日本大学

文理学部長）と、兵役（一年志願）で休んでおられた松田武夫氏（現・宇都宮大学教授）の代りとしての私と、木田園子氏（現・桃園文庫員）などであり、日曜の無料奉仕員は、清水さんのほかに、永井行蔵氏（現・新潟大学教授）、岸上慎二氏（現・日本大学教授）、高橋常進氏（現・大信寺住職、淑徳学園教頭）、手島靖生氏（現・福岡教育大学教授）などたくさんおられて、いそがしい中でも、当時若かった一同の間にむすばれた友情は今に至るまで変らない。そののち鈴木氏が専業員を退かれ、松田氏が復帰されたので私も退いて、私は昭和九年一月に法政大学の教師になり、昭和十一年四月に学習院に転じたのであったが、その学習院の国語の主任教授が東条操先生であられた。先生は広島文理大御在任中に清水さんを教えておられてその学問と人と為りを高く買って居られたので、たまたま私が清水さんと旧知の間柄であることも考慮されて、その後、国語教員の補欠にあたって、私が使者となって清水さんの学習院入りを慫慂しに行ったのであった。その結果が前述のように、私が清水さんの同僚となるしあわせを得たことになったのである。以上、「文芸文化」とは、まるで無関係なことを長々書きつらねてしまって恐縮であるが、実は、他の三人の同人の方々とは、ほとんどお目にかかったこともない私―蓮田氏とは清水氏の学習院官舎で一度、池田氏・栗山氏とさえ今日に至るまで数回しかお目にかかっていない、それも何かの大きな集りなどの時にだけである。――が、同人方のお金で出版される雑誌に、原稿料こそはいただかないものの、毎月原稿を載せてもらった図々しさを、清水さんとの個人的な親しさから、つい犯した若気の至らなさだったと陳弁させていただきたかったからである。今更ながら、まことに申訳ないことであったと、同人諸賢におわび申上げたい。

それにしても、私はほんとうにたのしい四年間をすごさせていただいたことであった。卒業論文に残欠の物語である「浜松中納言物語」をえらんだことが切っかけで、同じく残欠の「夜はのねざめ物語」、ついで散佚し去った「古とりかへばや物語」についての若干の論をまとめたあと、自然、平安から鎌倉中期にかけての王朝物語で、散佚し去りながら、いくらかでも世に痕跡をのこしているもの約二百篇があるのを、そのままに放置するにしのびない感じでいたのが、ちょうど清水さんから、声をかけられた時だったのである。とうてい一本だちできるほどの論文にはまとめられそうもないが、束にしてみれば、何とかそれなりの意味のありそうなものになるかも知れない、そんな考えで、上記の散佚二百物語のうちの五、六十篇の、明らかに平安期と思われる散佚物語群の資料のかけらを、私は見つめながら、清水さんの呼びかけに、突差に応じたのであった。とはいえ、拾遺百番歌合、風葉集、無名草子というふうに三つの根本資料がそろった少数の物語以外は、到底客観的に妥当性がありそうな論を構成することができるはずはなく、全く「一つの可能性」の提示にすぎないものが大部分であったので、自ら「連載読切探偵小説」（当時は推理小説ということばはなかった）と称して恥かしさをごまかしていたのであったが、後年、新制大学である学習院の大学院設置申請上の必要もあって、おおけなくも東京大学に学位論文を提出するまわり合わせになったとき、「ねざめ」「とりかへばや」「袖ぬらす」などの論考と共に、その一両年前に「文芸文化」所載の小稿全部を（若干手を入れて）まとめて一冊にしてあった「平安時代物語の研究―散佚物語四十六篇の形態復原に関する試論」（昭30刊）をそのまま主論文として使用することにしたのは、思えば、いよいよ厚かましい話であった。主査の麻生磯次先生にいろいろ御迷惑をおかけ申し上げたことを、今考えても恐縮するばかりである。

四十八回で打ち切ったのは、物語の種がつきたのではなく、その

前年（昭和十六年）十二月真珠湾攻撃によって戦争がいよいよきびしくなるにつれて、用紙の統制割当てが極端に少くなって、僅々三〇ページぐらいの雑誌になってしまったので、もともと同人諸氏の原稿の穴埋めということで書かせてもらっている私として、引っこむのが当然と考えたからであった。そのままつづけさせてもらったら、曲りなりにも平安・鎌倉にわたって百物語ぐらいはあつかいおおせたかと残念に思わないでもないが、一方、あのくらいで打ち切った方が、ボロがきわだたないで助かったにちがいないと思えば、神助というものであろうか。ともあれ、私は三〇歳から三十四歳までの四年間、あの原稿を書くこと一筋にあの戦争の暗い時代の、つとめの余りの時間を消していた。そんな消極的な暮らし方が正しかったかどうかは、批判を待つまでもないが、ともかく私のたのしみはそれ一つであったということは事実である。だから、一回たりとも休むまいと、随分無理もした。一度は、右の親指にひようそができて、切開したためにペンが持てなくて、左手で右文字をあやつって（さいわい私は左利きなので、左手がすこし普通の人よりは自由なのである。）一回分を書き切ったこともあった。あのひたむきな気持は、今から思えば、敢えて戦争の現実から目をそむけようとした利己心だったのかも知れない。申しわけない気持もする。

私の原稿は論外として、「文芸文化」が同人外の原稿を載せて、いろいろ世に貢献することが多かったと思うが、私の一番心にのこっているのは、三島由紀夫氏こと平岡公威君の「花ざかりの森」が載って、事実上、氏の文壇への出発となったことである。私が平岡君の存在を知ったのは学習院の輔仁会雑誌（学内同窓会誌）に中学一年生で驚嘆すべき詩篇いくつかを発表したのを見たときであったが、やがて、色白でおでこが張って、目のかがやいた、しかしいかにもひ弱そうな少年が、その平岡君であることを教えられてからは、たとえ戦場に狩り立てられなくても、この天才は肉体的にも精神的にも挫折することなく、果してこの暗い時代を生きのびることができるのかしらと、ひそかに心配したことであった。こうしたときに、平岡君をかげになり、日向になってはげましてくれた、君の作文の先生清水文雄教授の存在は、まさに天佑であったと言ってよいのであろう。私は幸か不幸か（疑いもなく「幸」であろう、平岡君の作文に対して私が教師の立場にあったら、私は辞職願を出したにちがいない。清水さんはよく堪えられたものである。修養のつみ方のちがいであろう。）、君の作文は担当しないで、古文だの文法だのを教えていたから、教壇に関する限り、大してコムプレックスを覚えなかったけれど、君の教室での熱心で素直な態度と、その答案の的確精密であるのには、いつも敬服した。文学青年式のてらいは一つも見えなかったからである。清水さんも、こうした君の人と為りと才幹とに、ほれこんだのであろう。あんな時代に、年少の君の作品が、学内誌以外の、文芸誌に載って、たとえ一部有識者の範囲だけにであろうとも、君の存在を強く印象づけ得たのは、まさしく清水さんと「文芸文化」のおかげであったと思う。もとより、君の才幹は、そんなことがなくても、いずれは、世にあらわれないですむことはなかっであろうが、恐らくは、よけいな苦労はされたにちがいない。その後三十年の今日まで絶える事なく、三島由紀夫氏としての平岡君が、清水さんにつくされることの深甚なるを見聞きするのにつけても、極端にいえば、「文芸文化」は、三島氏の紹介一つだけでも、永く世に功績をたたえられて然るべきであろうと思う。

（四一、一二、一一）

御婚礼調度品
和洋家具
土肥家具店
呉市三城通5丁目3
㉑5791

「文芸文化」こわたし

富士正晴

「文芸文化」という国文学研究の雑誌があることを知ったのは伊東静雄からであって、それが栗山理一に紹介された前か後かは今となってはよく判らない。伊東静雄も栗山理一も大阪の中等学校の国文の教師だったし、たしか家も堺市内で近いところにあった気がする。時期は柳田国男の本が創元選書で出る半年か一年か前といったころで、最初の訪問か、出あいの折、柳田国男のことをほめて、栗山理一に軽くいなされたような記憶がある。それから随分たって、栗山理一の家へ行ったら、流行して来てぞくぞく出版された柳田国男の本がずらりと本棚に並んでいて、奇妙な気がした。また、これは栗山理一自身どこかに伊東静雄の思い出として書いていることだが、栗山　伊東・わたしと三人がビヤホールでのんでいて、酔っぱらったわたしが「眼鏡をかけているものは本当の詩人ではない。お前、眼鏡をとれ」と失礼千万にも栗山理一につかみかかろうとし、栗山に一喝されて引き下ったという話がある。本当にそんなことがあったのだろう。もっとも、「眼鏡をかけているものは本当の詩人ではない」というのは伊東静雄の理論で、眼鏡をかけている詩人にはそんなことはいわぬが、眼鏡をかけていないわたし相手にはそのようなことをいった。眼鏡のガラス越しに見る以上、本物は見えないという単純な理屈で、まあ冗談半分、本気半分であろう。伊東静雄は眼鏡をかけていなかった。しかし、眼鏡と詩人との関係の伊東発明の理屈をいって、わたしが栗山理一にからんでいったのは、「文芸文化」という雑誌に詩人性格というか文人性格というか、そうした性格が相当色濃くあったからであると思う。そのころはもう、学習院高等部にいた三島由紀夫の小説が、そこの先生だった清水文雄の目にとまり、「文芸文化」にしばしばのるようになっていたと思われる。

伊東静雄の「詩集夏花」の詩が書かれていた頃、伊東静雄とわたしは頻繁につき合い出しはじめていた。伊東理論によると詩人には解説者が是非必要なのだそうで、どうやらわたしを解説者に仕立てようという気がなきにしも非ずということであったかも知れない。小高根二郎がそのころ大阪に居たら小高根の方に解説者のお鉢が廻っていたかも判らぬが、その頃は小高根は宇治に移っていた。

詩人の解説者という言葉に伊東静雄が含ませていた内容は相当微妙で複雑で、わたしなどには摑みかねるような点もあったように思われるが、日々のこととしてはまあ簡単で、伊東静雄の詩をよんで大いに褒めることにあるとわたしは解釈していた。大いに褒めていい気分にし、詩をどんどん書かせればよい。ところが通り一ぺんの壺をまちがえたような感のわるい褒め方だと伊東はよろこぶどころか気を悪くするおそれが大いにあった。

伊東は面と向って、富士さん、わたしを褒めて下さいと何度でも言った。そして、わたしは伊東の詩を面と向って褒めた。これは楽であった。褒められぬような詩を伊東が書かなかったからである。

伊東静雄が第二詩集「夏花」を編集し上げた時、わたしのところへそれを持って来、わたしはその全篇について何かを書くということを思い立った。結局、それが伊東から栗山へ、そして「文芸文化」の編集会議へという経過をたどって、多分、昭和十五年一月号から「文芸文化」に連載されるようになった。それが、「詩集夏花」をめぐって、という文章である。

これがもととなって、わたしは時々「文芸文化」にものを書かせてもらったが、「文芸文化」と直接につき合っているという感じではなく、伊東静雄を通じてつき合っているという感じであった。

昭和十八年頃、わたしは東京の石書房と七丈書院という二つの小出版社の出版顧問（といえば体裁いいが、関西駐在の原稿取り）をしていて、月に一回東京へ行った。その頃、伊東静雄が「文芸文化」の天才少年小説家にひどく感心して、しきりにわたしにその少年の小説を出版するように、幾分強要気味ですらあった。

わたしはどういう順序でか今は忘れたが、東京で三島由紀夫を呼び出して会い、そのイガ栗頭の幾分かは意地悪そうな目をした色の青い長い顔のひどく礼儀正しい学習院高等部の生徒の短篇集を七丈書院より出版することにし、知り合いの伊東静雄の弟子の林富士馬のところへ三島由紀夫をつれて行った。林富士馬は忽ち三島に熱中して、その後しきりと三島と会っていたようだ。

季節も、どういう訳でも判らないが、林富士馬と三島由紀夫と三人で、成城町の蓮田善明のところへ行ったことがある。何の話をしたのやら、何があったのかもおぼろ気だが、電車の駅まで送って来た蓮田善明が何とも離れるのがつらいというような感情を三島由紀夫に対して示したことを思い出す。蓮田善明も丸刈り頭であった。

昭和十九年三月わたしは戦争に行き、その後で三島の第一短篇集「花ざかりの森」が七丈書院より出版された。

これが「文芸文化」とわたしの一切であるようだ。淡い付合いである。しかし、四人の同人のうち二人に会ったことがあるとは淡いばかりではすまぬかも知れない。会っていない同人二人についてもその文章はよんでいる。何か熱っぽいところもある、いい人間ぞろいの雑誌だったという印象がいまだに「文芸文化」に対して残っている。

文芸文化「」昭和15年1月号奥付広告）

「詩集夏花」（叢書4）

■15／3／15刊・1円

■透谷賞受賞（17年5月）

■目次

■紹介の言葉

■書評

■透谷賞受賞記念

国文学試論・同批評篇 総目次（その2）

日本作家論（国文学試論　第四輯）
昭12・7・1刊　212頁　1円
中世作家の運命　池田　勉　1
道綱の母　清水文雄　51
大鏡　蓮田善明　99
俳諧の作者　栗山理一　145
跋　211
編輯後記　213

※編輯者・国文学試論編輯所
東京市世田ヶ谷祖師ヶ谷二丁目114
（清水文雄方）
※印刷所・東陽印刷所
※発行所・春陽堂

古典新生（国文学試論　第五輯）（全四冊）
昭13・6・20刊　1円
其角―作家の道　栗山理一
本居宣長に於ける「おほやけ」の精神
―日本文芸学の精神のために―　蓮田善明
物語の形成―和泉式部日記を中心として　大伴家持　清水文雄

※編輯兼発行者　蓮田善明
東京市世田ヶ谷区祖師ヶ谷二丁目四一九
※印刷者　古田篤夫
東京市神田区鎌倉町五番地
※発行所　日本文学の會
東京市世田ヶ谷区祖師ヶ谷二丁目66
※発売所　倭書院
東京市世田ヶ谷区北沢三丁目九八四

国文学試論批評篇（第一輯）
昭9・12・25刊　60頁　価20銭
論
批評と国文学　1
評
岡崎義恵氏の歩みについて　池田勉「源氏物語に於ける文芸意識の構造」　5
合評　国文学関係論著評　21
国文学専門雑誌の動向　25　31
雑
日本文学大辞典編纂経過について　49
昭和九年国文学関係単行出版物（一）　43
時評―「日本文芸学」の学界的問題性に就いて　46

※編輯者　国文学試論編輯所
東京市外千歳村下祖師ヶ谷57　清水方
※印刷者　大戸喜代造
東京市四谷区坂町九三
※発行所　春陽堂

国文学試論批評篇（第二輯）
昭11・8・1刊　96頁　価20銭
論
文芸学の生れるところ　1
評
斎藤清衛先生に捧ぐ　6
作家研究評　59
訊
垣内松三先生に訊く　66
国文学試論批判（西下経一・外七氏）　71
雑
日本文学学に関する文献要抄　75
編輯後記　97

※編輯者　国文学試論編輯所
東京市外千歳村下祖師ヶ谷57　清水方
※印刷所　古川篤夫
東京市神田区鎌倉町五
※発行所　春陽堂

「文芸文化」と私

坂本　浩

一昨年の秋、明治書院から「現代日本文学大事典」が刊行されるときに、私は雑誌「文芸文化」の項目を担当することになった。同僚の栗山さんに伺ったら、全部そろっているのが成城大学の図書館に収められているということだった。この雑誌は毎月出るごとに愛読したものであったが、今こうして全体を一時にまとめて見るということになると、改めてその仕事の意義が大きかったことを痛感させられた。昭和十三年七月から昭和十九年八月まで全七十冊、ほとんど休みなく続けられたということは、同人雑誌としては数の少ないところであろう。

「文芸文化」に流れている精神を支えていたものは、何といっても同人たちの純粋な熱意であった。同じ斎藤先生の門下生であり、世居も成城学園の近くに師弟が集まっており、当時の日本の文化に一つの意義ある寄与をしようという情熱があふれていた。同人のすべてが三十代の若さであり、そしてまだあまり世間的には有名でなかったことも、その一貫した決意に火を注いでいたように私には感じられる。同人の中で清水さんは旧制成城高校の同僚であったし、池田さん、栗山さんは今もなお同じ成城大学に勤めている仲間だし、私とは縁故の浅からぬものがあるが、「文芸文化」といえば先ず蓮田さんのことが思い出されるのも、ああいった最後を遂げられたということが絶えず頭の中に残っているからだろうと思う。

蓮田さんの出生地は熊本県の植木である。熊本市には駅が二つあって、熊本の一つ手前に上熊本というのがある。そのもう一つ手前が植木である。昔はこの植木から北へ向かって小さな私鉄が通じていて、その終点に山鹿という町があった。現在は市制が敷かれているが肥後平野の中に湧き出た温泉地である。ここが私の生まれた地である。植木から山鹿へゆく途中に来民という町がある。今は鹿本町というが、この地に済々黌の分校である鹿本中学という学校があった。蓮田さんは熊本の済々黌に学ばれたが、蓮田さんの奥さんの弟さんは鹿本中学の出身で、この中学では私の同級生であった。こういった郷里の密接な関係もあり、蓮田さんが成城高校に勤められるようになると、特に私は親しみを感じていたのである。

蓮田さんの思い出といえば数えきれないほど多いが、特に心に残っていることが二つある。大東亜戦争も次第に激しさを加えていったころだったと記憶するが、例の十二月八日の開戦の記念日には学校でも朝の集まりを持つことになっていた。成城高校は七年制であり、高等科と尋常科に分かれていたが、この日は全校があげて早朝に校庭に集合することになっていた。自由主義的な雰囲気の残っていた高等科の学生の中には、時間におくれてゾロゾロと歩いてくるものが何名かあった。それを目にする度に、私の横にいた蓮田さんは、次第にジリジリと心に激してくるものを感じていることが私にもよくわかった。背の高い学生がいかにも横柄そうにやってくるのを見たとき、ついに蓮田さんの怒りは爆発した。振りあげられた拳

は、学生が身をよけたので空を切ったが、さすがにその勢に恐れをなしてコソコソと列の中に消えていった。私は蓮田さんの張りつめた精神をそこにあざやかに見いだした。こういう熱い魂は四六時中蓮田さんの中に湧き立っていたように思う。そしてそれは「文芸文化」を支える一つの柱にもなっていたようにも思われる。

もう一つの思い出は、運動会の日のことであった。成城学園の運動会といえば、幼稚園から旧制高校まで全学園の学生・父兄が集まって花やかに行われる行事であるが、その最中に「蓮田先生に唯今召集令状が来ました」というアナウンスが突如として流された。会場は一瞬緊張した空気に閉されたが、次の瞬間嵐のような拍手がわき起こった。私は直ちに蓮田さんの後を追ってその自宅まで歩いていった。蓮田さんは居間に静かに坐わっていられた。明日は戦地に赴くというあわただしい気配はどこにもなかった。私はフトそのときお抹茶をたしなまれるときの蓮田さんの姿を連想した。私もいっしょに週に一回だけ学生の茶道の集まりに加わっていた。蓮田さんのお手前は決して手馴れたものではなかったが、初心者にはとうていありえない静かなドッシリした落ち着きがあった。それと通いあうものが出征前の蓮田さんの態度に明かに現われていた。私はわが身の万一の場合を思い浮かべ、心に一種のはじらいを覚えたことを今も忘れられないでいる。翌日は祖師ヶ谷大蔵の駅前で蓮田さんを送った。蓮田さんは列を作って並んでいるクラスの生徒ひとりひとりの手をしっかりと握りながら、「後はたのむ」と力づよく励まして行かれた。これが蓮田さんと別れた最後となったわけだが、すでに覚悟は十二分にしていられたことを改めて感ずるのである。

その後戦地から「文芸文化」に寄せられた原稿には、底光りのするような詩心があふれていて、まず蓮田さんの文章を愛し読んだものであった。蓮田さんの精神は学校におられるときから純粋無垢であったが、かの地のきびしい現実に磨かれて、それはいっそう消化されたように思われた。「詩は死である」という一語はそれを代表するようなものであった。この決意は学問にたずさわるものにも、いつも忘れてはならない教えのように思うが、この日ごろの私の精神にはいっそう貴重な刺激であるように感じられてならない。

「文芸文化」への追回が蓮田さんをめぐって思わず長くなったが、この雑誌と私との関係で記さないではいられないことがもう一つある。それは「文芸文化叢書」が刊行されるに当たって、その一冊を私に書くことを許された同人たちの御好意についてである。この叢書は今も私の本棚に並んでいるが、斎藤先生の「日本的性格の文学」、栗山さんの「風流論」、池田さんの「言霊のまなび」、清水さんの「女流日記」、蓮田さんの「予言と回想」など多くは古典についてのすぐれた業績を世に問われたものであった。私は大学を出るときからずっと近代文学の方にかかわっていたので、この◇書にはふさわしくないとも思ったが、まだ書物というものを一冊も出していなかった私には、このおすすめはうれしかった。

初め私の計画ではそれまでに方々に発表した小論考を一冊にまとめるつもりであったが、出版元の子文書房の主人がやってきて、できれば書き下しにしたいということをいわれた。当時岩波書店から「二葉亭四迷全集」が出版され、私はそれに基づいてこの明治文学の先覚者の足跡について少しずつ書きためていたときだったので、同人にも了承をえてとりあえずその稿を完成することにした。こうしたおかげで私の処女出版として「二葉亭四迷」が日の目を見ることになったのである。発行は昭和十六年三月で定価は一円五十銭であった。発行部数はたしか千部ぐらいだったと記憶するが、その後の戦災のために子文書房は焼失し主人は行途不明になるという不運にあい、それ以来絶版になってしまった。ときたま古本の目録などにその名を見いだすこともあるが、二千八百円などという売価を見

ると、今昔の感に堪えぬ思いがする。

その当時からこの「二葉亭四迷」は「文芸文化叢書」としては多少場違いのような気持ちがしていたが、まことに偶然なことにそれが正宗白鳥氏の目に触れ、その年の五月二十九日から三十一日にかけて「朝日新聞」に三回にわたって連載された「二葉亭に関聯して」という文章の中に私の著書のことが度々引例されるということになった。今から思えば、もちろん白鳥氏の心を動かしたものは二葉亭自身の苦悩にみちた生活とすぐれた人間性であって、私はその紹介役を務めたにすぎなかったわけだが、最初に出した本が思いがけなく取りあげられたということは、私にとってはやはりうれしいことであった。この白鳥氏の文章は現在刊行中の「正宗白鳥全集」にも再録される予定になっているようであるが、三十代の半ばの私におとずれた奇縁みたいな思いが、この文章を書いている今もなつかしく去来するのである。

その後、小田急の電車の中で蓮田さんと同席したとき、「ああまで一個人の私生活をあばきたてるのはどうかと思う」という意味のことばを聞き、「自然主義」の研究から二葉亭四迷に進んだ私と、日本の古典のきびしい伝統から「鷗外の方法」へ移られた蓮田さんとの違いをはっきり意識したことであった。こういった実感は他の「文芸文化」の同人たちにも同じく感じられたところと思うが、それをあえて抑えて私に近代文学研究者としての末席を与えてもらった御好意は、今もなおありがたく思っているところである。

清水さんも、池田さんも、栗山さんも、この輝かしい出発点から順調に大成されて、今日の地位を学界にも得られたわけだが、それでは現在ふたたび「文芸文化」刊行当時のあの若々しい純粋な情熱を具体化することができるかといえばよほどむずかしいのではないかという気がする。人間の生涯にはその時期しか持ちえない独自なものがあって、それは形を変えながら次第に発展してゆくもののように思う。しかしいつの時代にも、ともすれば忘れられがちな「初心」に立ち帰ることが必要であるとすれば、「火の会」の同人たちが「文芸文化」の回顧を企画された意義もそこにあるのであろう。私も喜んで一文を寄せるとともに、私自身の回想と反省とを改めて自己に課する意味で、まとまりのない思い出を書いたのであった。

（41・11・27）

（表紙）

「二葉亭四迷」　坂本浩著　（叢書17）

16／3／19刊・298頁・1円50銭

目次

実行と文学の相剋

生立／外国語学校時代／文学時代（第1期）

初期の文学観・「浮雲」・飜訳／実行時代（第1期）　官報局・結婚／文学時代（第2期）／実行時代（第2期）外国語教授

満州行／文学時代（第3期）「其面影」

・「平凡」／実行時代（第3期）／後期

紹介の言葉

明治文学研究家として著者をユニークたらしめてゐるのは、その求道的な激しさである。憂国の志をもちつゝも、欧化万能の時代を生きねばならなかった二葉亭の悲劇が著者の真摯な魂によって浮彫にされてゐる。二ケ年に亘る四百数十枚の書下しである。（「文芸文化」昭和16年5月号表紙3）

二葉亭四迷といふ筆名を以て自嘲しつつ新日本文学を覚醒した作家の新研究

（「文芸文化」昭和16年6月号表紙3）

「文芸文化」の思い出

林　富士馬

追記のかたちで
小稿の前に

只今、小生の原稿に対して、編集の方からのおたよりを頂き、小生の記憶に、かなりの間違いがあったことを知りました。なるほど、記憶など、（成心がなくとも）あてにならないものですネ。

「〈日本浪曼派〉と〈文芸文化〉の人々と、直接に関係はない。例えば、保田與重郎氏なども、あまり〈文芸文化〉に執筆したことはなかった筈である」と、しるしましたが、今度、諸家の寄稿目録を送って頂き、亀井勝一郎、山岸外史氏等の「日本浪曼派」の人々や、当の保田與重郎氏にしてからが、かなりの回数、寄稿されているのを認識しました。のみならず、小生が「ひと筋の道」（保田與重郎小論）なるものを綴っていたことなども、全く忘却していました。当事、保田與重郎氏について、なにを綴っていたものやら。

その他にも、随分、記憶違いがあるだろうと思います。たゞ、小生の当時の印象としては、亀井勝一郎、山岸外史氏等々同人雑誌」日本浪曼派」の同人の方々の寄稿があったにしても、それから又、たまたま「日本浪曼派」の廃刊と「文芸文化」の創刊が重なったにしろ、やはり「日本浪曼派」と「文芸文化」とは、直接には関係がなく、関係があったとしたならば、伊東静雄氏を通して、と云うことが強く頭にありました。（田中克己氏は「日本浪曼派」の同人ではなかった筈です）

ほんとうは全稿、書き改むべきかも知れませんが、以下の文章も何らかの参考になるかとも考えて、そのまゝにしておきましょう。不用意な一文で、皆さまに御迷惑をおかけしているとは思うのですが——。

（41・12・6）

今度お手紙を頂き、「文芸文化」が、昭和十三年から昭和十九年まで、通巻七十冊刊行された雑誌であることを知った。

云うまでもなく、「文芸文化」は、広島文理大の国文学者、斉藤清衛博士門下の故蓮田善明、清水文雄、池田勉、栗山理一諸氏による国文学の雑誌であった。

久松潜一、風巻景次郎、坂本浩、唐木順三、松尾聡と云ったその道の専門家の寄稿もあったが、文壇からは高村光太郎、佐藤春夫、伊東静雄、田中克己の詩吉井勇の短歌、飯田蛇笏、山口誓子、中村草田男、日野草城の俳句の寄稿も、一度くらいはあったように記憶している。つまり文壇的な雑誌ではなかった。

専門の国文学の領域にあっても、一種異端の営為とみなされていたのではなかったかと、そんな気がする、と云っても、何しろ「文芸文化」と云うと、ありきたりの典型的な文学少年として、国文学などに縁遠かった私が、この雑誌によって、はじめて、自分達の古

典を身近かなものに、文学としても甚だ面白いものであることを教えて貰ったものとしての感謝だけを一番さきに思い出すので、専門的なことは判ろう筈もない。

「文芸文化」の人々の営為の一端を、思い出すまゝにしるしてみても、蓮田善明氏の「鴨長明」栗山理一氏の「其角」それから池田勉氏の「我が国風流の系譜」更に、清水文雄氏の「更級日記」などの業跡を、たちまち数えることが出来る。当時の営業文学雑誌の活字のほかに、そういうところにも、身近なものとして、文学があると云うことを、私は当時の典型的な「文学少年」として、「文芸文化」から教ったのである。

いま、文壇、ジャーナリズムで大活躍している三島由紀夫氏の小説「花ざかりの森」が掲載されたのは稀有なことであった。あれは、昭和十六年九月号だったという。そうすると、いまから二十五年ばかり前、三島氏は十六歳の少年だったわけになる。あの作品が、当時、そのまゝで、すぐに文壇的に反響があったというのではない。が、私はあの作品に接したときのことを思い出すことが出来る。発表されたとき、後記に「われわれ自身の年少者」とも亦「併し全く我々の中から生れたものであることを直ぐ覚った。そういう縁はあったのである」と云ったことがしるされていたが、無署名で、作者の名前は、そのとき発表されていなかったように記憶している。

切角の御注文であるが、このように、老人の昔語りのようなことしか、書くことはないようである。

近頃になって、「日本浪曼派」や「コギト」と関係づけて「文芸文化」を論じている人も多いようである。即ち、「コギト」昭和七年五月創刊、「日本浪曼派」昭和九年十月創刊、そして、「文芸文化」が、昭和十三年七月創刊という関係に於いて鳥瞰するのである。その時代の雰囲気のなかでの共通点、当時の時代に果した役割などが、一定の時間の経過したところから、そらぞらしく、したり気に論じられている。ひとつ覚えだが、詩人ならば、「耳傾けよ、愚者の審判に……」（プーシュキン）である。併し、当時の読者としての感じで云えば、そこに、それなりの nuance の微妙な違いが、文学の読者としては面白く、また大切だったとも云える。

ついでにしるしてをくと、近頃では、雑誌「日本浪曼派」と直接関係のない人に対してまで、雰囲気のまゝ「日本浪曼派の誰々」と名前をあげ、論をすゝめているのをよくみかけるが、なんでもないことと云えば、なんでもないことに違いないが、評論文などでは、切角、「図書館」などで勉強した人なのだろうのに、と、その読み方の粗笨なことまで思いやられて、興ざめのことに思われる。

「日本浪曼派」と「文芸文化」の人々と、直接に関係はない。保田與重郎氏などもあまり、「文芸文化」に執筆したことはなかった筈である。ついでにしるしておくと、私なんかが、保田與重郎氏の文業の意義、それから人柄の魅力に遠くから惹かれるようになったのは、戦後になってからのように思うし、例えば、蓮田善明氏に就いて云えば、あの「鴨長明」などには、むしろ太宰治氏えの、蓮田氏らしい親愛さが偲ばれるし、栗山氏について云えば、そう云うことが許されるならば、保田氏と云うより小林秀雄氏の文体の影響が面白いのである。

たまたま上京された伊東静雄氏につれられて、私は保田與重郎氏の家に案内され、それから、蓮田善明氏以下の「文芸文化」の人達

赤川歯科医院
呉市本通七丁目TEL㉑5279

に紹介して頂いた。

若し、「日本浪曼派」と「文芸文化」の直接の関係を云えば、その伊東静雄氏を通してのことであったであろう。

伊東氏は、保田與重郎氏を心から畏敬していられたが、そこには、同時に、文学者としての「敵愾心」とでも云った闘志も感じられた。「敵愾心」と云うのは、いま、かりそめに私がありあわせの言葉で表現してみただけのことであるが、それは甚だ「子供っぽい」もので、ながめていて、こっちが愉快になるようなそれであった。田中克己氏に対しても、それはあったように思う。「文芸文化」の人達に対しては、そういう伊東さんであったが、珍らしく警戒心がなく、もっと intimete なものが感じられた。それが珍らしかった。相手が文壇の人ではなかったためかしら。ときたま、威張ってみることの好きだった伊東さんは、「文芸文化」の人達に対しては、「俺が指導者だ」と云ったところを、直接「文芸文化」の人達に対してはなく、私のような後輩に示してみたいような、そういう稚気もあったように思う。いまになると、詩人のなつかしいところである。

西洋の文学では、原則として詩人は大切に取扱われる、と云うことを概念として知っていたが、その通りに、「文芸文化」の人達が詩人としての伊東静雄氏を、その日常生活の瑣事のなかで、いたわり、大切に過していられるのを眺めることは、美しいものを眼前に見る思いがしたものであった。そういう伊東静雄氏のおすそわけと云うのでもあるまいが、「詩を書く少年」と云うだけの資格で、淡いおつき合いであったかも知れないが、当時、「文芸文化」の人達に親切にして頂いた経験は、その後、この人生で経験しなかったことのような気がしている。剛毅で優しかった蓮田善明氏が、当時の私の或る作品に対して一文を綴って下すったことなども、書かでもの「文芸文化」と、伊東静雄氏との、そもそもの結びつき、その後の関係は、小高根二郎氏の労作「詩人、その生涯と運命」に詳しいので参照せられたい。

当時、若く、優しく、情熱に燃えていた篤学の学者達であった「文芸文化」の人達は、いま、どうしていられるか。再度、出征し、戦地でなくなられた蓮田善明氏のことは別として、当時、学習院で、三島氏の師であった⊗水文雄氏、それから、当時のまゝ、いまも成城大学で教鞭をとっていられる池田勉氏とは久しくお逢いすることはないが、お元気だというお噂さは聞いている。栗山氏とは、成城大学の教え児で、たまたま私の患者さんという人がいて、その人の案内で、一晩、銀座、池袋、新宿と飲み歩いたことがあった。そういうところに不案内な私だが、栗山さんは「顔の利く」常連のようであるのに、びっくりしたことである。そうして、嘗て、伊東静雄氏が「あの人は、エライ学者になる人ですよ。文学博士になりますよ」と語っていたように、その詩人の予言の如くに、大学者であり、文学博士なのであった。私達は、「文芸文化」に関聯して、伊東静雄氏と田中克己氏と富士正晴氏と、それから三島由紀夫氏とについて、一行ぐらいづゝ触れ、文学のはなしはせず、ぐでんぐでんになるまで酒を飲んだ。併し、そのことも、もう三年くらい以前のことになった。

そうそう、蓮田氏の出征の留守中、栗山氏の世田ケ谷大蔵（?）のお宅に行って、人数は少なかったが、三島氏などと共に「古今和歌集」を読んだりしたことも思い出した。紀貫之が大批評家である所以を自得したのである。

当時、若かった「文芸文化」の人達の国文学の領域に於ける業跡は、いま思い返してみても、例えば、伊東静雄氏、田中克己氏の詩集などと共に実に印象鮮やかなものがある。こちたき評論家のたくいによってではなく、若く、文学を愛し、人生に真摯な人々によって受けつがれることを念ずる。

（41・11・25）

文芸文化関係年表

ゴシック数字は月、＊人事・一般事項◆国文学試論●文芸文化■文芸文化叢書▲新文庫を表示

和昭	7	8	9	10	11	12	13	14
	3	コギト						
	3 清水卒業、成城尋常科教諭5五、一五事件	3 栗山、広島文理大卒、堺中学に赴任4斎藤清衛、広島高師退職全国行脚9◆国文学試論第一輯（春陽堂）＊高藤武馬と交遊始る＊斎藤上京自炊＊清水、高等科教授となる	3 池田卒業、今宮中に赴任4清水、下祖師谷に転居6◆第二輯刊12◆批評篇第一輯刊	3 蓮田卒業、台中商業に赴任11◆第三輯刊	2 二、二六事件4斎藤欧米旅行へ8◆批評篇第二輯刊＊栗山宅で蓮田、清水、伊東静雄に初めて会ふ、彼を介しコギト同人保田與重郎、田中克己、中島栄次郎に接近・高野山遍照光院で「作文」（中学用）編輯10高藤「伝統」創刊	1 斎藤帰朝7日本作家論（◆第四輯）刊・日支事変勃発8遍照光院で「作文」（女学校用）編輯12「伝統」廃刊	4 清水、学習院講師、中学科二年に平岡公威（三島由紀夫）在学＊蓮田台中商から成城高へ転任5斎藤文博となる6古典新生（◆第五輯）刊・「日本文学の会」結成7「文芸文化」創刊8高野山で日本文学講筵・日本浪曼派廃刊10蓮田歩兵少尉応召	2 蓮田、中公懸賞論文に佳作道造死4蓮田中支戦線8清水、3伊東上京＊立原軽井沢斎藤別荘に遊ぶ9蓮田、栗山、伊東、中洞庭湖畔で戦傷11■日本的性格の文学（斎藤）■鷗外の方法（蓮田）12■風流論（栗山）

15	16	17	18	19	20
				8	
3■詩集夏花（伊東）4清水学習院青雲寮舎監＊池田、今宮中から法政へ転任5■言霊（田中）8■日本のまなび（池田）7■女流日記（清水）9■詩集大陸遠望（田中）10■文学の発生（風巻景次郎）●表紙、棟方志功、交遊しきり12蓮田帰郷還熊本で静養「有心」執筆＊斎藤北京師範大教授	1■予言と回想（蓮田）2蓮田上京3■二葉亭四迷（坂本浩）5■門の中（南蛮寺万造）11一古典的感覚」（栗山）12大東亜戦争勃発	1▲福沢諭吉・日本臣民の覚悟（八尋瑞雄）二宮尊徳（高藤）▲▲▲武蔵野の面影（安田）新篇（清水）新太郎（栗山）粗流記（清水）▲▲▲宮本武蔵（栗山）5＊斎藤村詩抄（栗山）海ゆかば（清水）帝大専任教授・一詩集夏花一透山）京城諸寺一茶（栗山）7▲現代の俳句（栗山）受賞▲▲▲俳句（栗山）賞3▲▲▲▲▲夢かぞへ堺中学かゝ興亜工＊栗山、八尋、8＊栗山、四人そろって佐藤春夫を屋訪問11吉大磨へ転任＊人磨と赤人（池田）▲天狗芸術論（栗山）日南歌集野拾遺（池田）▲更級日記（清水）今田遺（高藤）北哲夫）	3伊東、林富士馬らと紀州旅行▲遣唐使その他（仲原善忠）本居宣長（蓮田）9鴨長明（蓮田）10蓮田中尉召、濠北派遣・神韻の文学田）12古事記抄・＊蓮田、「おらびうた」を托す佐藤春夫に会ひ、夜光時計を貰ひ、	3清水、家族疎開、栗山と同居5三島由紀夫、伊東訪問6「忠誠心」とみやび」（蓮田）▲南山踏雲録（栗山）「文芸文化」廃刊9▲国学の森（三島）しるべ（池田）10「花ざかりの一花のひもどき」（蓮田）「都の文学」（池田）士正晴で刊行・富士正晴の尽力で刊行	8終戦＊蓮田ショホールパールで自決

文芸文化のこころ

丸山　学

「文芸文化」とどんな関係かと訊かれるとき、私はいつも「院外団」と答えることにしている。昔はそれでみんな納得してくれたものであるが、今はその院外団なるものが、言葉としてはまだ忘れられていなくても、どうも実感が伴なわぬものになった。考えてみると、院外団なるものが、今の日本には存在しなくなったのである。

院外団なんて云うものが、実在しようとどうであろうと今の私どもとしてはどうでもいいことであるが、雑誌「文芸文化」に院外団と呼んでもいいものが存在したことは、大事な点だと思う。あえて院外団と自ら称する所以は、文芸文化の運動に非常な関心を持っているのだが、さりとてその同人となって、この運動に参加するつもりはない、しかしそれだからと云ってヤジ馬的に外から眺めているのでもない、そんな関係だから、はなはだ俗っぽい表現だけれど、やっぱり院外団と云うような言葉があてはまるのである。

ところが文芸文化にはこのような院外団が終始百名から二百名ほど、あったように思う。この人数も容易ならぬものであるが、それよりも注意すべきことは、この院外団の構成が甚だバラィエティに富んでいたことである。普通の同人雑誌などならば、同人に似てこれに及ばぬもの、質的には同じようなのが、ずらりと並んでいる訳であるが、文芸文化の周辺には実に多彩な、そして異質なものが、院外団のようにわんさと詰めかけていたと云う次第である。

と云っても、実は私がこの院外団の人名簿を持っている訳ではない。いや、そんなリストなど、なかったと云う方が本当かもしれぬ。文芸文化の講読者名簿と云うものは、あったことかと思うが、私は見せてもらったこともないし、その必要もなかった。知っていることは、いろいろと風変りな院外団員があって、文芸文化が出るたびに、その連中が勝手気ままの角度から、これを批判したり、提打持ちをしたりしたと云うことである。文芸文化が日本の文芸運動の発展に特異な役割を果すことができたについては、この院外団の活動が一つの要因をなしていると、私などは自覚しているものである。

斎藤清衛先生ご自身がまずこの院外団であった。そのほか、私の知る限りでも、当時祖師ヶ谷のほとりに居住していた連中の発言はなかなかに有力なものがあった。大山澄太さんや南蛮寺さんなどである。私ども広島組は文芸文化の同人諸君の母校にたむろしているので、東京との地理的な距離はあったが、遠慮のないものが云える

立場にあった。当時、日本の国文学界には、国内の各大学や、有力な出版会社を背景とした多くの学党があってお互にシノギを削っていた訳であるが、文芸文化はそうした学閥的なものから極めて自由であり、その故に、この運動がひろく世に影響をあたえることができたと思う。広島大学の卒業生から成る同人が中心であったことは事実であるが、彼等の視野の中には、広島大学などは全く存在していなかった。はじめから彼等は野党であった。そのことが、文芸文化の運動の純粋さと、発展性を孕んでいたと云えよう。国文学の所謂「業績」をかせぐための雑誌などではなかった。それよりもはるかに壮烈であり、悲愴でさえあった。院外団がそうさせたのである

——と私などは、云いたい訳である。

文芸文化の刊行が終って既に廿年であるがこの雑誌が持っていた精神は消え去ってはいない。あの同人諸君と院外団とが、昔のままの人間関係を保って今の日本に生きているのも、うるわしい。それは「思い出」などと云うなまぬるいものでなく、これらの人々は、私をもふくめて、今もあの心で生きているのである。あの運動を形成した心が今も生きているところが、文芸文化が他のもろもろの雑誌や結社とちがっていたことの証しとなるように思う。

（昭和四十一年十二月於熊本）

文芸文化叢書・解題9

「日本の味」　大山澄太著　（叢書7）

■15／8／10刊・265頁・1円30銭・五版（18年）

■目次　にぎりめし／豆腐／味噌／禅寺日誌／禅宗坊主の感覚／仏通寺だより／春の声／障子／髪／栫屋／音／風呂／臨終／雀の宿／案山子の言葉／虫五夜／しぐれだより／河／はつなつの声／出雲紙／石見の秋／青葉の松山／旱魃／島崎藤村を訪ねて／富安風生を訪ねて／法師温泉より／日本的なるもの

口絵「嚔茶去」仏通寺派管主山崎益州書

■紹介の言葉

かって「青空を載く」「地下の水」の随筆集を自刻出版した著者のこれが第三番目の随筆集である。天空を仰ぎ地水の深きに想ひをこらしひたすらに自己に沈潜しつづけてきた著者は、事変以来、稀然として悟るところあって道友杉本五郎中佐の尊皇と禅の大精神を天下に鼓吹唱導する人である。

この人にしてこの著あり「日本の味」は静動自在の日本的風韻が随処に横溢し脈々不尽の伝統の味ひを感ぜしめるものである。（「文芸文化」昭和15年9月号表紙3）

■書評（文芸文化　15年11月号）

「日本の味」（戸山六郎）「日本の味について」（南蛮寺万造）「日本の味」を読みて（短歌三首　今田哲夫）大山先生と私（山下寛治）

恩頼と学縁

「文芸文化」のひとりの読者として

野地潤家

一

わたくしの学生時代は、昭和十四年（一九三九）から昭和二十年（一九四五）までのあしかけ七年間であった。すなわち、それは、昭和十四年四月、広島高等師範学校文科第一部に入学し、昭和十七年九月、そこを卒えて、ひきつづき文理科大学文学科に進み、昭和二十年九月に、太平洋戦争の敗戦とともに、そこを仮卒業するまでの期間であった。戦争のさなかに修学時代をすごし、昭和二十年一月から八月半ばまでは、学徒出陣にて仙台陸軍飛行学校に入校して、戦争末期の軍隊生活を経験したのであった。気がついたときは、もう学生時代は終わりを告げ、戦後の虚脱の渦がまきはじめていた。

――当時は、自己の青春がどこへどのように流されていくのか、みずからとらえるすべもなかった。戦争の激流は、すさまじい勢いであった。学生生活の始終を通して、出陣して戦死するということが念頭にあった。それは「死」と抱きあわせの日々であった。戦中派の多くは、このような学生時代をすごしたと思う。

こうした時期に、学生のわたくしが講読していたのは、歌誌「言霊」（故岡本明先生主宰）と「文芸文化」誌であった。わたくしが講読した「文芸文化」は、第五巻（昭和17年1月～12月）・第六巻（昭和18年1月～12月）・第七巻（昭和19年1月～8月）（43号～70号）の三巻二十数冊であって、「文芸文化」誌通巻七〇冊からすれば、ごくわずかであった。

二

当時、わたくしは、「文芸文化」が届けられると、赤鉛筆（もしくは紫色・青色のも）で傍線を引きながら読んでいった。

たとえば、蓮田善明氏の「伝へ――鈴の屋の翁のまなびごと」の中では、「それを唯の自然でもなく人為でもなく『神の道』としたが、要するに結局は単純な『事実』の上に神をまさやかに見た、清らかに純粋（といふ言葉を篤胤は使ってゐる）なものであった。それは神のまさやかな道である故に、已に明らかなものであり、研究などにより、又言挙げによって後に知らるゝものではなかった。それは普遍であるが、普遍といふよりも、大いなるといふべく、体系などよりは光といふにふさはしいものであった。究知といふよりは仰がるべく、それによってめぐまれてあるものであり、関係といふよりも伝はれるものである。即ち大御伝へであった。それは異国に

ないことであった。」（「文芸文化」第五巻第二号、第48号昭和17年2月号、二二頁）に赤線を引いている。読み進むうち、思わず引いたように思うが、とくに魅きつけられたのは、「それは普遍であるが、普遍といふよりも、大いなるといふべく、体系などよりは光といふにふさはしいものであった。」といふ個所であり、なかんずく、「光」といふ語は、強く胸裡に刻みつけられた。（蓮田善明氏の「預言と回想」《文芸文化叢書10、昭和16年1月9日、子文書房刊》を、わたくしは、昭和十七年五月末日ならびに八月六日と、二回通読している。）

また、池田勉氏の「言霊について」（「文芸文化」第五巻第六号、第48号、昭和17年6月号、三～一〇頁）は、いたるところ、紫色の鉛筆をもって傍線を付しつつ読んでいる。昭和十七年六月といえば、高師四年生の一学期で、戦争のため、急に八月二十日論文提出が決まり、卒業論文に、「言霊信仰思想」を選んで、準備を進めていたときだけに、池田勉氏の右の論考には、啓発を受けるところ大であった。さらには氏の文芸文化叢書5「言霊のまなび」（昭和15年5月17日、子文書房刊）所収「言霊のまなび」の富士谷御杖の論にも示唆を受けた。論文制作にあたって、わたくしは池田勉氏の所論から大きい恩恵を受けたのであった。

さらにまた、斎藤清衛先生の「研究室余録（二）」（「文芸文化」第五巻第八号、第50号昭和17年8月号、三六～三八頁）には、つぎのような一節があった。

「わが同胞は、これまで果して、伝統文学の無い場合のさびしさといふことを考へて見たであらうか。あまりにわが国民は、美しい伝統に恵まれすぎた結果、それへの感謝をまったく忘れてゐるのではあるまいか。（中略）

しかし、わが同胞の間にも、伝統文学に対する愛情を抱かぬものが無いとはいへまい。それこそ民族精神の上から見て、類の無い異端者の一人といふべきであり、国文学研究の出発も、ひたすらな古典愛の精神にあるべきことを思ふものである。自分は、国文学研究を見つけ出してゐる。殊に日本的なるもの自身の生長発展するといふ見方は過去に典型を見るのみの立場に比して生新である。「方法」の部の文学論的反省の年代的記述は国文学徒としての著書の過去十余年に亘る苦闘の足跡を語りそれは又そのまゝ国文学の将来への予言ともなってゐる。

（「文芸文化」昭和15年11月号表紙3）

文芸文化叢書・解題10

「文学の発生」　風巻景次郎著　（叢書9）

■15／10／15刊・333頁・1円60銭〒10銭

■目次

序

仮説　文学の発生／日本的といふこと／日本の風土／風土の北と南／日本の風景／風景の成立／描写・小説・源氏物語／新古今集の叙景と抒情／短歌の現在と中世性

方法

文芸と個性／「文芸と個性」を読んで－石山徹郎氏による批評／日本文芸学の発生／新興国文学／古典の研究／鑑賞と解釈／研究の対象としての古典

■紹介の言葉

文学の発生は先づ人の心の上の問題であると同時に長い文芸史の上の問題である。

著者は右の二つの点から出発して文芸史上に於ける文学の発生を考へ更に古典文学を感じることに就て種々注意すべき条件

に踏み入らうとする若い学生に対する時、『偉大な愛の対象たりうるものをまづ自ら発掘せよ』と勧めるのを恒としてゐる。愛なきところ文学のまことの研究は存しないだらう。」（同上誌、三八頁）

斉藤先生のことばに、わたくしは深い感銘を受けた。それは静かにあたたかくさとされている感じだった。

先生はさらに、「研究室余録(三)」の末尾にも、

「ただ余はつねに、研究の出発において、学問の対象について持った『愕き』の心理といふものを重視しようとするものである。その『愕き』の後に、研究への愛着が続けば、もうしめたものではあるまいか。

古来、日本の能芸において、『好き』といふことを特視した論が甚だしく多い。しかし、これは能芸のみならず、例へば、国学、歌学、等の諸学の態度にあっても同様である。学問の名において、その方法こそ、科学的のものが重要であらうが、学問と人との結びつきには、『好き』といふ心理過程を無視することが出来ない。

われわれ、学問の首途に立つものは、最初に抱いた愕き、讃仰、敬畏、愛着といふ類の体験をいま少し、尊重するやうにしようではないか。」（「文芸文化」第五巻第九号、第51号、昭和17年9月号、四〇～四一頁）と述べられた。今にしていっそう思いあたることが多いのである。

三

清水文雄博士の「衣通姫の流」では、つぎの個所に青色の鉛筆で傍線を施して読んでいる。

「一体文化がこのやうな状態にある時、和歌が色ごのみの家に埋れてひそやかに伝へ保たれてきたことは和歌自体の歩みにおいては寧ろ自然なことであって不運などとは言ひ難いものであった。一見『あだ』で『はかな』く見えるそのやうな状態に於いてこそ却って歴史の清らかな命をその中に保ちつづけることが出来たのだといってもよい。それが文化の頽廃に対決して己れの清らかさを護る和歌自体の自然の姿勢ともなったのであった。もともと和歌は、『あだ』で『はかなき』すさびであったのである。それが和歌の真姿であったのだ。」（「文芸文化」第六巻第一号、第54号、昭和18年1月号、三五～三六頁）

また、「『小野小町は古の衣通姫の流なり……』とよんでくるとき悠久の国文学の生命がここで突如眼眩むばかりの閃光を発するやうな気がする。」（「文芸文化」第六巻第三号、第57号、昭和18年3月号、三頁）にも、傍線を付している。

さらにまた、博士の「衣通姫の流」の中の「今『みやび』といふことに著眼して之を問題とするならば、ここでは『恋』が『みやび』の重要な契機となってゐることを知る。初冠の男がはからずも春日の里で見染めた美少女姉妹に心ひかれて、激しい思慕を感ずる。この若者の初恋の純粋な一途さは『心地まどひにけり』の簡単な表象にもよく出てゐる。『みやび』はこの恋の情を母胎としてそこから昇華したものであるが、この『みやび』は又恋の思ひが至純至烈となったはてに美神の降らす繽粉たる『花』を俟ってその生成を遂げたのだといってよい。けれども恋の情が花を降らす美神を招くためには、枕詞、序詞、縁語、掛詞乃至本歌取等によって自身を麗しく飾らねばならぬ。神を呼ぶためにする晴れの身づくろひである。このやうにして『和歌』は詠み上げられるのである。」（「文芸文化」第六巻第四号、第58号、昭和18年4月号、一六頁）の個所も、赤鉛筆でくれないに彩られている。

論考「衣通姫の流」の深奥のことは、当時の一学生にわかるはずもなかったが、そのユニイクな論究の姿勢に、わたくしは啓発されるところ大であった。

なお、「文芸文化」誌の「後記」は、いずれも心がこもっていて、共感を禁じえないものが多かったが、中で心に泌み入る思いがしたのは、栗山理一氏の「枯枝の柳」であった。その後半には、つぎの一節があった。

「けさの新聞には、昨冬アリューシャンに従軍した新聞特派員の追憶談をも掲げてゐたが、そこには氷雪と濃霧に閉ざされたこの北洋の孤島を死守する若い兵の尊い姿が伝へられてあった。夜半の闇を利用して入港する補給船に乗りこんだ特派員が、僅かの暇をみて磯に下りたち、慰問にと差しだす新聞を、波際のとぼしい篝火の明りで、むさぼるやうに読みふける兵の姿。『何か記念品を』とその特派員にねだられた時、言葉数もすくない若い兵は、黙って、一本の枯れた柳の枝を取り出し『これだけです』と微笑したといふ。何といふ美しい詩心ではないか。ここにも日本の詩魂があったのかと驚く私の瞳には、一瞬、荒涼たる孤島の磯辺に手折られたこの一本の枯枝の柳が馥郁たる春の花束のやうに輝いて映った。」（「文芸文化」第六巻第七号、第61号、昭和18年7月号、三一頁）

また、栗山理一氏の新刊紹介「古代日本の文芸」（岡崎義恵氏著昭和18年5月30日、弘文堂刊）のうち、どういうものか「豊かな繁みを増しつゝある岡崎文芸学の新たな一枝である。」（「文芸文化」第六巻第八号、第62号、昭和18年8月号、二八頁）という結びの文を忘れえないでいる。

以上は、斎藤先生を中心とする同人四氏からの恩頼のほんの一端を記したにとどまる。通巻七〇冊に及ぶ「文芸文化」誌の集積した研究・創作の面での業績の清新さ・重厚さは、ここによく尽くし得ることではない。戦時下の一学徒にも、このように滋味溢れた摂取を可能にした同誌の恩恵を、わたくしは忘れることができない。

四

「文芸文化」誌を拠点として、そこにつどわれた方々に、当時広島在住の学生だったわたくしは、むろんお会いすることはできなかった。（高師時代、英語を教わり、民話の紹介をいただいた丸山学先生は別として……。）

旧制中学時代、仲田庸幸博士に指導を受けたわたくしは、つとに恩師の恩師斎藤清衛先生のお名前を存じあげていたが、お目にかかったのは、戦後昭和二十一年四月になってからであり、武蔵野のお宅に参上したのは、昭和二十七年の秋だった。池田勉・栗山理一両氏にお目にかかれたのも、この折、斎藤先生のお宅においてであった。

蓮田善明氏にはついにお目にかかれなかった。ご令息にお会いすることを得たのは、昭和四十年九月、博多駅頭においてであった。

三島由紀夫氏には、昭和四十一年八月二十六日、新広島ホテルの懇談会において、大山澄太氏には、同じく昭和四十一年十月十八日、松山市の大耕舎において、それぞれ拝眉の機を得た。すべては、昭和二十二年五月以降、広島に帰住され、のち親しくご指教をいただけるようになった清水文雄先生のご高配によるところである。

このようにして、「文芸文化」愛読に淵源する学縁は、わたくしのばあい、年とともにゆたかなひろがりを見せている。それはまた、「文芸文化」誌が終刊したにもかかわらず、かってのひとりの読者の胸底に、今もなお生きつづけていることを証するものである。

「文芸文化」は、決して一粒の麦ではなかった。もっとゆたかな種子として数多くあの戦時下に蒔きつづけられていたのだと思う。

（昭和41年12月14日稿）（広島大学助教授）

遠藤酒店
呉市東雲町二丁目9　電話㉑3548

アンケート

1「文芸文化」の昭和文学史あるひは国文学史に於ける意義をどの様にお考へですか。
2現在ならびに将来に於いて「文芸文化」の精神を継ぐ文芸運動は意味のあることですか。
3「文芸文化」同人及び関係者の著作あるひは作品で感銘を受けられたものがあれば、その著作、作品名とその理由を。

（敬称略・到着順）

三枝康高　（49才）

1「文芸文化」には斎藤門下に特有の文芸学的発想としなやかなスタイルがあって、そのロマン主義は評価されるべきものを持っていました。

2　ただ「文芸文化」はいくぶん室内楽的なところがあり、それをオーケストラに再編しないと、発展的な意味あるものにはなりにくいでしょう。

3　伊東静雄のものだけでなく、蓮田・清水両氏の文業は印象に残っています。

（静岡大教授）

長谷川泉　（48才）

1　他誌が発表の制約を激しく受けた中にあっては、時にブリリアントな論文が載ったと思う。

2　現在は常に過去と断絶はしないという意味において評価はするが、現代の課題を担う主体性の燃焼の中でのみ意味がある。

（学習院大講師）

磯田光一　（35才）

1　近代主義史観へのアイロニカルな逆説として、存在理由を認めます。どこまでも逆説的存在としての話です。正説としては弱い。また弱い所が魅力でもあります。

2　昭和十年代の不幸は、美学と政治的要請との癒着にあったと思います。小生としては、実生活では戦後的合理主義を貫き、そこから洩れたものを、美学の次元でのみ再評価したく思います。小生はロマン主義者ならぬ新古典派です。つまり、セルヴァンテスの眼でドン・キホーテを救いたい。

3　伊東静雄の詩
日本的心情の鉱物的結晶として。小生は植物的抒情は好みません。

（評論家）

杉浦明平　（53才）

1　二、三冊しか読んだことがないけれど、たいしたことは書いてなかった。国文学史なんか、もともと阿呆みたいなものだから、そこでどんな意義があるやら。

2　べつにないでしょう、提灯持ちが威張るにいい季節が来たら、ぼくも真似してみようかなとおもう程度。

3　伊東静雄の詩集にいくらか。しかし形式が強くて内容足らず。

（作家・評論家）

荒　正人　（53才）

只今病気入院中につき、このアンケートのご返事はいたしかねますので悪しからず、おわびまで。

（評論家）

大久保典夫　（38才）

1　日本の近代文学史を、西欧文学の影響史としてでなく、古典と現代をつなぐ美意識の系譜として捉えるものにとって、重要な意味をもっています。

2　そのままの再生はありえませんが、現在の三島由紀夫においても「文芸文化」の古典への志向が、現代文学として生かされていると思います。

3　伊東静雄『春のいそぎ』

（文芸評論家）

西田　勝　（38才）

1　まだよく考えたことがありません。

2　わかりません。

3　まだありません。

竹内　好　（評論家）

当時は関係なく、いまもほとんど関心がありません。回答を辞退させて頂きたく存じます。

江頭彦造　（53才）

1　明治からの西欧化文明の潮流に対して日本の古典の伝統を深く追求しようとした意義は高く評価されることと思います。

2　将来においても、その精神をつぎ、方法的な新しさを加えてゆくことは意味があるばかりでなく、必要不可欠でしょう。

3　清水文雄や伊東静雄の書いたものには、今もって深く共感しております。
理由は1にのべたことです。

（静岡大教授）

高田瑞穂　（56才）

1　古典的なるものの解明。

2　文芸運動自体が必要です。

3　三島由紀夫のエッセエに関心を持っています。

（成城大教授）

山岸外史　（62才）

1　出題が少々むずかしいし、また「文芸文化」を丹念に読んだ記憶がないのでお答えしにくいのですが、今日の日本文化がヨーロッパ文化と日本伝統文化の混淆のなかにあるのですから、文化本質、文学本質を新しい形で追及する運動にはつねに賛成です。
その意味では「文芸文化」に「純粋」の線はあったように記憶しています。

2　今日まったく文学運動のないとき、さらに一新された日本国文学運動のおこることには賛成です。但し文学本質のエスプリをいかなるものとして再出発するのか。
僕は今日、「リアリズム文学」つまり現実社会における人間生活の徹底した真実追及に基礎をおいているので、その角度から考えますが、とにかく真剣な追及のあるものとなるのならば、大いに意味があると思います。

3　僕は伊東静雄君とは意志が疏通したと考えているので、まず作者としての彼の名を挙げたいと思います。詩集「夏花」もむろん読みました。彼は純粋な詩精神をもった詩人だと思っています。彼の詩集はみな貫って読みました。清純な魂しいをもっていた詩人だと思っています。

（評論家）

保昌正夫　（41才）

1　時世に冒された便乗的言挙げと見る評価は単純きわまるもの。むしろ反時代的な、強烈な浪曼的志向が顕証される。

2「精神を継ぐ」ことはよいだろうが、あれはあの時世にあってこそ「意味」を有し得たのであってみれば、あのままは「意味」にならないだろう。そのままでは「精神」にならぬではないか。

3　蓮田善明『本居宣長』
池田　勉『都の文学』
前者は出版当時、後者は三、四年前に読んで「みやび」一途といった印象を受けた。

（早稲田大高等学院教諭）

嘉納とわ　（79才）

1　日本の文芸に表現されてゐる日本の伝統の深い精神を教へられました。今でも感謝して居ります。

2　大いに意味があると存じます。
今のこの種の雑誌は解説が主で「日本のこころ」が出にくいやうに存じますが……

3　十五年　栗山理一様　愛誦千句
小倉山荘色紙和歌
十六年　池田　勉様　境の表現停止
在原業平
有馬皇子
十七年　斎藤清衛先生　新国学観
清水文雄様　式子内親王
池田　勉様　天武天皇
十八年　〃　荒都の悲歌
栗山理一様　定家像

（歌人）

大塚雅彦　（45才）

1　歴史的意義については、専門家が色々と論ずるだろうが、私にとっては、高校大学時代を通じて、私の青春を彩ったものの一つとしてなつかしい。国文学や日本文化への私の愛のめざめを回想するとき、思い出す雑誌である。

2　意義はあると思う。たゞ、右翼や超国家主義を抱合した戦争中の歴史をくれぐれも忘れないでほしいと思う、慣重さを期待する。

3　蓮田善明「鷗外の方法」
栗山理一「俳句批判」

（家庭裁判所調査官研修所教官）

蓮田氏の思ひ出

浅野　晃

『文芸文化』は昭和十九年の春に、第七巻第四号―通巻七〇号をもって終刊となった。その「終刊のことば」には「私たちの終刊の決意の一端を洩せば、玉砕を以て悠久の大義に生きた益良男の神忠を慕ふものとでも申せませうか。それ故、小誌は終刊しても、我々の志は決して喪はれたわけでも、衰へたものでもありません。たゞ地下ゆく水の姿に保守のをかへたにすぎません」とある由を、私は『果樹園』に連載された小高根二郎氏の伊東静雄伝で読んだ。

このころ『文芸文化』の編集は、清水文雄氏が当ってゐたとのことであるから、上の「終刊のことば」も、おそらく清水氏の筆になるものであらうと思ふ。わたくしはここ数年来、上京中の清水氏といくたびかお会ひする機会を得てゐる。そして清水氏の顔をみると、ありし日の『文芸文化』のことが思ひ出されるのである。思ひ出といっても、きはめて漠としたものではあるが、一つのまぎれのない情調として、その印象はあざやかなものがある。

○

昭和十三年の夏から、『文芸文化』は創刊された。そのころ、わたくしは、新日本文化の会の月刊雑誌の『新日本』の編集委員の一人であった。佐藤春夫、萩原朔太郎、倉田百三の三先輩のもとで、中谷孝雄、藤田徳太郎、林房雄、芳賀檀、保田與重郎の諸氏と共にであった。中河与一氏や三好達治氏も加はってゐたやうに覚えてゐる。中河氏の『文芸世紀』はもう創ってゐたかどうか記憶があいまいだが、『コギト』や『日本浪曼派』はさかんに活躍してゐた時期である。

そこへ『文芸文化』があらはれた。わたくしは創刊のときからの読者ではなかったかも知れない。しかし、いつからか寄贈を忝くするようになり、また蓮田善明氏とも知り合って、著書をも贈られるようになった。この辺のわたくしの記憶はまったく前後がはっきりしないが、蓮田氏とはじめて会ったのは、おそらく『文芸文化』が創刊された頃のことであったに違ひない。氏に対する第一印象は、いかにもがっちりした逞しい感じであったが、それは体軀からうけた感じである。頭をざんぎりにしてゐたので、よけいそのやうに感ぜられたのかも知れない。しかし眼がじつに柔和で、慈眼といふ感じであった。あの繊細な感受性の持主であることを、わたくしはそれで肯ったことである。

○

蓮田氏の生前、氏から贈られた著書が、わたくしの手許に現に二冊ある。『鴨長明』と『花のひもとき』である。わたくしは昭和

二十年の五月の空襲で東京の永福町の家が焼けて、蔵書のほとんど全部をきれいに灰にしてしまったのであったが、この二冊は、ほかの少しばかりの本といっしょに、そのころわたくしが寄寓してゐた大鹿卓氏の家に携へていってゐたので、焼けずに残ったものなのである。この二冊のほかに、『本居宣長』も氏から贈られ、いつも座右に置いてゐた筈なのに、これだけが見当らなかった。昨年、清水文雄氏にそのはなしをしたら、自分のところに余分があるからといって、一部を贈られた。氏の御好意のおかげで、わたくしは、蓮田氏の遺著を三種、いつでもひもとくことが出来ることになった。

そのうち『鴨長明』の「はしがき」には、次のやうな一節がある。

「私は本書に長明を書いて、そこに時代を書き、詩人を書いた。しかも多くの戦場帰還者が書き綴ってゐる幾多の文章の中にあって、これは国文学者としての私の覚悟として書かれたものである。私はそのことを衒ひなく卒直に記しておきたい。」

この一節を読むと、おのづから胸に迫るものを感じる。氏も十三年の秋に大陸に出征し、十五年の秋に帰還してきた「戦場帰還者」なのであった。

○

「これは国文学者としての私の覚悟として書かれた」ものだと、著者は「はしがき」に記した。そのことの故であらうか、『鴨長明』といふ本は、ひもとくたびに引きよせられる本である。俗にうしろ髪を引かれるといふが、何かそんな思ひがして、またそのあけの日も手にとらずには居られないやうなものがある。例へばその終章の「ひと」のなかに、

「長明もひとしく心の底に世と人とを空想めいて想ひ抱きつつ、院の隠岐への御遷幸の日に早く先立って世を去ったのである。世を去った後には、かの山寺の家のの十才余りの少年が残ってゐた筈である。そのことも記しておいていい。それが彼の生前の友であった。〈彼は十才、これは六十、その齢事の外なれど、心をなぐさむる事これ同じ〉と方丈記の中に書いたことがある。このまだ人とも民とも言ひやうのない小童などに友を見出してゐるのであるが、それは長明が先づは微かにそれともあらず見出したひと、と民のおもかげを湛へてゐると言ふのは、牽強が過ぎるであらうか。云々」

とある一節など、目に触れるたびに、そのままで措いておけないものを感ずる。これは後鳥羽院の「おどろが下」の御歌を思ひ出でつつ、長明の生の養ひ方を考へて言ってゐる箇処なのである。そしてわたくしは、あの傑作「有心」、に思ひ及ぶのである。

○

蓮田氏の壮烈な最後について承り及んだのは、いつのことであったか俄かに思ひ出せないが、あのとき受けた感動は忘れることが出来ない。それについて『果樹園』の第八十九号の小高根氏の文中に「哭蓮田善明」という題の佐藤春夫先生の詩が発表されたことを特筆したい。先師のあの詩は、こんど講談社から出た全集（第一巻全詩集）には洩れてゐるやうだが、先師の作の中でも不朽のものに属すると信ずる。「すめぐにの文の林に」から詠み進んで、

じよほうるに　己がこめかみ
ぴすとるの　たまにつらぬき
たまきはる　いのちすぎぬる

のところに至るごとに、落涙を禁じ得ない。

ふとん
百貨　江戸屋
呉市三城通6丁目3　㉑6884

蓮田善明のこと

荒木精之

「文芸文化」はあの頃毎月送ってくるいくつかの雑誌の中でも、とりわけ私は関心をもち、大切に保存するやうに心掛てゐたものであった。それは同郷の敬愛する人、蓮田善明に寄する私の親近感といったものが根本にあったからである。と同時にその頃緊迫してゆく時勢下にあって、「文芸文化」の内容とその志向するものが、古典をふんまへ、日本人のこころのふるさととともいふべきものを呼びおこさうとするものがあって、私の心をひいたからでもあった。私は「文芸文化」のさういふ意志を感得し、信頼をよせ、それにふれることをたのしみ、極めて貴重なものを内包するものとして大切に保存するのであった。そのやうな「文芸文化」を私はいま一冊も持ってゐない。昭和二十年七月一日夜半におこった熊本大空襲で、私の家も炎上し、何もかも烏有に帰してしまったからである。

私が蓮田善明の名をはじめて知ったのは昭和十四、五年ごろではなかったか。ある日、鹿本郡植木町蓮田善明といふ差出人から一冊の本が送られてきた。それは「鷗外の方法」といふ本であった。ひらいてみるとなかなかすぐれた内容である。私は植木町といふ小さな田舎町にこのやうな本を著す高度の知識人がゐたのかとおどろき、その本を持って熊本県立図書館にゆき、館長の佐々国雄に示しながら、野に遺賢ありじゃないか、と大いによろこんだのを覚えてゐる。

蓮田がその時植木にゐたのは、あとで聞くと、さきに日支事変に応召して、中支戦場に立ち、負傷して帰還してゐた時だったやうである。彼が熊本の済々黌出身であり、丸山学や蒲池正紀ら現在私が親しくしてゐる連中と中学から広島高師と一緒だったなど知ったのは、かなりあとであった。彼はその時、成城高校の教授で、まもなく上京して同校にかへり、かたはら「文芸文化」の活動をはじめたのではなかったか。かうして私にも雑誌が送ってくるやうになった。

私たちは次第に親しくなっていった。一つは同じ郷里の者同志といふこともあったらう、それに私が熊本で「日本談義」といふ文化雑誌をおこし、まもりつづけてゐるといふことの意義を彼が認めてくれたことからであらう。彼が未知の私に「鷗外の方法」をいきなり送ってくれたのも、さういふ私の志向に対して好意をもち、よそながらある種の親近感をよせてゐたからにちがいない。私は彼を尊敬し、ことに彼がものす文章を読んでゆくにつれ、志ある国学者――たぐゐまれな才能をもつ人として認識するのであった。私はこのすぐれた同郷の彼の文章を郷土の人にも知ってもらひたいと思って私の雑誌に執筆を乞うたことがある。彼は多忙な中にもかゝはらず、「国学古意」といふ文章を書いてくれた。十一枚ぐらいの文章であった。私はそれを日本談義の第六巻第四号（十八年四月号）にのせた。

それは真の国学とは何か、古意とは何か、といふことを明らかにしようとしたものであった。彼はその中で当今流行してゐるあげつらいやことわりを否定し、記紀の中にもられてゐる古代人のさかんなるいきほひを感得することだといってゐる。いはゞ生命的な感じ方、学び方を説いてゐる。

昭和十八年の夏、私は水戸に行はれた錬成会にでかけた。その帰途、八年ぶりで東京の地を踏んだが、在京の友人森本忠たちがその機会に私の歓迎会を日比谷の山水楼で開いてくれた。私は直接蓮田善明と会ったのは、その時がはじめてで、そしてまた終りでもあった。この会には高木武博士をはじめ、今田哲夫、太田黒克彦、大鹿卓、浅野晃、野田宇太郎、小島貞介、牧野吉晴、島田春雄らさうさうたる顔ぶれが集まってゐたが、蓮田善明はその中でも私の印象にもっとも鮮烈にのこってゐる。その時、彼は清潔な感じのある詰襟の国民服のやうなものをきてゐた。白いカラーが少し首のまはりに見えてゐた。毅然とした凛々しい武人のやうな中に、やさしい、ゆたかなものを湛へた顔貌であった。澄んだ眼眸がいまもうかんでくるやうである。私たちはそこではじめて言葉を交したが、どんなことを語りあったか、多数の人にとりかこまれていくらか上気してゐた私は覚えてゐない。たゞお互に信頼しあってゐるもの同志だけがもつ数少ない言葉の交し方であったやうである。私はそのころ熊本で、神風連の墓さがしをしてゐたのである。

「蓮田善明はこの歓迎会のあと、日本談義の九月号に「祭暦について」といふ一文を寄稿してゐる。この文章はたしか十枚足らずのものである。おそらくこれは私が水戸行の前にすでに頼んでゐたものであらう。彼はこの文章を、私にあてた註文といったやうな形で書いてゐる。それは古道の本義にふれつつ、水戸の会沢安の「草偃和言」を例にとり、また肥後の長瀬真幸が国学とは、今日の人が往々、

（カバー）

「鷗外の方法」蓮田善明
■14／11／18刊■228頁・1円〒10銭
（叢書2）
■目次
序文（斎藤清衛）
小説について（副題―森鷗外の方法）
1自己弁護
2―青年
3現代のモラル
4―小説のために
詩のための雑感
本居宣長に於ける精神（副題―日本文芸学の問題）
1和歌
2性情の論（みやび）
3後世風
4人情
5風雅
6契冲の精神
7素質と教養
8ヒューマニズム・古学
9神・古代科学
10世界・古事記
11独断への反省
12世界・日本の責任
14文芸の道

■紹介の言葉
世に国文学者を以て自ら認ずる者は多いが、明白な文学理論を抱持してゐるものは意外に乏しい。この理論の貧因が、いかに過去の日本文学研究を邪路に迷路に陥らしめたことか。勿論、学問の方向を定立することは架空の計にすぎない。文学理論をすしてはなくしてはじめて、文学の科学的研究の理想が達成さるべけれど、両者は相俟ち相助けあひ、以て、文学の科学的研究の理想が達成さるべき性質のものである。

本書は、目下硝煙弾雨の下に馳駆してゐる著者が、渡洋前その入隊生活の寸暇を活用して鷗外の文学論評である。古事記宣長の研究者として知られた著者の懐古思想の深いかしてゐるものめあげたものと評してよろしい。その鷗外を主題としたものは、文学の中の小説、理論、詩、雑感、その他に、文学一般ついては一宣長におけるおほやけの精神についての一章も加へられ、すべて尖鋭にして深刻な論法は、必ずや読者の心を捉へて離さぬものあることを信ずる。

（文芸文化―昭和14年11月号　奥付広告）

■書評
「鷗外の方法」に就いて（久松潜一）
「詩のための雑感」について（田中克己）
私信（坂本浩）
蓮田君の「方法」（高藤武馬）

日本思想的なものと思ひこんでゐるのとは趣きがちがって、いはば典礼行事有職学的なものであるといってゐることを述べ、自らの「本居宣長」もこの見解に立って書いてゐるといひ、熊本にある私に、祭暦行事のふみだしをすゝめたものであった。

この時の「日本談義」でみると、この頃、彼は文芸文化叢書の一として「予言と回想」を出版したことがでてゐる。まもなく、彼に再度の召集があった。

私は彼の「花のひもとき」といふ書物を忘れることができない。彼はその書の序の末尾に「昭和十八年十月三十一日あかつき近く、熊本駅貨物掛室の机をかりて、著者」としたためてゐる。いまの熊本駅は戦後新たに建ったものであるが、以前の古色蒼然たる旧熊本駅の隅っこにあった貨物掛室の机をかりて、彼がその書の序を書いた姿が、ありありと浮かんでくる。彼はそれを書いたあと、海を渡って征途にのぼり、再び日本の土をふむことがなかったのである。

その年の十二月、佐藤春夫は従軍作家としてジャワの地にあった。そして同月二十八日、空襲ジャワのスラバヤの街で、佐藤は蓮田にめぐりあったのである。その折、蓮田は佐藤春夫に戦陣の中でものした一巻の歌稿を托した。これが「おらびうた」とよばれる短歌八十五首、長歌十六首の内容であった。この「おらび歌」は昭和十九年七月号の「文芸文化」に発表された。そしてこの号を以て「文芸文化」は廃刊となった。

昭和二十年八月十五日、わが国は運命の日を迎へた。やがて蓮田が南の島で自決したといふ話がつたはった。しかしその真相は長い間知られぬまゝであった。私どもは彼の死をふかく悼みながら、どうすることもできなかった。

こえて昭和三十三年八月号の「日本談義」誌上に、旧友丸山学が「蓮田善明の最期」の一文を発表してその真相を明らかにした。はたして彼の死は、いかにも志ある文学者にして、かつ日本の典型的武人の面目をもつ壮烈なものであった。丸山は当時連隊副官であって現在人吉市米屋町で瓦製造をしてゐる鳥越春樹からそのことを聞きだした。蓮田は鳥越の中隊長のもとで小隊長として熊本の母隊から出発した間柄であった。終戦の間際に迫撃砲中隊が編成され、彼はその中隊長となってゐる。彼が自決したのは終戦直後の八月十九日、ところはシンガポールの北二十哩ばかりのジョホルバルというところで、そこの連隊本部の前庭で白昼まことに堂々と死んでいったといふ。この彼の自決の日のことについては、丸山とは別に、昭和四十一年八月号の「日本談義」に当時連隊本部付にゐた後藤包が「故蓮田善明中隊長を偲ぶ」の一文を発表してゐるが、それによると八月二十日となってゐて、丸山の文章と一日のちがひが出てきてゐる。これは後藤の方が正しいのではないか、と思はれる。いづれにせよ蓮田の最期は以上の二文章によってほぼ明らかにされたといっていゝ。

昭和三十五年十月、蓮田の郷里熊本県植木町の田原坂公園に蓮田の文学碑が建った。「文芸文化」の清水文雄、栗山理一ら、それに熊本の丸山学らが発起したものであった。碑面には次の一首の和歌が刻られてゐる。

ふるさとの駅におり立ち眺めたるかの薄紅葉忘らへなくに

この和歌は蓮田が南の島にあってはるかに故郷を思ひ歌ったものであるといふ。再度の召集をうけた時、遺髪を東京の親友のもとにあづけ、黄菊一輪を図嚢にさして応召のため郷里に帰った時、そのふるさとの植木の駅に下り立って眺めたその時の思ひ出の歌である。私はこの碑の除幕式につらなって、すゝめらるゝまゝにこの歌を朗詠した。田原坂公園は明治十年西南役の激戦のあった古戦場である。そこに蓮田善明の歌碑が建ったのは国憂ふ思ひのふかかった彼だけにふさはしいものを感ずるのである。

蓮田善明の死因

小高根二郎

『日本談義』昭和四十一年八月号で、後藤包氏が「故蓮田善明中隊長を偲ぶ」という文章を発表しておられた。僕の今までの蓮田の死に関する知識は、蓮田の元上官であり連隊副官だった鳥越春樹氏からの書簡と、清水文雄氏を介して知った元連隊本部付伍長黒田稔氏からの教示と、前記鳥越氏や旧部下からの聞き書きである丸山学氏の「蓮田善明の最後」（『日本談義』昭和三十三年八月号）から得たものであった。その間の相互に矛盾するところを整理したものが、拙著『詩人、その生涯と運命——書簡と作品から見た伊東静雄』七四〇頁～七四六頁に伝えるところである。

ところで、連隊本部付軍曹であった後藤氏の今度の文章によって、私の知識と記述に欠けていた重大な部分が補われたことを感謝しなければならぬ。

「当日の蓮田中隊長の動静ははっきりしないが、午前十時頃連隊本部に来られ、連隊副官（鳥越氏）に挨拶されたことは確実であり、また正午頃から副官室で会食されたことも確実である　したがって、午前十時から正午頃までどこで何をしておられたかが疑問であるが、聞くところによると連隊長室で相当長時間に亘り連隊長を強く諫めておられたというので、これがその間の出来事ではなかろうかと推測される。その内容はわからないが、諫めに諫められ、これ以上諫めても駄目だと判断し、最後の道を選ばれたものと想像される。連隊副官との会食後は多分立関付近で連隊長を待ちうけておられたものと思われる。十三時三十分、連隊長が出て来られるや否や拳銃で射撃し、蓮田中隊長自身も自決されたものと思われる。」

筆者の後藤氏は当時連隊の功績係の書記をしておられ、氏と同じく現在熊本県庁に勤めておられる元連隊本部付曹長であった富田公春氏の積極的な協力をえて執筆した由であるので、この推測には相当の信をおいていいであろう。もしこの推測を正しいとするなら、終戦を転機に、「敗戦の責任を天皇に帰し、皇軍の前途を誹謗し、日本精神の壊滅」を下士官以上を集めて説いたという連隊長中条豊馬大佐が、蓮田の諫めを聞きいれたとすると、蓮田自身の死を思い止まらすことはできなかったとしても、少くとも中条大佐を死の道連れにすることはなかったと思われる。

清水文雄氏が蓮田の旧部下を訪ね廻って調査したところ、蓮田は自決の前日の八月十八日には身辺の整理をしていたそうであるから、彼自身の自決は覚悟の上と見なければなるまい。しかも、当日の服装は、完全軍装に略綬まで付けた礼装であった事実は、死装束であることを証明している。

三島由紀夫氏はかって蓮田の自決に関し「小生としては、さして

謎とは思へませぬ。それより、直結しなかったら、そのはうがふしきだと思ひます。」（昭和三四年八月七日付小高根宛はがき）と言ってこられたが、僕は思想は必ずしも行動とは直結しないのではないかと思う。なぜならば、生の汚辱を忍んで永らえることによって、後世に志を展く……道だってあるからである。しかるに蓮田が死によって志を展くにいたった、つまり、思想から行動に直結せざるを得なかったのは、思想の他に、蓮田自身に潜んでいた内在的な要因があったと見ねばなるまい。いわば、それが運命なのである。

僕は、内在的な要因の一つを、蓮田が青年時代から持っていた、小球体に寄せる異常なほどの嗜好と編執と見る。

蓮田がまだ広島文理大学生であった昭和九年二月二十五日の日記に、想い出として茶の実を詠じた次の句がある。

「　　想ひ出

○茶の実を　子供　汗して　拾って
○茶の実つやつや草の中、土の中
○拾っても拾っても草にある茶の実
○いちんち子供とひろって弁当袋は茶の実
○母ちゃんに使ひやうもなく茶の実のおみやげ　」

この想ひ出の句は、熊本の植木町なる敏子夫人へも手紙で書き送っている。その事実から想像すれば、休暇に帰郷した蓮田が、彼を待ちこがれていた長男晶一君を連れて遠足にいった時の想い出であると解されるが、数々ある想い出の素材の中から、特に茶の実を拾い上げて抒情しているところ、とりもなおさず蓮田自身の子供時代の想い出に連っているとも解し得よう。固い艶々とした殻にかこわれた茶の実。土の上といい、草の中といい、ふんだんに仕掛たられた天然の陰謀。無用の土産であるのに、弁当袋一杯に詰めさせて遠くまで運ばせる。自然の計略。それにまんまと引っ掛かる性向――小球体に寄せる特別の嗜好を、蓮田は持っていたといっていいであろう。

この茶の実の句は、春休暇を待ちかねた二月下旬の日記にしるされているが、いよいよ春休に帰郷して、敏子夫人、晶一君、それに肉親、親戚の者を加えて行ったピクニックの時にも、同じく小球体に寄せる異常な関心がしるされている。

「四月三日。

昨日、姉、トシコ、晶一、途中から喜一さんも、二塚山から弁天山に上る。久しぶりの快晴であった。

みづから動き出したやうに　ころがりはじめた　ぶしゆ柑の弧線
ころがり落ちだしたものの　ころがりゆく　木叢草叢
ま黄なるもの　すっと崖に吸はれて転落した　息をのむ　たゞ
いつしんに崖を転落してゆくもの　息をのむ」

こゝでは茶の実に代って仏手柑が現れる。真黄色の小球体。それは自らの意志からのように転がりだし、木群や草叢を抜けて、崖に吸引されるように転落していった。その行方、その見事な弧線を、息を呑んでじつ……と凝視めている蓮田の関心には、その実の喪失を惜む心ではなく、その実を失うことによって生ずる美しさへの陶酔が如実に感じられる。茶の実に対しては静態に対する関心であったに対し、この仏手柑では動態に対する関心であった点も注目される。

この小球体の動態への蓮田の心情が現れたのは、その日より一、二年前に書かれたと想定される、敏子夫人宛の書簡にも実は現れていた。

「何べん思い出しても、この間駅へかけつけてきたおまへと晶一の姿はかっきりと胸にある。その時の自分の混乱した心持も、実に近来にない感動だった。あの時、汽車の中で、チョコレートの箱にかきつけた歌をかいてみよう。どうしてもその時ばかりは三十

一文字などといって居れなかった。その感動が僕の胸に一歩々々と深くなるばかりでくるしい程だったそれを吐き出した言葉だ。

○来ぬ筈だったのに、時間近くに駈ってきた妻と子を暗い駅に、すかしみつゝ出る汽車
○乗り降りの人ごみの中で、母の背から、いつしんに、さよならと声あげてゐる子
○時間間際に子を負って妻がかけてきたのだ見送りの人に声も出ない
○柿を一つなげてやらうと思ふけれどかけつけたばかりの子は改札口で見送ってる」

これは秋休に帰省し、滞在二三日で別れなければならぬ切なさから、互いに「送るな」「送りません」と堅く約束されていたものであろう。ところが時間が迫ってくると、矢も楯もたまらなくなった敏子夫人は、晶一君を背にくゝりつけるといっさん走り、発車間際に植木駅に駈けつけたのだ。ポーツ！　という発車の汽笛。つい……見るとなく改札口に眼をやった蓮田は、そこに佇んで見送っている妻子を発見して吃驚したのだ。蒸気の歯噛み……。敏子夫人の背から小さな手を振って、「お父ちゃん！サヨナラ」と一心に叫んでいるらしい晶一君の口の動き。蓮田は、胸一杯になったものがムクムクと眼頭に溢れてきて、ついこぼれそうになったので、思わず風呂敷に包んでいた土産の柿の実を摑んでいた。晶一へ投げてやりたい。線路越し改札口へ投げてやりたい。そう…蓮田は惜別の激情にゆすぶられたのだ。

これも小球体の動態――投擲をさえ意図した発作的な彼の愛情を示している。

さらに蓮田は、小球体を奪い、奪っただけではこと足りず、それを搾り啜ることによって自己と一体化す、徹底した嗜好と執心を持っていた。その事実は昭和九年一月十四日の日記に現れている。

「斎藤（清衛）先生来広。大山（澄太）氏の宅を初めて訪ふ。先生、後藤（貞一）君、池田（勉）君と四人。酒と野菜と、海のもの山のもの、清閑にして而も珍佳味を一夜にして集めるの贅。かゝる歓談と饗宴は一生に一度なるべく、世界と歴史に又珍なるものなるべし。十一時五十分ので駅に送り、帰途、街のかざり橙を盗むこと十五六、今朝早速、橙湯をしてのむ。」

この事実は、さらに具体的に、手紙で敏子夫人にも書き送っている。

「先生を駅に三人で送って、歩いて帰ってきた、その帰途に正月のかざりの橙を三人で十六七も、家々の門から盗んで帰った。低いところは僕と池田君とで取れるが、高いところはだめになると、僕たちで手もとゞかぬところを後藤君が、悠々と左手でしめ縄を押へながらもぎとってくるのもゆかいだった、持ってかへったのは翌朝から橙湯をしてのんでゐる。橙をたべるとつんぼになるなんていってた池田夫妻が味をしって、人がくると、すぐそれにしてゐる、人前はレモンティーとなってゐるからますますをかしい。」

これは酔余によくやる学生の単なる悪戯とみすごすこともできよう。あと二日間の小正月で用済みとなり、どうせ捨てられる運命の橙を酔余に奪っても罪は軽い。しかし単なる悪戯でないところは、それを搾って橙湯にして飲んでいるところにある。池田氏はつんぼになるという迷信を持っていたが、蓮田はその迷信を捨てさせて、愛飲させるまで翻意させている。異常なほどの嗜好といわねばなるまい。

そういえば、柑橘類としては、前述したが、転がりゆく仏手柑の美に陶酔している句もあった。又、二月十七日の日記にも蜜柑の句が出ている。〈野菜屋の前に　美しく　盛られた　みかんの塔〉。〈一山十銭と立てゝある　つつましい　みかんの塔〉。よくよく蓮

田は柑橘類の小球体に目がなかったと見ねばなるまい。

以上が蓮田の青年時代に於ける小球体に寄せる異常なほどの嗜好・編執の例であるが、それが爾後の生活の、これという重要な折々に、あたかも発作のように現れるから不思議である。

昭和十四年、中支戦線で戦闘中に小休止の折、川の浅瀬に花のように散乱している小球体——小石に魅入られ、とっさにそれを摑むとポケットに入れるにいたるのである。

「川は清冽無比と言ひたい水で、浅い瀬を躍るやうに急ぎ足で流れて行く。水を見、水の流れるのを見るのは、われわれ兵隊にとっては、それを利用する以上に、たのしく嬉しいものになってゐるが私もその瞬間、貪るやうに水に見入ってゐた。すると、その浅い水底から私の網膜を眩はすやうに急に迫り上って来るものを感じた。それは水底に色とりどりの指程の小石が、水中の花のやうに散乱してゐるのであって、その天然のモザイクの、水を透して見る冴えた美しさ、正に清麗極りない造化の見事さ、ふと私はこちらから我とその水底のさざれ石に物言はうと屈んだ自分の突拍子もない行動におどろき、改めて再び小石の美しさに感動をくりかへした。

私はその僅か瞬時の深い感動から、直ぐ、烈しく山峡にこだまして鳴りつづけてゐる銃砲声に促されて起ち上って整列を命じたが、突嗟に私は水底から一握りの小石を摑みとり、ぬれたまゝポケットに蔵めてゐた。」（昭和十四年〝文芸文化〟八月号「小石」）

蓮田は水底の小石に発作的に物言おうとしたほど魅され、自分の生命のかけがえとしていゝほどの愛着で、これを抄ったのである。無用な茶の実をせっせと拾ったあの編執が姿を変えたのである。

このさざれ石という小球体に寄せる嗜好・編執は、昭和十七年の第二次応召に際しても現れる。彼は東京駅から乗車するに先立って、後にしてゆく妻子や「文芸文化」の同志栗山理一・清水文雄氏等と、共に二重橋に参りその際またまたさざれ石を拾うのである。

妻よ　この大前に敷かれたる
さざれ石のうるはしからずや
汝が手に一にぎり
拾ひて
われと汝と分たん
汝が手なるは稚子（わくご）らにも分てよ
さざれ石
あゝ　大前のさざれ石
圓（つぶ）らかに　静かに
ありがたきかな
わがいたゞきもちて
行く　三粒四粒

（昭和十八年〝文芸文化〟十二月号）

ここで蓮田は、さざれ石を、自らの手でなく、敏子夫人に拾わせてそれを譲りうけ、いまゝでの個人的な嗜好にワン・クッションをおいて、さらに思想の重みを加えたのだ。

一路故郷に向け西下する蓮田は、大阪駅頭に於て伊東静雄の出迎えをうける。こゝで蓮田は、かって植木駅で見送る晶一君に柿を投げ与えようとした発作的な惜別の激情を行為に移して、伊東の幻影に向けて青い蜜柑を二つながら擲っにいたるのである。

「大阪駅頭夜十時に近く、下り立つ我に伊東ぎみ迎へ寄り、君が新著『春のいそぎ』出来ぬとてたまひ、また秋のいろふけまされる黄菊一輪、白き紙につゝめるをそへてわたさる。われは出だすも恥しけれど、たまたま君が序文をこひ得たるのみほこりとせし一冊の此も今しがた京都駅にて書肆主の特に二部のみ急ぎ本造りせしとてあたらしきを渡されたるが一をさしいだし、語らふことも多くは暇さへなくて再び車に乗り立てば君は声高く、萬歳を二かへり唱へたまひ、我は君がたびし花うちふりつつ相別れぬ。汽車やがて駅をはなれて闇に出づるや不図思ひいでしは君にたてまつらむとてポケットに祕めありし、こは冬のさかりにはいまだ早き青き香柑（かぐのみ）の、せんすべも今はなければその二つの実をとりいでて深き夜の闇に投ぐ。きみゆかりあらばこのことのはに其をうけ玉へかし。」（昭和十九年〝文芸文化〟終刊号「おらびうた」）

前述したように柑橘類の好きな蓮田は、静岡駅でまで青い蜜柑を買ったのだ。その中の二つは伊東への土産としてポケットにしまっていたのである。ところが久しぶりの出会の応待の忙しさ……。伊東静雄日記によると、

「黄菊一枝と、本わたす。身体どうですといふと、神経痛があるのです、といふ。前に戦場の経験ある上に、学徒出陣で自分は前より一層軍隊生活に期待と楽しみがあるといふ。自分『この前の帰還からだいぶ活躍しましたね』。蓮田『大へんなことです。私はこのごろ断ってゐました。大へんなことでした』。『さうでしたらう。私もさうと思ってゐました。丁度いい時でしたね』。さっき京都駅で、臼井からうけ取ったといふ『神韻の文学』といふのに『門出に　海上日出　大海原　豊栄のぼる朝日影　天足らしたり　国足らしたり』とかいてくれる。自分も又詩集に『再びみ召に応じて征途に上らんとて先づ家郷に急ぐなるわが友蓮田善明ぎみを昭和十八年十月二十六日夜車窓に求めて呈す　伊東静雄』と書いて渡す。蒼い顔と例の微笑。萬歳を二唱し、深く敬礼して別れる。」

五分かそこらの停車時に、これだけの会話と仕事をしたのである。蓮田がポケットの蜜柑を手渡すのを忘れたのは当然でめろう。それ…と気付いて駅を離れた真っ暗闇に向って「きみゆかりあらばうけ玉へ」と、一つ…二つ…と伊東の幻影に投げた惜別の激情は、既述した小球体に寄せる蓮田の日頃の嗜好と編執とを考慮に入れなくては、まさに狂気の沙汰に近いであろう。

その日から二年になんなんとする昭和二十年八月十八日。神ながらの皇国の敗亡に撫然として、自決の覚悟をかためつつ身辺整理をしていた蓮田が、拳銃の弾倉から弾丸を一つ一つ取り出して磨いているうち、掌に覚知される小球体の、なめらかで、冷く、重い誘惑……。よし！職業軍人にして、もし反省の色が見えなかったら、「おのれ国賊！　ゆかりあればこれをうけよ」と、腐り果てた中条大佐の頭蓋に小球体をたゝきこみ、死の道連れにしようと決意をしたと推理したとしても、さして飛び離れた空想ではあるまい。

教育日本新聞

株式会社　学校教材開発研究所
教育日本新聞社
東京都文京区三軒町8　教育ビル
電話　九四三一—三四一一（代表）

父・蓮田善明

蓮田晶一

物心がついてから父と暮したのは、私が六才から小学校二年迄の三年間と、父が支那事変から帰還した後の、小学校五年から中学一年迄の三年間に過ぎない。

そんな訳で、父の思出も実の所定かでない。父が大学を出る迄、私は母と共に父方の祖父母の許に預けられ、甘やかされ、掛値なしに非常に我儘であった。

夏休みに帰省する父を、私は伯父の一人だと思いこんでいた。従って、父との普通の家庭生活に帰ってからの、父の思出の大部分は、私の躾に関する事で占められている。端的に言えば、厳しく叱られた思出でいっぱいである。苦い記憶は年月と共に消えるというが、私にとっては逆で、褒められた記憶は全くない。父の存命中、褒められるような事をした覚えも、残念ながら、ない。仮に父が褒めようと思う事があったとしても、息子に正面から、それを言う父ではなかった気がする。

小学校の一年頃迄は、よく叩かれた。

父は家では和服を着ていたが、正坐した膝の上に、腹這いに私を乗せ、右手で私の臀を叩いた。いつも、数多くは叩かなかったが、容赦ない叩き方だった。頭を叩く事はなかった。私も心の中で、自分が悪いと思いながらも、強情を張ってだまっていると、「どうしてわからんのか！」と歯ぎしりし、私を叩くのを止めて、遂には涙をぽとぽと落し出すことがあった。

何時も、真剣な叱り方だった。

私は叱られる種を毎日播いていた。時にはこんな事でも叱られた。父は私より早起きで、洗面所で顔を合せる事は殆どなかった。

或る朝、私が石鹸を泡立てて、顔を洗っていると、「男が顔を洗うのに石鹸は要らぬ！」と父が怒鳴った。その頃私の通っていた学校は、制服が背広という風で、私も恰好を気にやむ所があり、私の柔弱を誡めたのかもしれない。

どういう教育方針からなのか、夜の七時には私と弟達は寝床へ追いたてられた。私が中学生となってからも、九時には寝かされた。子供の健康を願っての上の方針だったのだろうが、また家が狭く、私達が父の仕事の邪魔になった為も、幾分かはあったろう。

世の常とは逆に、私達の住居は引越しの度に小さくなった。何れも借家でそう大差はなかったが、始めて父と暮した台湾の官舎の庭には、山鳩が栖んでいた。

最後の三年を過した東京の家は、六畳・八畳の二間と、玄関わきに僅かな畳敷のある狭い家だった。寝床を敷く迄は、父は八畳の方で仕事をし、私達が床に入ると、六畳の方で仕事をした。私と弟達がすぐに寝つく筈はなく寝床の中で騒いだと思うが、この点では、叱られた記憶が、不思議にもない。

父は一心不乱に読み続け、書き続けて、雑音を気にしなかったようだ。

広い家の斡旋の話があり、私は乗気だったが、生徒の父兄の持家ということで、父はあっさりはねつけたのを覚えている。

早寝の次に、喧しく言われたのは、本の事である。

漫画、少年倶楽部の類の雑誌、講談社版の少年読物等を極度に嫌って、買うのはもとより借りて読むのも禁じられていた。今になっては父の方針もわからぬではないが、当時は、私にとってこれが一番辛かった。

父は外出した際は、大きな風呂敷包みをかゝえて、帰ってくることが多かった。中身はいつも本だった。それも全部父の本だった。私に購ってくれた本は、私の誕生の際揃えてくれた世界童話全集二十巻余りの他は、小学二年の時坪田譲治の「善太と三平」、佐藤春夫編「日本名作選」、その他数冊に過ぎなかった。

最後の三年間には、教科書以外の本は一度も買って貰わなかった。その頃の、児童向けの出版物が気にくわなかったのか、それとも自分の仕事に忙しく、子供の本を選ぶ余裕がなかった為かもしれない。

仕方がないので父の書棚から勝手に本を引出して読んでいた。志賀直哉全集に手を出した時、「まだ早い、高等学校へ入ってから読め」と注意された。同じく小学校五年の頃、「万葉集を読んでみないか」と言われた。私が全く興味を示さなかったので、二度と言わなかった。

その他には、本を読めとか、勉強しろとか、言われた記憶は全然ない。私の成績が芳しくなかったのに、督励がましい事は、一言も言わなかった。

夕方など、薄暗い所で私が本を読んでいるのをみつけると、「目が悪くなる」と父は言ってすぐ中止させた。

「一時間読んだら、十分間は戸外の緑を見るように」と口癖のように父は言った。

父には坐骨神経痛と、肋膜炎の前歴があり、子供達の健康には神経質な程に、注意を払っていた。

私は小学校の頃、隔年に夏から秋へかけて、三月ぐらい微熱が続いていた。今から思えば何でもない生理的発熱だったが、父は小児結核と信じて、あちらこちらの病院に私を連れ歩いた。当時流行の太陽燈の照射、カルシウムやAO（アオ）の注射、ついには邸宅を構えて教祖然とした灸師のやっかいにもなった。子供の病気には狼狽するばかりの、平凡な父だった。

俗に「物貰い」という、眼瞼の毛嚢の炎症で、瞼が腫れると、臍に塩を塗ると癒ると信じて、真顔でその療法をしてくれた。

「味醂は子供の頭を悪くする」と言って、母が料理に使うのを禁じていた。アルコールの沸点の知識など、無かったようだ。

私と次弟は早生れであったが、体が小さいのを理由にして、父は、数えの八才から、小学校へ私達をやった。卒業年度による序列の厳しい社会に住んでいると、損をしたと思わぬでもない。しかし長い学生生活の間に、少くとも体力的には、無理を感ぜずに済んだ事は、私にとって幸いだった。

父の命日に供物などした事はないが、父の好物は何だったろうと、考える事がある。母に言わせると、父は酒に強かった事になっている。戦前はビールをちょくちょく飲んでいた。支那事変から帰ってからは、来客の場合を除いて、酒杯をあげている父を見た記憶は殆どない。たまに飲むと、すぐに上気嫌になり、新国劇調の声色で忠治の赤城山のくだりを演じたり、フォスターを二、三曲唱ったりした。

砂糖が配給になる前迄は、週に二度は、母に善哉を注文していた。

食物の嗜好を口にした事がない父だったが、羊羹は大好物だった。慰問袋のなかの虎屋の羊羹を、こればかりは部下にも分けずに、大切に食べたと話した事がある。

支那事変から帰還してから、父は茶の湯を習いだした。その頃ふだん着にしていた肩章を外した軍服で、野点の席に坐っている写真

がある。
洋菓子に比べて羊羹は甘味がしっとりして、お茶にいいといった意味の事を、私に呟いたのを思出す。父は、多分甘党だった。
食物の話と言えば、大東亜戦争が始まってからの、母の苦労は、ごたぶんに漏れず大変だったと思う。配給で足る筈がないのに、父は頑として、闇買いを許さなかった。その頃、未だ細々と営業を続けていた外食券食堂へ、私は我家の口減しの為に時々出かけた。そこは、先着何人か迄は外食券なしで食事をさせてくれた。丼飯に目ざし程度の定食だった。この食堂へは、父も出かけた事がある。父は空腹を口にした事はなかった。しかし、私はいつも腹を空かせていた。
菓子類はもとより、食料品は街から次々と消えていった。それなのに父の生徒の父兄が、大きな包みをかゝえて、我家を訪れる事があった。父が父兄からの附届を受取らぬのは、父兄間で定評があったらしい。
遠慮がちに玄関で何やらさし出す声が、次の間で耳を澄している私達子供に響いてくる。その声を押潰すように、断乎として突返す父の声は、私にはうらめしいくらいだった。またかと、私はいつも諦めていた。
なかには、遮二無二置去りにしていく客もあった。到来物は簞笥の上で一夜を過してから、早々に返送された。信州リンゴの一箱を、運送屋まで呼んで、送り返したことがある。
父が目をかけていた或る生徒の家から、鮮魚が一籠届いた時は、例外で平らげて終った。
そんな風で何かと厳しかった父の記憶も最後の応召の一年前頃から、段々と薄れてくる。
私が中学生になった故もあろう。しかし、それよりも、父は仕事に没頭するあまり、子供をかまう余裕がなかったのではなかろうか。
家での仕事ぶりに益々緊迫感が漂い、たまに電車に乗合わした時に見る父は、本から目を離さず、鉛筆で書き入れをしていた。
白髪が増え、中折れの灰色のリボンが色褪せていた。
厳しい父も、時には私が照れる程、優しさを示す事もあった。
小学校を出た春休みに、私は旧師と、同級生達と一週間程スキーに信州へ出かけた。仲間に老人の両親を持つ独り息子がいた。彼の母はそれ迄遠足にも、修学旅行にもついてきていたが、今度ばかりは彼を独りで送り出してくれた。
それで、一週間ぶりの帰京の車中では、彼の母がどんな顔で駅に迎えにきているかゞひとしきり話題になった。私達は親からの独立を、そろそろ誇り合う年頃だった。
夕方上野駅へ着くと信越線から省線への乗換え口に、彼の母と並んで、私の父が待っていた。父親が迎えに来た仲間は、他にいなかった。
そう言えば、それ以前の小旅行の時も、その後夏休みに熊本へ帰郷していた時も、迎えにきてくれるのは、いつも父だった　そして駅から家迄の途中で、ふだんより饒舌に何かと私に話しかけてくれた。
私は父の勤める学校に通っていたが、父の授業を受けた事はない。学校では父に顔を合さぬようにしていた。
学校での父を覚えている事件が、一つある。それは連合艦隊司令長官山本五十六元帥の戦死が発表された朝だった。
登校すると、私のいる尋常科（中学部）も、高等科（旧制）も、全生徒が校門横の広場へ集められた。教師達も集まり、生徒は学年別に整列し、ざわめきながら山本帥追悼の儀式が始まるのを待っていた。厳粛な、沈痛な空気がその場を支配していた。なかには、ふだんと変らぬ平気な顔の生徒も、教師もいた。しかし式はなかなか始まらなかった。
高等科生徒が揃わず、遅刻した彼等が校門からぽつりぽつりと入ってくるからであった。校門の前は、見通しのいい道路が五十米程

真直に伸び、それから駅通りへ左に折れていた。その曲り角から、次々と高等科生徒が現われ、広場で参集している私達が見守る中を、暢気に歩いてくるのだった。
私達はぶつぶつ言いながらも、教師達も含めて、皆大人しく、彼等を待っていた。
突然、バチ、バチ。バチ、バチ。と小気味のいい音がして、振り向くと、父が伸び上るようにしながら、校門の前で遅れて来た背の高い高等科生徒の頬を張っていた。怯んで横に逃げかけた生徒も横面を張られた。
その場の空気は、粛然となり、気不味いものとなった。私の傍の高等科教師のなかには、白眼がちに父の逆上ぶりを見る人があった。私を息子と知らずに、父を非難する人があった。私の学校は、教師が生徒に手を振り上げる事の全くない、当時としては例外の学校であった。
その時、私は父と血の繋がりを、身体中に感じた。私も血が煮えたぎり、父と共にそこら中を殴り廻りたい気がした。
山本元帥を喪った遣場のない鬱奮と焦燥感、その事に平気居られる人種への違和感、そんな感情が錯綜して、父の手を走らせたのではなかろうか。
やがて、長い黙禱に続く式が始まった。
父の最後の応召が、秋だったのか、冬だったのか、どうしても思出せない。
でも、その事だけは今もはっきり憶えている。その頃、戦局が日増しに厳しくなっていくのは、子供心にも解っていた。テツツ島の玉砕、ガダルカナル島の激戦の報だけでなく、先に書いた外食券食堂の夕食にもありつけなくなっていた。
そんな或る日、召集令状の予告が熊本から我家へ届いた。
丁度、父は庭で草花の手入れをしていたが、手を洗って家へ入った。
近々、召集するかもしれぬから、居所を明らかにし、内々、準備をしておくように、という意味のものだと、聞かされた。
私は非常に不安になり、心配でならなかった。登校中も、帰宅してからも、父は行って終うのではないかという予感で、おどおどしながら私は過した。
それから、二週目の未明に、
「電報！」の声と共に玄関の硝子戸が叩かれた。私は瞬間、もう駄目だ、と観念し、とたんに涙が留め度もなく溢れ出た。しかし父に気附かれぬよう、背をむけてじっと臥っていた。母が起って電報を受取った。
父は低い平静な声で、明日発たねば間に合わぬ事、その為には今からすぐ準備にかゝらねばならぬ事などを、母に話し、身仕舞をした。明るくなってから、私は何気ない顔で起き、冷たい水で目を冷した。
最後の一日は、全くあわただしく済んだ。出立の朝、着古した軍服に正装した父に従って、母が末弟を抱き、私は小学一年の次弟の手をひいて宮城に詣でた。
それから、何年ぶりかで親子五人が揃って、東京駅迄の短い道を歩いた。
プラットホームでの見送りは、戦時規制の為に、家族として私一人しか許されなかった。汽車の窓越しに見る父は、それ迄の厳しさが全身からすっかり消えて、静かに私に微笑んでいた。
私は、そんな父を始めて見た。
汽車は間もなく動き出し、父は席から立ち上るでもなく、手を振るでもなく、眸に微笑を湛えて私を見詰めたまゝ行って終った。
私は信じている。父は、文の道での、やむにやまれぬ大和魂といったものに駆られて生きていったと——。

蓮田善明『鴨長明』頌

塚本康彦

戦後中世国文学研究の主流は、論に限って見るならば、西尾実・永積安明の両人の領するところであつた、と考えていいだろう。尤も両者の所論は同一ではない、即ち前者が、古典を無欠な完結体として全く肯定的な態度で受容する、といえば聞えはいいけれど、実は兼好であれ世阿弥であれ道元であれ個々の対象の微妙峻険な独自性の検討を一切怠り、その何れにも妥当する結構円満な形容語の反復に終始しているのに対し、後者によれば、本来古典を活きいきと成立させた筈の歴史条件には、それらは作者の認識や作品の展開を挫折せしめ限界づけたという風に、常に負価しか与えられず、従っていかなる大才傑作も不完未熟なものとして過去から現前せざるを得ない――こういった見解差が認められるのである。

長明・『方丈記』に関しても又然り、であって、両人とも当問題を一再ならず論じており何を引いてもいいのだが、例えば日本古典文学大系『方丈記・徒然草』解説（西尾）、岩波講座日本文学史第四巻所収「方丈記と徒然草」（永積）を参看してもらえば、私の右の指摘が的外れでないこと直ちに納得されよう。ダメを押すかたちでごく一部引用するなら、次のような調子である。

「……六十歳に至るまでの生活を、人間いかに生きるべきか」の問題として生活し、最後にそういう生活の焦点にある自己の心に凝視の眼を向け、批判の及ぶかぎりを尽くして、自己の人間としての真実に踏みとどまっている。その内へ内へと突き進む全力的な集中とともに、あくまで自己の真実にとどまった踏みとまりぶりの確かさは、実にみごとである。」

「その構想をはじめとして、その措辞にいたるまで、一方では、きわめて論理的な形式を駆使することのできた『方丈記』が、その序章と結末とに象徴されるように、それらの論理的契機のすべてを、かの歴史的意識を欠いた無常観の詠嘆のささえに、逆転させてしまったことは、ついにおおうべくもない。」

見らるるとおり、西尾の論は、苟しくもまともな文学なら大前提最低線として備える、つまりこの場合殊更云為されずともよい、言い換えれば長明・『方丈記』のそれ故に他の作家作品とは断乎異なる何かを明かすにはまるきり不必要な、事柄ばかりを述べたに過ぎない。そして永積のそれにおいては、最高至上なのは現代の自己が信ずる思想（むしろイデオロギー）、これに合う合わないか、近いか遠いかが古典評価の唯一の尺度、要するに古典は現在の我々に働きかけるものではなく支配されるもの、といった工合に考えられているさまが看取できるであろう。西尾説は常識的で底が浅く、永積説は偏狭傲岸なのだ。

かような相違を呈しつつも、しかし両説は古典と真に出会っていないという点では実に等しい。

戦後、実証的研究はまさに日進月歩、一寸専門領域を別にしたらもう蹤ききれぬ状況であるが、論の方は代表的な論客にしてからが今見たようなていたらくで、立ち遅れは甚だしいと言わずばなるまい。着実且つ敏速に流れる文献学的書誌学的な作業に舌を巻きながら、研究がこれだけであってはならない、古典の中に重く沈んだ思想、芳しく匂う感性、十分な熱と幅をもって展げられる行動などを魅力的に説き明かす論が次々に出現せねばならぬ、と切に感じるのは私一人であろうか。

周知の唐木順三著『中世の文学』は私達のこの種の渇を癒す果実の一つ、と言うべきである。有体に言って、国文学研究における実証と論との跛行性に愛想をつかし、転身を考えぬでもなかった私自身、唐木の当著作によって劇しく奮起せしめられたのだった。私の興奮には、そう、いわば素人の闖入者に、在来の玄人の及びもつかぬ収穫を挙げられた口惜しさが絡まっている。中世という時代が格別地味豊かと思われていただけに余計に。（文章ひとつが違う。何故国文学者にはこういう仕事が出来ないのだろう。）と強く嘆かれたのであった。

『中世の文学』のお蔭で、長明は『方丈記』はぐっと我身に親しい人間・作品となったわけだが、それから暫く経ち、当時は神田一番の古書肆でさえ「値段ついていませんか。百円でいいですよ。」とひどい扱い方だった（今はとてもこうはいかない！）保田與重郎の著述を蒐めていた私は、ゆくりなくとも購った故蓮田善明の『鴨長明』から、又新しい衝撃を蒙らねばならなかった。それを説明するには、左のような手立を採るに如くはないであろう。

まず『鴨長明集』所収の《うきながらすぎ野のきじの声たててさをどるばかり物をこそ思へ》や《世は捨てつ身はなきものになしはてつ何をうらむる誰が歎きぞも》などの青春和歌について、一書は「ここにはなにか狂的な鬱情がある。さまざまな約束を超えてほとばしる激しい何かがある。規矩準縄なにものぞといふ頑童の感情である。」或いは「かういふ歌をみてゐると、感情の大きく揺れる姿、コンスタントなものを欠いて、あへいでゐる姿を感じる。」と注している。別書は注する、「……もっと、自分でもはっきり説明のつかぬ混沌とした憂ひや歎きにひとり躍起になってゐるのであるらしい。」或いはこうも。「要するにこの時代の彼は、自分の姿も世間の姿も分らない、何か自分と世間との間に隙があり、符合してゐないことに気づき……」

次に『文机談』の伝える、長明が先例に反し広座で祕曲啄木を披露してしまった事件について、一書は「この事件でも見られるのは、長明がその場の空気に溺れてしまふことである。或ひは空気をみづからつくり上げながら、それの犠牲に自らを供へてしまふことである。やんやと喝采されれば、いよいよ調子を出し、羽目を外してしまふのである。」と述べている。別書は述べる、「それ故見事に為しとげてゐるとは言へ、それはまるでその時夢中にやってゐることで、後には何も残るべきものでもなく、到底軽率の誇りを否み得ないのである。実に浅薄空白なのである。彼が、いつも何かを狂熱して行った後に残る薄っぺらさがここにもある。」

又長明が宿願の鴨河合社の禰宜になりそこね、大原への逼塞に関しては、一書は「源家長といふような忍耐強い宮廷人からみれば、「あまりけちゐんなる心哉」といはざるをえない。……太宰流にいへば、祢宜を願ひ、そのために涙まで流したことが、「恥かしくて死にさうだ」といふ心理が長明にある。意識した演戯ではない。それが必要な業であればあるほど、深いところでの演戯性に気づいて来て、面をあげえないといふ次第であらう」と説いている。別書は説く、「家長が長明の辛抱気のなさを非難してゐるのも尤もであ

る。然し長明自身にとってみれば、自信などないくせに有頂点になってみてゐたりしたことがはっきり自分で分り、自分の身上も覚られれば、にがい自嘲よりほか何があらう。院の重ねての懇ろな御志などを承れば尚更面を上げ得ぬ恥しさを覚えたであらう。」

両書は発想・文体共に驚くべき酷似を示しており、もし私が一書、別書、と記し分けずに各々を結合癒着せしめて提供したとしても、毫も不自然には映るまいと思う。既に察せられたごとく、一書は唐木の『中世の文学』中「鴨長明」、別書の方は、雑誌『文芸文化』に十六年四月から七月を除き末年迄連載され、十八年秋八雲書林より上梓された、蓮田の『鴨長明』である。（なお雑誌と一本とでは、多少の異同が見られる。）悪趣味、と云われるだろうか。さりながら、唐木の著書のみ赫奕たる栄光に包まれ、蓮田のは忘却の淵に投げ込まれたままなのはどうにも合点がいかない、義憤を覚える。確かに唐木は「長明」の章の付記で、簗瀬一雄や冨倉徳次郎の業績と一緒に「蓮田善明著『鴨長明』に負ふところが多い。」と挨拶し、本文中でも一度はその援用を断わっているけれど、それでは足りぬであろう。

勿論「長明」は書中量的にも何分の一かであって、有名な図式、すき・すさび・さびの、すき、だけに当たる。（因みに、『大言海』などの辞書類を照合しての≪すく≫の丹念な語義調べ、そこから論を発展させてゆく方法も蓮田が先に行なっている。唐木の著で初めて接して随分新鮮に見えたそれは。）私がこう指摘したからといって、『中世の文学』の全価値は些かも下降するものではない。唐木は通念のように、余人は知らぬ自己にとってのみ深く深く潜航するたちの思想家に非ず、むしろ世間的に問題化しやすい題目を嗅覚鋭くキャッチし、諸種の先行文献を広く漁っては巧みに取捨活用し、硬軟適当の行文で纏めあげる、いわばジャーナリスティックな才能の持主、と今では考えられるが、しかしそのことも『中世の文学』や『無常』の否定に通じはしないのである。ただ私は、釣合からしても、蓮田の『鴨長明』はもっと顧みられて然るべき旨を繰り返したいのだ。

紙幅が余っているままに付言すれば、蓮田はこの他幾多の古典のいわゆるいのちを言い中てた。彼が生前太宰を酷愛した由は、雑誌の盟約固き同人だった池田勉から直かに聴いたところであるが、彼蓮田は永井荷風にも並々ならぬ理解・共感を持っていた。「神韻の文学」所載「永井荷風」は、鷗外の「主義」と荷風の「趣味」とを対比的に鮮やかに論じた作である。「鷗外の衛生学的な啓蒙は荷風に於ては初めから身について、寧ろそこから出て、ほしいまゝなる成熟者の「趣味」となり享楽として初まってゐた。」など、保田の影響歴然たるものながら、なかなかに味わうべき一文ではないだろうか。そうして蓮田は荷風や太宰に存分にいかれる資質に恵まれていたればこそ、長明をあのように論じきれたのだ、と私は思うのである。

和光産業株式会社
取締役社長 佃 治二
広島市宇品町木場1333
TEL ⑤1 4 1 5

女性コーナー
とらや洋品店
本通9丁目
TEL ㉑7714

蓮田善明『予言と回想』私感

神谷忠孝

はじめにひとつの疑問を提出してみたい。文芸文化叢書の一冊に風巻景次郎氏の「文学の発生」がある。この書は戦後新潮社から再版されており、国文学に取り組もうとする学生の愛読書のひとつであり、おそらく文芸文化叢書の中でもっとも読まれている書といっても過言ではあるまい。風巻氏はまた「文芸文化」の昭和十六年二月号に「国文学の再建」という論文を載せており、寄稿者の一人であったわけである。その風巻氏が、「日本文学史を研究する主体の追跡」（「日本文学史の周辺」所収）の中で「文芸文化」のことに若干ふれている。まず日本浪曼派を説明して、「当時の文壇的浪漫主義が明治大正時代の国文学と違った点は、その主体的意欲が国家の指導勢力と歩を合せ、その主張の中に身を没した点にあった」とし、つづいて「それは文壇内にあっては自由主義的立場と対立しながら広範な読者圏の共鳴を得て、逆に国文学界に影響を及ぼし、一見してその亜流である事が明な『文芸文化』の集団を派生せしめた程であった」と書いているのである。つまり、日本浪曼派の文学運動を「広範な読者圏を得」たことにおいて認めながらも、「その主体的意欲が国家の指導勢力と歩を合せ、その主張の中に身を没した点」で批判し、「文芸文化」を日本浪曼派の亜流と規定しているのである。「亜流」といういい方で「文芸文化」をそれとなく批判しているわけである。疑問というのは、「文芸文化」と「文芸文化叢書」とはどのような関係にあったかということである。つまり、風巻氏の文章（昭和二十一年十二月に書かれ、昭和二十二年十月の「季刊国文学」第一号に「文学史の問題」と題して載った）は、自己批判として書かれているのか、それとも「文芸文化」と「文芸文化叢書」とは完全に密接したものではないのかということである。その問題はともかくとして、ここでいう、「文芸文化」が日本浪曼派の亜流であるという規定は、戦後における「文芸文化」の昭和文学史における位置づけの嚆矢となっていることに注目したい。自らも寄稿者の一人であり、文芸文化叢書の一冊を受けもった風巻氏からなされたこの規定は、今後「文芸文化」の意味を考える上で考慮してゆかなければならぬ点ということになろう。

蓮田善明氏の「預言と回想」を最近読む機会があって、その中の「小説の所在」という文章に感銘を受けたので、そのことについて触れてみたい。この本が当時も評判であったらしいことは、たとえば平野謙氏の「二人のすがた」（文芸、昭和十八年六月）にもあらわれている。平野氏はそこで次のように述べている。

「蓮田善明といふ新らしい（新らしいといふやうな言葉で呼んでいいかどうかも実は不案内なのだが）国文学者の仕事を、かねがね私は私なりの素人考へでひそかに愛読して来た。氏の『鷗外の方法』『預言と回想』の二著は在来の国文学者らしからぬ清新な翫賞と気鋭の解析にみちた好著だった。前者の『青年』論、後者の私小説論はひとつながりのものとして、石川淳の独得な「森鷗

外」などに続いてその存在を主張するに足る論策である。今日、近代日本文学史の総括的な再検討は私どもに与へられた焦眉の課題だが、日本文学伝統の基盤を踏まへて、西欧文化の複雑な影響を腑分けする困難な作業によく耐へ得る人は実に意外なほど乏しい。おそらく蓮田氏などその少数の適格者のひとりぢゃないか、と思ってゐたくらゐだ。しかし、その後氏の関心は文学全体に立ち向ったやうである。」

ここで平野氏が指摘している「日本文学伝統の基盤を踏まへて西欧文化の複雑な影響を腑分けする困難な作業」といういい方は、「小説の所在」を読めば誇張でないことがわかる。「小説の所在」は序とあとがきのほかに二十節からなる長編評論であるが、著者はそこで、日本に本格小説が生れない理由をあらゆる角度から検討しようとしている。たとえば、日本人が小説を書こうとして困る理由を

「西欧風の小説のやうに、あれやこれやを積み上げ、寄せ合せないうちに、素材に対して余りに早く文学を感じてしまふことである。どうしたら文学になるかといふことの前に、そんな技術や構想より前に、もう目についたものに文学を感じてしまふのである」として日本人の性格を説明するところには説得力がある。そして「物につけ事につけ文学を感じることが早い」日本人の俳諧的な傾向を指摘して私小説については、

「所謂『私小説』なども私生活的に文学を感じる感度の早さに災ひされた（？）畸型的『小説』と言ふことができる。私的生活とか心境小説とかを書いて文学を感じてゐるが、実は外形は生活や心境の淡々たる記述で終ってゐる。あれは西欧人ならば『日記』とする所である。」

といふやうに、一般の私小説論と大差ない見解を示しているのだが、その背景に日本の伝統と正確な西欧文学理解があるので、説得力をもっている。更に西欧における神の意味を、

「西欧に於ては、神は、（彼等の神は）神に救はれる所に神があるのでなく、神の此の世への支配といふことに神があるのでなく、さうした神を現実から一応否定し、現実地上に即いて現実の秩序を探究するところに神を探り当てる」と述べ、「カラマゾフの兄弟」の最後のアリョーシャの祈りが日本人に理解できないところを、「祈ってゐるだけであり、祈ることによって神を見たかの如く仮想してゐるのである」と説明するところなどは、著者の宗教に対する深い認識を示しているといえよう。そして西欧に於いて本格小説、すなわち虚構が旺盛である理由を、

「追究しやまぬ『己』としての『己』を、そして同時に『祈り』の方へ、見ぬ神への思ひを繰りひろげる、その道筋が所謂『虚構』を旺盛ならしめるのである。彼らが実に見えざる神の王国を、見えざるが故に限り無く心こめて構想するのである」

とするところに、著者の西欧理解の深さを感じとることができる。そこまで説き及んで著者は悲観的に

「はっきり言へば、日本人といふ人間は『小説』を書かねばならない人間ではない。『小説』を書けないといってもいい。『小説』は西欧の『小説』を読んでゐればいいといふことになる。」

と書いているところなどは、共感をおぼえさせるところである。しかしそこで著者は日本のすぐれた古典の物語に目を向け、「名こそ『小説』と言はないまでも、それは散文の構想する文学ではないか——。この事実は一見私の断定の矛盾独断を証するやうである」としながち、光源氏の超人的性格を指摘するところや、「大鏡」の作者に思いを馳せて「モンテ・クリスト伯」を連想するところなど、実に楽しく読ませてくれる。

著者の結論はどこにあるかといふと、小高根二郎氏が「蓮田善明とその死」（果樹園115号）で、「国粋主義の蓮田にしてはまことに異色の説」と指摘しているように、

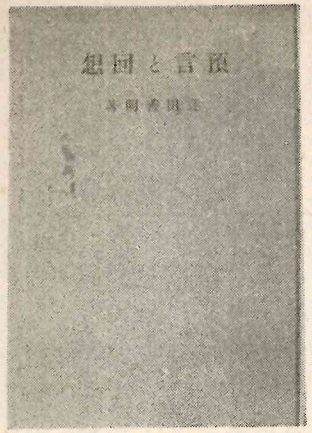
「『小説』をも一度『小説』といふ西欧の文学といふ初歩の観念から始めるのである」というところにあるのであって、単に古典を軸に現代文学を批難するというような皮相な意見でないところが、この「小説の所在」を今日でも充分読ませるに足る所以といえようか。ほかにも断片的にではあるが、島崎藤村を「正に日本に於ける最も忠実な『小説』志願者」、芥川龍之介を「彼は妙に『小説』の代りに『物語』を書かうとしてゐたやうに、今思ふ」とするところ、また有島武郎を「美を強ひて捨て〳〵しながら『自己』と『神』と『社会』との枠を作り、どこにも『自己』をも『神』をも『社会』をも見出せなかった」文学者、また「志賀直哉は、書いたあの完璧の文学よりも書かなかった文学が最も完璧だった人である」などとするところは、近代の文学作品に対する読みの深さを物語るものといえよう。ほかにも教えられるところ、鋭い指摘などたくさんあったが、とにかく国粋主義者（こういうレッテルを軽々しく複雑な内面をもつ個人に張りつけることに疑問はあるが）として知られている蓮田善明氏が、西欧文学、及び西欧人の思惟構造ということに関して、その辺にたくさんいる外国文学者と称する人たちなど足もとにも及ばないほど通暁していたということ、そしてそれ以上に日本の文学伝統という基盤をもって日本文学の将来を真剣に考へていたことを知ったのは収穫であった。

最後に一言しておきたいのは、戦後二十余年を経て今もなお文学における戦争責任を追求する仕事が行われ、一方それに対して片意地な再建運動も盛んであるが、そしてそれはそれで意味があるとしても、文学に関していえば、責任とか再建ということに気をとられて、よいものを見る眼までくもらされてはならないということである。われわれ戦争を知らない世代に課せられた使命がもしあるとすれば、戦時下といふ極限状況の中で書かれた文学関係の書物の中に、当事者とか影響を受けた所謂戦中派世代などには、ひょっとすると見えないかもしれない、変らざる真実なものを見出していくことだと思う。今度「小説の所在」を読んでつくづくそう思った。

執筆の場の異常さはそのまゝ著者の日本文学伝統に思ふ決意の正確さを表す。古今和歌集に「詩と批評」の正統を見、物語のうちに「小説の所在」を突きとめ、「日本知性の構想」に新日本の道を示標した本書は、無風帯に近い現下の国文学界を驚醒せしめる正に驚異の書であり、一等正統をゆく日本文学論でもある。敢へて貴下の浄机に一本を備へ給へと云爾。

（「文芸文化」昭和16年3月号表紙3）

（表紙）



「預言と回想」蓮田善明著　（叢書10）

■16／1／9刊・290頁・1円40銭

■目次　口絵写真（中宮寺観音・考へる人）序にかへて／詩と批評／小説の所在／日本知性の構想／預言と回想

■紹介の言葉

「鷗外の方法」以来大陸の征野から祖国に贈る著者の第二巨弾である。その或部分は冷雨しぶく堡塁の中で書かれ、或部分は燈火ゆらめく支那民家の中で物された。この

文芸文化と三島由紀夫氏

――清水文雄先生へ――

古田博保

清水先生、久しくご無沙汰いたしておりますが、その後お変わりありませんか。先生にお便りする機会はいくらもあるように見えながら、今まで、とりわけ私が光葉会へ出ずなってからずっとご無音にうち過ぎたことをお許し下さい。年ごとに会員も増加し、充実してゆく光葉会のことを、風の便りに聞くにつけ、次第に会から遠ざかってゆく自分を恥づかしく思います。「隠遁ともなづけたいような、そんな、ふしぎに老いづいた心」とでも申しましょうか。

三島由紀夫氏の「花ざかりの森」は、昭和十六年九月から十二月まで、四回にわたって先生らの雑誌「文芸文化」に発表されたものでした。「伝統をして自ら権威を以て語らしめ、我等はそれへの信頼を告白し、以て古典精神の指導に聴くべきである」と「文芸文化」創刊号には記されていますが、これが多感な文学青年の通俗的な創刊の辞でないことは、斎藤清衛先生の指導をえられた「子規に於ける和歌革新の第二段階」という卒業論文以来、和泉式部研究を中心にひとすじにみやびやかな文学研究にうちこんで来られた先生の足跡が実証しているように思います。

「文芸文化」は昭和十三年七月創刊ですが、創刊の年の八月、亀井勝一郎、保田與重郎氏らが中心となって出された「日本浪曼派」が終刊しています。三枝康高氏によれば、「日本浪曼派」の同人たちが明確なビジョンをつかむことが出来たのは昭和十年六月三日から十一日にかけて「報知新聞」に連載された「人民文庫・日本浪曼派討論会」以後です。その後十三年八月終刊まで、既成文壇では顧みられなかったわが国の古典や古美術への関心を深め「日本精神」の再吟味・復活の方向を示してゆくのですが、昭和十三年七月、こういった「日本精神」ないし「日本的なもの」の要求のムードのもり上っていた時に「文芸文化」が創刊されたことは、ある意味では歴史的必然性があったといえるようです。しかし、同人雑誌をやった人なら誰でも気づくことですが、非常に高い内容のままでの七十号の続刊はなみたいていのものではなかったでしょう。光葉会の「国語教育研究」第八号の「著書論文目録」によって知るのですが、「文芸文化」創刊号の「対詠精神」から終刊号の「衣通姫の流（一二）」まで、四十六篇の先生の論稿があります。これは全七十号という数字からして驚異的ですらあります。しかもそれらの内容は、みやびやかな王朝の文学の、私らの口では説明できない深淵なところの一筋の論文であり、真の古典精神を感じずにおれません。

先生と三島由紀夫氏との出会いは、年譜によれば、昭和十三年三月、前任校・成城高校を退かれ、学習院においでになった四月です。当時、折目正しい紅顔の美少年だった平岡公威君は、ずいぶん潑剌としておられたであろう国文学者としての先生のお話を、どんなおももちで聞いていたでしょうか。「花ざかりの森」が先生の推薦によって「文芸文化」に連載され始めるのは彼が中等科四年の昭和十六年九月ですが、それ以前、中等科二年の時、習作「酸模」が、中等科三年の時、「彩絵硝子」が「学習院輔仁会雑誌」に掲載されています。又この頃さかんに詩を作り、のち「十五歳詩集」が出たともいいます。平岡少年が「酸模」を書いた年、先生は「土佐日記序章」を、翌十四年、「王朝発想の地盤――曽禰好忠序論」「相聞」

「みやび（風流論討究第五稿）」「古今集の花の歌」「『かげろふの日記』について――作者堀辰雄氏へ」「更級日記（一）」「文芸的方法――『うひ山ぶみ』序論」「憧憬の姿勢――更級日記（二）」を書かれ、「彩絵硝子」が書かれた十五年、「二つの心――更級日記（三）」「作家の生成――更級日記（四）」「公任卿集覚書」と『文芸文化叢書』として出版された「女流日記」を書かれ、「花ざかりの森」が書かれた十六年、「能因法師伝（その一）」「（その二）」「保々君のこと」と『岩波文庫』として出た「和泉式部日記」を書いておられます。このように、文人として学者としての真摯なお姿が、平岡少年の目にどのように映じたかは、以後、「古今の季節」「みのもの月」「うたはあまねし」「寿」「世々に残さん」「柳桜雑見」「古座の玉石――伊東静雄覚書」と、次々と同誌に発表された作品の系列を見ても想像にあまりあります。

古典的なものへの憧憬の情は、文学に深入りすればするほど、私には理解できるように思います。そして、今、学生時代に聴いた先生のご講義を思い出します。「日本詩歌概説」は、今にして思えば、文芸文化によって培われた先生の豊富な学問の一端であったのですね。又、ゼミの形式で開かれていた「近代文学研究会」では、中村光夫氏の「風俗小説論」を教わりましたが、とりわけ日本の自然主義文学の欠陥についての認識が深まったように思います。それがやはり、古典をふまえた深淵な解釈と鑑賞の姿勢によってなされていったのだと、今にして思うのです。私は不幸にして近代から文学に入ろうとしました。それは、文筆生活へのかすかな憧憬があったからだと思うのです。卒論の批評として書かれた先生のご筆蹟は、まだなまなましく私の机上に残っていますが、その鋭いご指摘が、学問的な真摯な方法論と結びついていたのだとしみじみ思います。そして、学問的方法は、どのような文学をきわめるにも大切なことだと思いいたるのです。

三島由紀夫氏の文芸文化への最初の作品、これは三島氏の実質的な処女作と考えられるなら、「花ざかりの森」から、先生のご指導によってどうにか糸口をつかみえた「芥川竜之介」の、処女作ないしは初期作品と非常に近いかたちで共通点が発見できると思うのです。「花ざかりの森」に記された「老いづいた心」を、竜之介の初期短篇から求めることは容易です。大正三年五月「新思潮」に発表された処女作「老年」、九月同じく戯曲「青年と死」、四年五月「帝国文学」に発表された「ひょっとこ」、同じく十一月「羅生門」がそれです。「花ざかりの森」が文壇の注目を集めるに至らなかったと同じように、竜之介もなお文壇の注目を受けるにはいたっていません。神西清氏は、三島氏の「花ざかり森」の発刊にさいして、「王朝の文体を現代に生かしたもので……ぼくは舌をまいた。この早熟な少年のうちに、わが貴族文学の正統な伝承者を見る思ひがしたからである」とのべていますが、「羅生門」はやはり古典にその素材を求めたものでした。

出発にあたって「老いづいた心」にふれ、「古典的なもの」にかかわりがあったという意味で共通していた両氏の、文学者としての体質も又非常に似かよっていました。すらりとした、サラブレッドを思わせるような風貌は、しかし、作家的生命に密接につながります。石原慎太郎氏は、三島氏の作品のうち、「仮面の告白」の主人公の異常性愛、「青の時代」の主人公の己の抜群の能力に裏打ちされた存在感への偏執、「沈める滝」の石と鉄だけで出来上ったような恋愛に対して不可能なドンファンの主人公、そしの己の疎外を救うために「金閣寺」に放火する青年僧を指摘し、それらの青年が異形であることを述べ、三島氏は「青春」といっしょに寝たことはなかったとのべています。石原氏の使っている「青春」は肉体的青春ですから、作品と生活とが深い断層で遠ざかる反自然主義的な作家といわれる三島氏という一市民を、作品と同次元で考えるところに疑問が残りはしますが、三島氏自身がこのことに関連した言葉として、「われわれは文学的に料理された青春しか知らないし、自分の青春もその真似をして、のっけから料理してかかっているのである」と告白しておられるところをみますと、石原氏の見解はまんざらでもないと考えられます。とにかあれ、肉体的な青春不在について、あまり深く立ち入られることは、三島氏にとっては、文学者として

のみならず、通俗的な意味の一市民としても、あまりいい感じはなさらないと思うのです。しかし、私は、芥川を超える近代性を、三島氏の中に発見出来るという論証に入るために、このことについて述べざるをえません。

芥川の処女作が「老年」という「老いづいた」表題をかかげていることは注目にあたいします。その中でもとりわけ隠居房さんのポーズが心をとらえます。一中節の順講があった橋場の玉川軒という茶式料理屋が舞台ですが、同僚の小川の旦那と中洲の大将がそっと座を抜け、一杯ひっかけようと相談しながら一緒に小用を足して、廊下づたいに母屋の方へまわって来ると、どこかでひそひそ話が聞こえます。「何をすねてるんだってことよ。さう泣いてばかりゐちゃあ、仕様ねえわさ。なに、お前さんは紀の国屋の奴さんとわけがある　冗談云っちゃいけねえ。奴のやうなばゞあをどうするものかな。さましておいて、たんとおあがんなはいだと。さあさうきくから悪いわな。自体、お前と云ふものがあるのに、外へ女をこしらへてすむ訳のものぢゃあねえ。そも〳〵馴初めがさ。歌沢の浚ひで已が『わがもの』を語った。あの時お前が……」というていのものです。聞き耳を立てていた両人が「年をとったって、隅へはおけませんや」と言いながら及び腰にそっと覗きこんでみると部屋の中に女ひとり、なまめいた語を誰に云ふともなく繰り返してゐる」のです。この房さんのポーズは、芥川が、痩身な肉体の根底にたえず意識していた姿です。「人間的な、余りに人間的なものは、たいていはたしかに動物的である」と彼は告白していますが、石原氏のいう「青春」とは、この動物的エネルギーにほかならないと思うのです。

三島氏は「花ざかりの森」の中で、追憶が「老いづいた心」のあらわれである仮説をくつがえして、「けれどもしばらくたつうちに、わたしはそれとは別なかんがへのはうへ楽に移っていった。追憶は『現在』のもっとも清純な證なのだ。愛だとかそれから献身だとか、そんな現実におくためにはあまりに清純すぎるやうな感情は、追憶なしにそれを占ったり、それに正しい意味を索めたりすることはできはしないのだ。それは落葉をかきわけてさがした泉が、はじめて青空をうつすやうなものである。泉のうへにおちちばってゐたところで　落葉たちは決して空を映すことはできないのだから」と述べておられます。そして、その表題も「老年」とは対称的な「花ざかりの森」だったのです。

短篇作家と長篇作家の相違は、芥川と三島氏の相違だと思います、すくなくとも初期における小説作法が、いずれも、私小説的なものを廃し、虚構の上になりたっていながら、三島氏だけがあれだけの長篇を書きえ、これからも書いてゆかれるであろうことは、非常に単純な意味で、たくましいギリシャ彫刻に思いをいたし、ボディビルに励まれる三島氏の、芥川を超えた證しではないでしょうか。作品と生活とを分離する立場に立って、一作家の人生を、さらに高い位置から見て、一つの特異な人生と考えるなら、作家三島由紀夫氏は竜之介をはるかに超えた道を歩んでおられるといえないでしょうか。こういう単純な見方でボディビルを論ずることに、賢明な三島愛読者から批判をちょうだいするかも知れませんし、三島氏自身からもおしかりを受けるかも知れませんが、今の私には、この点を芸術的に意味を深く持たせる知恵がありません。

日本精神がよくあらわれた作品として、芥川の中に「神々の微笑」があります。日本神話にあらわれた、たとえば、「大きな桶を伏せた上に踊り狂っている堂々とした体格の女」や「根こぎにしたらしい榊の枝に玉だの鏡だのが下ったのを、悠然と抑し立てている逞しい男達」や「彼等のまわりに尾羽根や鶏冠をすり合わせながら、絶えず嬉しさに鳴いている数百の鶏」やらがたむろする神話の世界は、やはり、作家三島氏がにくからず思われる世界ではないかと思うのです。

文芸文化時代の平岡君が、先生の中に、和泉式部的な、という言葉が言いすぎなら、日本的な若々しい青春のエネルギーを感じたであろうことは、私が先生と直接に接した学生時代の四年間と、そして今日迄に感ずるものからの推測にすぎませんが、私は、大学四年の夏、先生と共に冠高原に野宿したことを思い出します。先生はず

いぶん山を愛されていました。その山での生活で、決定的に、先生の青年らしい、神秘的なたくましさを感じとったのです。当時「戦場にかける橋」という映画が上映されていた頃で、アレック・ギネスの映像と先生の風貌とが重なったりしたものでした。そして、その時先生はたしか知天命の年を五つも越えておられたと思います。金髪の美しい、英国紳士のようにすらりと、しかも強靱な、サラブレッドのような風貌と、そして、内に秘められた「みやび」は、非常なスタイリストである三島氏に通じているような気持がします。

芥川の晩年の作が、かなり露骨な形で、竜之介自身の露呈があるのに反し、三島氏にはそれがありません。それは外見を超えたスタイリストの風貌です。「彼は人生を見渡してもとくに欲しいものはなかった。が、この紫色の火花だけは、――凄まじい空中の火花だけは命と取り換えてもつかまえたかった」と告白する頃の竜之介の作品は、私小説的な迫力をもって胸にせまります。しかし、同時に、作品の上だけでなく、実生活上の芥川個人が肉体の敗北を見る時、無限の可能性は、かつての子規や啄木やらが、より長い文学形式にあこがれながら、短詩形に終ってしまったように、否定されてしまったのです。三島氏の近代性は、竜之介の敗北を超えたところにあります。ただ、非常な、もっと言えば、非情な、スタイリストとしてのポーズは、何か怜悧な、つめたいものを感じさせます。一般大衆の目には、それが、ある意味でいやらしく感ぜられたりします。しかし、その中に、竜之介が「地獄変」で描いた異常に芸術を愛する良秀のような、真の芸術家を感じます。いやむしろ、写生に徹しようとした良秀を超えた、異常な資質とたくましさを感じます。それはかつて、漱石がなしとげんとしてなしとげえなかった芸術家として新しい近代性だと思うのです。

三島氏は決して自己を表面に出されません。むしろ、一市民としての三島氏とは、うらはらな人間の登場が目をひきます。三島氏の作品は、三島氏を隠すことによって、真の三島氏の、内なるものを描いた、偉大な比喩だと思います。「花ざかりの森」においてすでにあらわれている。文章のはしばしにある独特の比喩もさることながら、三島氏が自身を直接出されないところに、巨視的にいって、比喩の文学を見てとります。

「文芸文化」から時が流れ、三島氏は「文芸文化」からずっと推移した境地で文学の「花ざかり」をめざしておられるかも知れません。その推移の幅がどのようなものか知る知恵を持ちあわせません。「花ざかりの森」を歩く時に覚える、朦朧とした陶酔感、それが何であるのかいまだにつかめないままなのです。三島由紀夫氏は、すでに、平岡公威君でないかも知れません。しかし、今でも、三島氏は変らず先生を慕っておられ、先生も、情的な意味で三島氏のことを思っておられるほほえましさを、何よりも、「文芸文化」が生み出した日本的な美しさだとも思います。

師走もおしせまり、研究に教育に、ますますご多忙の事と存じます。河畔を横目に見ながら通われる車内も、あわただしい空気をたたえはじめたこととお察しします。エネルギッシュな胎動の中に身を置けることは、人間としてこの上ないよろこびだと思います、先生のご推薦をえて、黒瀬から広島へ通勤した皆実高校時代、私の中で、エネルギッシュなものが胎動していたころでした。煙を吐いて行く汽車の中で、群衆に押されながら読書し、作品を書き、人をうらみ、あわただしい時代でした　とぎすまされた夜、作品を脱稿し、それはある懸賞小説への応募作品でしたが、しんしんと更ける夜、目をとじた頃のことが、不思議と先生にお便りしている今よみがえってきます。「追憶」は「老いづいた心」でなく、「現在のもっとも清純な證し」であるという三島氏のことばを思い出しながら、このお便りを書きました。国語教育者の集いである「光葉会」に出ずなった「老いづいた心」もまた、一つの推移であるのかも知れません。存外それは、個人的な「みやび」を追い求めるせいかも知れません。書簡では言いつくせない心を整理し、いつか、直接お会いしてお話しできることを切に念じています。

末筆ながら、先生と奥様のご健康をお祈りし、筆を置きます。

昭和四十一年十二月

清水文雄先生

文学は対話である

六百田幸夫

みたこともない「文芸文化」についてなにも云へるわけないから、なまじわかったやうなことかくかはりに、心に思ふことをはき出してみたい、ありていに云へばわけもわからずに「文芸文化」といふ雑誌をひかり輝くものに考へてゐる。十数年来さう感じてきたのはどうしたわけか。理屈をいへばいろいろあるがつまりは因縁であらうと思ふ。「文芸文化」が胚胎した事情と背景にすこしほど私らに同感できるふしがあるといふものゝ、その昂揚した心志の状態をわかると申しては不遜になる。同人雑誌といふ普通の観念は、文学青年の集まりであり、卑近にいへば文壇への登龍門を意味するのであるが、さうでない同人雑誌もある。その数尠ない同人雑誌のひとつが「文芸文化」でなかったかと思ふのだ。何故さう思ふかといふと、同人の顔ぶれによってだ。蓮田善明、清水文雄、池田勉、栗山理一の諸先生は、学統を等しくされる、当時少壮有為の国文学者だったときいてゐる。同人だった四氏のうち、ご縁あっておちかづきいただけたのは清水先生のみで、蓮田先生の「本居宣長」をよみ返し、〝果樹園〟で「有心」をよませてもらった程度のことで「文芸文化」は語れない、私にわかることは、ありきたりの同人雑誌ではなくて、純粋な志をもって出発した「文芸文化」であり、その終末も純粋な美しさのまゝだった、と感じられることだ。だから〝光り輝く〟と感じつゞけたのは、たしかに清水先生のイメージを通してである、といひうる。「文芸文化」いふ雑誌を清水先生の分身のやうに考へ、清水先生をみれば「文芸文化」がどんな雑誌だったかわかる気がする、と心の裡では思ってゐる。

因縁といへば、拙ないながら国や民族といふ立場で憂ふるすべをしり、己れに帰する嘆きに身をせめてゐたことによるだらう。いつ頃おめにかゝれたのか、もう忘れてしまった。温かくつゆけく良い気分だけがあり、先生の口吻を思ひ泛べるとしきりに心ふくらむ。さりとて日本文学への方法や述志の一端を思想のことばで教へられたためしはない。先生の生活態度とお書きになるものをみて、文学者の道とはきびしくさりげないものとうけとめてゐたのである。

清水先生が「和泉式部研究」に費やされた年輪は、すでに三十年を越える、三十余年といへば宣長翁が「古事記傳」を完成した永さである。一生涯かけてひとつ仕事に向ひ、現世的な名声のひとつも期待されない心構へのきびしさは余人に判断できない、歴史が事実によって成立するやうに、態度で示されるものがすべてゞある。

なんの影響かしらぬが、このごろの言論は〝差らひ〟をわすれた。免かれて恥多い言動と、ヒステリックなイズムが幅をきかせてゐるやうだ。ことばの美しさを知ってゐる者はことばを大事にする。言論の空しさを反省するものは己れに虔しむだらう。いまは社会のムードに反省のきっかけがなく、ことばの美といふものが別の機能論にすりかへられてゐる。さうした風潮をいつも心配され、大げさにいへば、身も世もあらぬ気のもみ方をされてゐたのが清水先生でなからうか。王朝時代の日本の言葉が一番美しいのだといふ、それも「みやこ」を中心とした物語に現はれる、あのけんらんたる文化の高さは比類ないものだといふ。それらの歌や物語が千年生きてきた

のはかくれもない事実である。千年といふ年月の永さは、一つの国語をつたへてきた民族の生成と、国柄の自然さからすれば、驚くにあたらぬ歴史である。伝へられた美しい言葉が、この国の人のくらしになにげなく生きてゐる事実は、指摘され、心こらしたときはじめて気づくやうなしまつだった。

清水先生が国や文化への愛情を語られるときは、きまって美しい王朝の言葉を用意されたやうに思ふ。無意識のまゝであって、熱っぽい思ひ溢れる調子だった。容正して教へ乞ふ、といった成行でなかったかはりに、先生の片言隻句がふいに生きてきて心に弾みもたらすといった、そんな経験をよくした。ことばにたいする潔癖と感受性のするどさに格別のものがあったのではないか。そして発想をだいじにされた。

文学は対話である、と思ひ始めた理由には、余儀ない私の運命といふことのほかに、影響といへば清水先生の教養や香気から触発されたものがあったにちがひない。王朝の女人と〝語らひ〟されてゐるやうな雰囲気の愉しさが〝古典と遊ぶ〟意味であらうと頷いた。私の場合は、対話であったと同時に鎮魂でもあったのである。〝対話できること〟の妖しい魅力に惹かれ、ゆくりなく踏みこんだ古典の世界は〝千古の密林〟だった気がする。踏みこんだがさいご、出口もわからず、入口さへ見失ふ、まして道らしい道があるわけでなく、かすかな光明をたよりに、よびかけ誘なふものゝこゑに惹かれ、わけもわからず歩いてゐる。私にわかることは、古典の世界が奥しれず深く、どこまでいっても出口がない、といふことだけである。この私は入口にちかくさまよってゐるに過ぎぬのに、もう引返す道がわからず、語りあふよろこびのために招かれつゞけてゆくことだらう。

人のこころの真実といふものは、ことばや文章にうつされもせず、ひしと耐へてゐる人のまなざしや息吹きのなかにひそむものであらう。美しい言葉を洗煉した王朝の女流歌人たちが、空恐ろしい世間の運命を如実に見なかったわけはない。うつし世と人心の関係は、千年前もいまも変りはせぬ、王朝の文学が私に語りかけるものは、上流貴族の耽溺趣味でなく、切ない祈願にあけくれる美的浄土への欣求にほかならない。この美的浄土とは、仏説、仏像に抽象される教養のことではなく、天地万物自然のいのちに托された人間のこころのことである。天地自然のほかに人が心休め、抱かれる場所があらうと思へない。

〝文学の効用〟といふちもないことを考えながら、文学は王朝文学のやうに人のこころ遊ばせ無限に楽しませてくれるものでなくてはならぬ、と思った。そしてなんの苦もなく、千年も前の人と語りあふことのできる自由の世界が、日本文学においてあったといふ事実を更めてかみしめてゐる。ことばではいひつくせない日本文化の伝統といふものを、とりだして示さうとするなら、平安朝の夥しい言葉の芸術こそ伝統といふにふさはしい。伝統を守れ、とか伝統をだいじにせよ、といった論を、観念的に、或ひは政治の立場でいふのはつまらぬことである。例へば、源氏物語を現代語訳でよまされたら、原文を読まうといふ努力をもはや放棄するだらう。現代語訳で源氏物語よむのは危険だといふことを教へてくれる文明思想が欲しい、そしてことばには「言霊」があって、生きてはたらくのだといふ信仰にも近づきたい。古典の現代語訳を人にすゝめず、日本の言葉の美しさを卑しめる文芸を汚すまい、私にできることはそれだけのことである。清水先生はなにも申されぬけれど、私に感得できる文学者のそれが志である。はしたない人を、同じはしたない言葉で軽蔑できぬ悲しさが、わが日常となった。美しいものを見、美しいことばしった者の負目かもしれぬ。

「大陸遠望」の周囲

美堂正義

田中克己氏の第一詩集「西康省」が刊行されたのは、昭和十三年十月一日で、第二詩集「大陸遠望」が刊行されたのは、昭和十五年九月十七日である。「西康省」がコギト発行であるのに、「大陸遠望」は文芸文化叢書として子文書房から発行された。その間約二ケ年の歳月のうちに、詩が四十六編書かれたこの時代は、氏の一番油の乗ってゐた時代ではあるまいか。また「大陸遠望」はこの詩集にその名の詩があり、その時代は日本が支那大陸に兵を送り、日本人がこの時代程支那大陸に渡り、その地の息吹きを知り、中国を身近かに知った時代はないのであらう。日本と中国との関係は大古から、徳川時代の末期迄は、扁舟に乗って中国に渡り、大陸の文化を持って海を渡ってやって来た。中国は日本にとっては常にあこがれの的であって、中国を通じて遠く「ペルシャ」を初めとして、印度等の文化に接することが出来た。そのことは日本の文化の上に大きな影を投げかけ、精神形成の上に欲くことの出来ないものがあった。そのことは日本の文化史を辿って見れば、指摘出来ることが余りに多い。その先進国であった支那大陸が、一度に日本人の身近になった時代、昔の日本人が遙かに遠望したそのあこがれの土地を踏んだ、そのこと程日本人にいろいろの意味をもって、日本人の心をゆさぶったものはないであらう。明治時代に支那と戦争して勝ったことは、明治の人間の浪漫を植ゑつけ、日露戦争によって白人に勝ち、アジアの民族の苦難からの解放、支配されてゐたものからの解放を、被征服の諸国民は日本に期待し、またそれを使命とする風潮も、また日本人の心に胎胚して来た。そのやうな心が生まれた時代に詩集は生まれ、私にはそれを伺ふことが出来て、その当時考へたことが、現代に於ても変ってゐない。それだけに現代の日本人の心と対比して、考へさせられることが多い。

大陸遠望

夕暮ごとに大海のほとりの丘に来て
西に向って顧望するのが慣はしとなった
いつも夕日の沈んだあとでは波が急に荒くなり
沢山の呟き声が聞え　その中には
いやなぶつ〳〵声がまじってゐた
そしてその一つがかう云った
「何のためにお前は何時もその方に向ふのだ
この海の彼方には鈍重な面貌をもち
五千年の譎詐と流血の歴史をもった
黄色い民が村落を作り都会を建設し
そこで日々争ひ喧噪し蠢めき奔ってゐるだけだ
その他に何があってお前は眺めてゐるのだ」
それに対し私は眉を揚げてかう答へた
「何ゆゑとか何のためとか問はないでくれよ
その問ひ方には賤しいものがまじってゐるからな
しかし強いてお前に答へてやらう
わが祖(おや)たちが意志し、慾望したことで

なほ果されぬ大きな希(ねが)ひごとがあって
それがおれの血を騒がせて止まないからだ」
かう云ったとき夕暮の蒼靄の中から
数多の塔(パゴダ)、あまたの拱橋(アーチ)、あまたの城楼などが
簇立し金色に輝くのが見えた。

この最後の簇立し金色に輝くのが見えたといふことは、支那大陸へのあこがれの言葉がこの詩句の中に充分に盛られてゐる。またこの子文書房の文芸文化叢書の発刊の言葉は、

ひさしく、日本文学の優しくして高貴な精神や崇い倫理を心になつかしんでゐると、いつしか、この愛情の底から、私達には、新らしい日本の宏遠な決意がよびさまされ、育まれてくるのを感ずる。すると、これまで単に遠い過去と考へられてゐたものが、この決意の燈の中で、生ける伝統となって燦然と輝き初めるのを観た。そこに私達は信頼すべき日本の血統を発見した。献身の場所を見出したのである。ここに身を置いて、私達は、はじめて世界への新しい繋がりと拡がりとを意識する。これは今日に於ける、日本の正しい体験ではないか。さう考へるならば、私達の生んだ此の思想と雖も、現下の日本に存在の理由を確に持ち得ないものではない、と信ずるが故に、敢へて私達は此の叢書の成立を企てた。日本を愛し、その芸文のこころをなつかしみ、うるはしい伝統を慕はれる方々の清鑒を希ってやまない。

昭和十四年十一月　　日本文学の会

この発刊の辞を読むと、当時の文化人の持ってゐる思想が表はれてゐる。日本の危機観のよってくる処が、また日本の過去から推察し、未来像を画いてみると、何を頼りに、また精神の拠り処は何か、その思想の混冥を開く鍵は、当時の日本人が種々考へてゐたが、それを解く手がかりはと求めたものは、日本伝統文化をうけつぎ、発展純化する以外にないとの、考へに及ぶことを至当でないと云ひ得るか。それ以外に何があらう。

「大陸遠望」の自序
捧ぐることば

これはわたしの第二詩集で「詩集西康省」につぐものである。わたしはこの拙きを中支なる蓮田善明氏にさゝげようと思ふ。それはかういふわけからである。蓮田氏はわたしが「西康省」を出したと恰も時を同じうして昭和十三年の十月に応召された。これにも何かの因縁があるやうに思ふ。応召後、しばらく氏は故郷の聯隊に居られた。大陸に出動の命を受けられたのが翌年の三月だったか。この時、氏はコギトの発行所に速達でわたしの詩集を求められた。わたしはこれを伝へ聞いたとき大変感激した。あの拙い詩集には先輩や知人のありがたい激励が多かったが、そのどれよりもまして、戦地に渡る前日のますらをがわたしの詩集のことを念頭にかけてゐられたといふこのことが嬉しかった。そのうへ七月にはわたしは戦地の同氏から便りをいただいた。それにはかういふ二編の詩が入ってゐた。

草　押　花　〉割　愛

蓮田氏はまた文芸文化誌上でも古今集などと共にわたしの拙い詩集が陣中の慰めとなってゐる由をいってをられた。蓮田氏の居られる戦前は全く膠着状態となってゐて敵味方が近距離で睨みあったまゝ対峙してゐる。絶えざる緊張が要求せられる箇所であ
る。岩山の横穴の入口に席を吊してその奥に交代で寝るだけで、夜昼を分たぬ見張りについてをられるとも聞いた。気まぐれやを

趣味の洋酒
居酒屋 どん底
呉本通4
TEL
㉑ 7147

どしに支那兵の撃つ弾丸が何時でも飛んで来ると聞いた。果して蓮田氏が手に戦傷を負って一時後送されたのはこの年の終りに近くであった。わたしはそれを聞いて身のひきしまる思ひがした。

心弱いわたしにはもちろん苦いことばよりも甘いことばの方がいゝ。しかしわたしにはまた同時にたとへ先輩知友のことばとてすなほに受取れぬひがみ心があり、また喜びを素直にあらはせぬ知羞の情がある。しかし日々を生死の境においてゐられる蓮田氏のことばだけはそのわたしにも素直に戴くことが出来た。従ってこれ以後わたしの作品は氏に向けて書きつゞけられた。それが氏の応召後一年有余でこんなに溜ってしまったのである。

この詩集もまた蓮田氏によって摘まれる大陸の美しい花々を挿むことが出来ればと切に思ふ。

昭和十五年六月下浣

田中克己

「大陸遠望」は蓮田善明氏に捧げられてゐる。そしてこの詩集の成立の解明にも鍵となるものを見出すことが出来るだらう。その当時の日本は、現代に於ては遠い日の想ひ出となって、息苦しいけれども、熱っぽい情熱を持ってゐた。もうそれは現代に於ては伺ひ知ることも出来なければ、理解することも出来ないやうな遠い日となってしまった。併しその古い、日本人全体が熱にうかされてゐたやうな、それでゐて日本人の使命感といふか、また日本だけではなく東洋人の、また広く西洋人をも含めて、全世界の秩序といふものを考へた。そのやうに理想に燃えてゐた時代でもあった。昭和維新といふ声も聞えた。いまとなっては無意味な努力であったかも知れない。小利口に立ち廻ったものだけが、敗戦と共に急旋廻して、自分達が先頭になって提灯持ちしてゐたことを知らぬ顔で、他の人が俺よりもといった自己弁護のもとに、攻撃して保全の道を求めた文化人といふ人間共がゐた。多くの日本人は、言葉を変へて云へば、その人達に踊らされてゐたことになるのだが如何でせうか。その時から今迄その姿勢をくずさなかった小数の人、また先棒を担つがなかったけれども、自分の信じる道を歩るいて弁明をしなかった、その小数の人々を私は知ってゐる。その一人に田中克己氏も居られるのではないか。

この詩集のなかに、「ツングース」「少年」「曠野」「詩人の生涯」「広東の塔」「孝感の戦」「大陸遠望」八編ある。この八編には東洋史学者の目とは別な目がある。異状なまでの情熱と親しみ、これはまた氏の宿命といふべき処から出発した、根強いものがある。この精神の在り方は不思議な程純粋だと感を深くする。

〝詩人は常住の上に坐す。故に預言す。預言は言文一致体を以て語られず、又恣戯的なる擬古体を以て語られず。言葉からも抽象された言葉で語られる。心からも抽象された心を以て想ひみられる。それは峻烈かぎりなき言葉なり。皮肉骨を剝却したる言葉なり。沈黙より出づる言葉なり。慎に高邁卓絶なる言葉なり。〟（蓮田善明、詩のための雑感）

を第十九頁に小さな活字で印刷されてゐるが、次の四十三頁にある

われらの詩論

愛し理解しようとつとめるすべての人に愛され理解されるもの
文語と国語とから選び出された最も美しい日本語で綴られたもの
視覚には美を与へ聴覚にはリズムを与へるもの
現実からのフイクションでありフイクションから現実を感じさせるもの
これらをこそ詩と呼ぶ

この二つの小さな詩論、これは田中氏の常に詩を書いてゐる心掛けで、あの激しい動乱の時代に、この美しい座右銘はまだ心情でもあるだらう。これで蓮田氏と田中氏との交情は、蓮田氏と伊東静雄とは違った面で、相知るといふ面があるだらう。伊東氏のあの激しく青白いまでに己をいためつける、萩原朔太郎と同じやうな世界、それでも少しは違ってゐるやうな、そんな思ひのする詩境、それとは違って平明と云ふ言葉がぴったりと当はまる詩、相反する詩境、コギトの同人でありながら両極端を示す二人に、蓮田氏がひかれてゐたことは、蓮田氏の精神の構造上に、面白い面を示してゐるものとして、興味のある問題を投げ掛けてゐる。

ともあれ、あの時代に「大陸遠望」が生まれた意義を考へてみると、ほんとうに貴重であったと思ふ。いろいろと云ひたいことは多さんあるが、「大陸遠望」に対しての一断面を書いてみただけで、「大陸遠望」に関することは、云ひつくされぬ私の青春の日の想ひ出でもある。多くの文を引用しまるで人の思想のやうな文になってしまった。汗顔の至りです。

41／12／4

回想

末田タカヱ

回想というものは、不要なものは忘れられてありますから、まことに、過去を要領よく描き出すものでありますが、私は、東京の世田谷区祖師谷町二丁目の斎藤清衛博士の家に棲んでいた頃の事を、もうあまり覚えておりません。

斎藤先生の家に棲んだということは、要するに、当時、（昭和十年でした。）田舎っぺの老けた女子学生であった私が、従姉の家に寄食していて、気兼ねしていましたので、先生の洋行の留守番を頼まれましたのを、家賃が要らないということの為に、喜んで引き受けただけであったということに、帰着するようであります。

それは、私が何ら斎藤先生の影響を受けることもなく、又勿論先生に薫陶されることもなく、従ってそれ以後、何の交通もないということでもって、私自身に証明出来ると思います。言う迄もなく、それは私の不徳不明のせいであると思っています。

それはとにかくとして、その頃の祖師谷の町は、見渡す限り青い芝生があって、そうして、豚の声が空に響き渡り、（養豚が盛んでした。）遠くを小田急が軽やかに走っていました。私は其処で、弟と一緒に一年ばかり暮しました。

清水文雄博士は、その頃、斎藤先生の家の隣に住んでおられました。成城学園（当時、高校まで）の教員をしておられまして、薄給でいらっしゃいましたから、金持の学生達が、先生に手下鞄を買って上げたり、お茶の御馳走をして上げたりしていました。奥さんが賢い方で、いろいろ家計を工夫してやっておられたと思います。

松尾聡氏、栗山理一氏、池田勉氏、それから時々保田與重郎氏がやって来られては、屢し学究の集いをしておられました。その方々のお顔を見たことはありませんでしたが、清高な気分が、私どもの方にまで流れて来るようでしたから、私どもは、「ああ、今晩も、竹林の四君子の交歓会だな。」と、言っておりました。竹林も、実際沢山ありました。

今私は、人間関係のむつかしい役所の勤めのただ中にありまして、あの竹林の賢人の集いのことを、仙人の境涯のことのように想い出します。

そうです。斎藤先生の影響というものが、私にも一つありました。

斎藤先生は、「今西行」と呼ばれた程、よく旅行をされた人ですが、何時も下駄ばきでした。その下駄を西欧にまで延ばされたわけですが、（下駄は、イギリスか何処かで割れて了って、靴に変ったそうですが。）そんな旅行の仕方を、私もまねしようと決心したことがあります。

私は大学を卒業する時、満洲国の国家試験を受けました。満洲国の教員になるためにです。（教員も官吏として扱われました。）けれども、口答試問の言葉が、チンプン、カンプン聞き取れませんでしたから、試験は不首尾だと観念しました。そこに、私の母校の女学校から、頼みもしないのに、教員に採用してあると通知が来まして、致し方なく帰省しましたところ、後から満洲国の採用通知の電報が到着しまして、随分口惜しい思いを致しました。

私は、新京に二年位、北京に二年位、泰に二年位と転勤して行って、東洋諸国を無銭旅行させて貰わうと計画したのでありました。

これは確かに、斎藤先生からヒントをいただいたものだと存じます。

扨、役所もそろそろ満期が近くなりましたので、勤務と、それから家事、育児の忙しさを返上いたしましたら、ゆっくりとインドネシヤの方に行ってみるということにしても、いいのではないかと考えています。

四一、一一、二四

恩賴記 ■ 清水文雄

ことし四月十六日に、飛弾高山で故垣内松三先生顕彰碑の除幕式があった。先生の御生地であるこの高山は、いつかこの足でゆっくり訪れたいと思ってゐた。十年余り前、先生が亡くなられて一、二年経った頃と記憶するが、高山線で岐阜から富山へ出たことがあった。汽車が高山線に着いたとき、「高山々々」と呼ばふ駅員の声をきいて、たいへん懐しく思ったことをおぼえてゐる。しかし親しくその地に下り立ったことは一度もなかった。

ところが、こんど顕彰碑の除幕式に参列するため、その高山へゆく機会が与へられたことは、私にとって二重の喜びであった。

碑は、市の東南部に当る城山公園の一角に建てられた。その位置から望まれる高山市街の中央部を宮川が北流し、はるか東北方には、残雪を頂く飛弾連峯が蒼穹を限ってゐた。碑石は小八賀川から運ばれてきたといふ烏帽子型の自然石で、正面に「石叫ばん」と刻まれてゐる。西尾実先生の染筆になるもので、雄渾な墨痕が巨石のはだに深く食ひ入り、豪宕清雅な風格をそなへてゐた。銘は、先生の随筆集『石叫ばん』から取られたものであるが、この小冊の中に、後年の先生の深遠な学問の原型がはっきりと見られるやうに思ふ。この最初の著作に、先生は生涯を通して殊の外の愛着を持ってゐられたやうに拝察する。その意味で、この語が碑銘として撰ばれたことは、意味深いものがあるといはねばならぬ。

除幕式は午後一時半から行はれたが、それには、東京にお住まひの奥さんの信世様と令嬢が出席された。奥さんは御老齢の上に脚を痛めてゐられる様子で、側から令嬢に助けられながら、足場のわるい石組みを伝って、碑前に玉串を献ぜられた。目に見えぬ心の糸に引き寄せられるやうに進まれるお姿を、美しいと思った。参列者は、西尾実・斎藤清衛・久松潜一の諸先生をはじめ、親しく先生の講筵に列した方々、そのほか直接間接に学恩を蒙った人々や、この事業に終始尽力して来られた地元の人たちを加へて、総数百名にも及んだらうか。『文芸文化』同人としては、私のほかに東京から栗山理一が駆けつけた。

翌十七日。朝九時から記念講演会が開かれた。前日午後先生の遺品・遺墨展が開かれたのは、先生の母校東小学校であったが、この日の会場は南小学校になってゐた。演題はつぎの通りである。

国語教育の夜明け　西尾　実

日本文学と土俗　斎藤清衛

文化学と文芸学　久松潜一

西尾・斎藤・久松三先生は、垣内先生の高弟である。そして私ども『文芸文化』同人にとっても、学恩忘じがたき方々である。垣内先生顕彰碑建立を記念する三先生の講演を、垣内先生の御郷里高山の地で、今のうつつに聴きえたことは、冥加につきると思はれる。

斎藤先生は、広島高師時代の同人四名の共通の恩師である。『国文学試論』、ついで『文芸文化』の刊行にあたっても、終始直接的な教導をいただいた方である。在学中に結ばれた師弟関係が、東京での私どもの仕事を通して、さらになほ今日まで、私ども一人々々のかけがへのない心の拠り所としてつづいてきてゐることは、口にするもおほけないことに思はれる。このえにしは、同時に一人々々の生きがひであったし、現に今もさうである。将来もまたさうであらう。

垣内松三先生顕彰碑
「石叫ばん」と
清水文雄教授

斎藤先生を介して、私ども四人は垣内先生に親しく接する機会が恵まれ、『文芸文化』創刊に際しては、誌名から内容まで、適切懇篤な示教を賜はった。特に創刊号にいただいた巻頭言は、「機」と題する短文であるが、先生の文学観の極致を示されたお言葉として、私どものその後の歩みに、渝らぬ光となってきた。それを左に掲げる。

古い画を見ると、力の張りきった一点を現はすのに、却って、柔かさと静かさでつつんだやうな手法を用ひてあるのはめづらしいことではない。今朝も、長い間、水から跳ね上った鯉を写した絵に見入って、力を加へない円味のある曲線に、緊まった力が集まってゐるやうに見えるのは、どういふわけかと思って見た。

山中鹿介と狼介の一騎打の勝負に、狼介が弓に矢をつがへて、鹿介をねらって居るのを見た秋上伊織介が「一騎打に飛道具とは卑怯千万」と手早く矢をつがへて、狼介が満月の如く引きしぼってゐる、弓のつるをふつりと射切るところが描かれてゐる。伊織介の矢——狼介の胸板へ飛ばないで、弓のつるを射切った——の画いた直線は何時までも人の心から消え去らないであらう。

文学の在り方もこれに似かよふものがある。研究と称し創作といっていかに精しく取扱はれても、指されるものにとりては例の一つに過ぎないであらうが、例として示されたものでも、その機の捉へやうでは、例にさへなりきれないものもあらう。

通巻第七十号をもって終刊号とすることになったときも、やはり巻頭に先生の一文を頂くことができた。「終りを知る」と題するものであるが、温いいたはりとはげましのお言葉として、後にふれる佐藤春夫先生の激励の詩とともに、終生の感銘となった。その末尾にはこのやうに述べられてゐる。

本誌の創刊に当りて一文を寄せた。それは「機」といふことで

花しづめ

山川京子

安芸のくに　はろかなれども
こころには　近く親しも
日の本の　げにやますらを
清水文雄大人　そこにいませば

このくにの　文芸文化
ひとすぢに　伝へましし
きびしかる　たたかひの日に
日の皇子を　守りたまひにし
いさをしは　世にかくれざれ

混迷と　汚辱の巷
いさぎよく　すてさりたまひ
言あげは　聞え来ざりき

日野山の　竹の柱に
茅の屋根　こほしかれども
うつつ世に　誰がすべけむ

それよりも　難く雄々しき
遁世を　君とげましき
学徒あまた　御手にひきつつ

詠じたまふは　経巻ならで
あやにかなしき　和泉式部のうた
遠つ世の　女のこころ
あらたしく　蘇らせて
飽くるなし　あはれひと代を

なかぞらを　なほながめつつ
螢の　たまあくがれて
掬みたまへ　閼伽水に替へ

花しづめ　花を浮かめし
神酒をこそ　日ごとおだひに
よもつきじ　神の醸む酒　よもつきざらむ

かへし

奥山の清水のごときふるくにのふみを流るる
こころ見ましき

あった。本誌の終刊に於て、懇に与へられるこの頁にも、同じ辞を書き送る。今の世に生きて、今の世に最も太切なことは何かと目を見はるものには何時でも機が目前に捉へられる。少しもあせることはない。一休みしてから、また働くことにしたらよからうと思ふ。

創刊号で私どもにお示し下さった「機」の深意が、ここに至って一層はっきり了得できたやうに思ふ。一号一号をあたたかく見守ってきて下さった先生が、ここで「一休みしてから、……」と励まして下さったのに、その御期待に副ひえてゐない自らを愧ぢるのみである。

『文芸文化』の創刊とともに、われわれは「日本文学の会」を結成したが、創刊号を出した昭和十三年七月の下旬には、同会が主催者となって、「日本文学講筵」なるものを紀州高野山で開催した。講師としては、垣内先生のほか、斎藤・久松両先生、それに美術史の源豊宗先生をお招きし、四先生御指導のもとに、志を同じくする人々の最初の出会ひが、空海開基のこの霊山において行はれたのは、意気深いことであったと思はれる。四先生のほか、平素から学恩を蒙ること深かった岡崎義恵先生にも講師をお願ひしてあったが、御健康の関係でお出でいただけなかったことは、かへすがへす残念であった。恩頼の感銘を綴るこの文章には、是非とも先生のお名前も記しとめておかねばならぬ。

去る九月二十八・二十九両日にわたり、千葉大学で国語教育の全国大会があった。二日目の日程が終ったあとで、東京雑司ケ谷墓地にある垣内先生の墓にお参りすることになった。同行の広島大学関係の教官のうち、野地潤家助教授は国語教育学専攻の精鋭としてあまねく知られるところであるが、永年にわたり垣内先生の学説の成立史についても精緻な研究をつづけてをり、その業績に対して、先年垣内松三賞が授けられた。そのゆかりもあって、一度墓参の案内

をしたいといひいひしてゐたが、今回辛うじてその機を捉へることができたのである。正確な記憶を蘇らせることもなく、およその見当で探し歩いたため、いつのまにか迷路に入った恰好となり、夏目漱石の墓の前に出たりしたが、そのうちに、あの広大な墓地のことで、いつか夕闇があたりに迫ってゐた。花屋も店を閉ぢ、尋ねるすべもないので、日出町二丁目の角のタバコ屋で電話を借りて、垣内先生のお宅に伺ひを立てることにした。奥さんは御不在であったが、令嬢の木藤夫人が、案内を知ってゐる秋本といふ花屋を教へて下さったので、そこできいてその所在をたしかめることができた。同行の一人が気を利かして近くの店で懐中電燈を求めてきた。その光を頼りにやっとの思ひで墓所を探り当てた。懐中電燈の光の輪の中に、正面の「垣内松三墓」（牧野英一氏書）の文字を捉へひとときは、ほっとした思ひであった。頭を起すと、東の方、木立の茂みの上に、茶色がかった満月が、ぽっかりと姿を現はしてゐた。思へば今宵は中秋の名月であった。奇しくもこの夜にこの地でめぐり会せたことも、後々まで忘れられぬ思ひ出となるであらう。

○

関口町の佐藤春夫先生のお宅へは、私の住んでゐた目白から近かったので、昭和十五、六年頃からと思ふが、たびたび伺った。同人の誰かと一緒のこともあったが、単独で出かけることもあった。しかし、われわれ輩が容易に近づけさうになかったこの大家の門を叩くことを、最初に言ひ出したのは蓮田善明であった。それまでに、『退屈読本』をはじめ、佐藤先生の本を手当り次第買ひ集めてゐた彼が、ある日目を輝やかして、訪問のことを切り出したことをおぼえてゐる。そのときは池田勉を加へて三人だったやうに記憶する。先生は快く迎へて下さり、例の吶々とした話しぶりであったが、かなりの時間お話を伺ったやうに思ふ。具体的な話題は思ひ出せないが、その日を境として、堰を切ったやうに、先生への景慕の情が加

はっていったことは事実である。

佐藤先生については思ひ出すことは多いが、ここでは三つだけ記しとめておくことにしたい。その三つとも、今は亡き盟友蓮田に関はるものである。

その一つは、『文芸文化』終刊号にお書きいただいた、「遭逢―スラバヤに於ける蓮田善明君」の末尾に記されてゐるやうに、同じく終刊号に載せた、蓮田の歌稿「おらびうた」が、佐藤先生によってスラバヤから持ち帰られたといふことである。スラバヤでの先生と蓮田との奇遇のいきさつは、右の一文に活写されてあるが、それは昭和十八年の暮のことで、蓮田が新しい任地スンバ島へ向ふ直前のことであつた。そのとき先生は、蓮田が夜光時計がなくて軍務にも困ってゐることに気付かれて、御自分の手首から外して蓮田にそれを贈られた。そのあとで、「おらびうた」を書き込んだ手帖の委託を先生が受けられるくだりは、つぎのやうに叙されてゐる。

蓮田氏は僕から受取った時計を手頸に巻き終るとやをら立って軍刀にそへて外して置いてあった図嚢に何やらさぐってゐたが、取出したのは黒いクロス表紙の懐中冊子であった。遠征の途すがらものした詠草であるといふが見ればところどころやや長い詞書のあるものもある。その冊子を僕に預けようと申出た蓮田氏が言ふには、ここではかうしてうき世を外ですが暮の二十八日といへば、家郷ではさぞてんてこまひでせう。今年も余日幾何もありませんからこの冊子も年とともに新らしいものに変へようと新らしいのを用意して来ました。それにつけてもこれが魚腹に葬られるのを惧れますから、御保存を願ひます。これをお持ち帰り願って同人の清水にでも見せて下さい、さうして蓮田は欣然勇躍して前線に赴いたとお伝へください。といひながら窓外にうつろふ日かげを見てゐたが時計の三時半になってゐるのを見てから、そろそろ帰って出発の用意でもしませうか、宿は市外の営舎に兵と一緒ですが、この地にもあと二時間ばかりとなりましたから、と挙手の礼をすると、壁にもたせかけた軍刀を腰間に下げて玄関口に出た。

さきに私は「奇遇」といったが、佐藤先生の南方派遣後間もなく応召した蓮田が、先生に会ふ機会を捉へようと、途々手をつくした末、離島への転出間際に辛うじて会見することができたといふのは、あれほど先生を敬慕してゐた蓮田の平素を知る私には、逢ふべくして逢ひえたとしか思へない。蓮田が戦地からよこした書信の中に、お互に離れてゐても、心は常に通ひ合ふ、それが文学の「真智」である、といふ意味の言葉があったことも、ここで思ひ合はされる。人間のほんとうの「出会ひ」とは、かういふ場合のことをいふのではなからうか。

あとの二つは、終戦後、先生の御一家がまだ長野県北佐久郡平根村に住んでをられた頃、東京郊外小金井に仮居してゐた私あてに頂いた二通の手紙のことである。私信をここに公表する非礼は十分承知してゐるが、それをあへてするのは、その内容からいって、あながち先生の御意志に背くものとも思はれない上に、二つとも、その中で蓮田の死を悼み、その遺族のことを心にかけてゐて下さるところから、かつて蓮田と交渉のあった方々、また死後その人と学問に関心を持たれる方々に、ここで披露することを、先生はきっとお恕し下さると思ったからである。

その一通は、昭和二十一年九月十九日に受取ったもので、転居後、前の住所にあてられてあったばかりでなく、進駐軍の検閲を経た形跡があるので、日付もなく、消印も判然としないが、少くとも十日以上の日数は経てゐると思はれる。

拝啓　八月廿八日づけ御手紙久方ぶりにて御消息に接し御元気の模様よろこばしく

畏友蓮田善明君の御最期の事は先般、三島由紀夫より伝聞承知

仰せの如く畏敬の念を新たに致し居り候折から一層詳しき御報告に接し　哀悼の念更に痛切に御座候

三島君より伝聞の節その感懐の一端を拙詩にものし　哭蓮田善明　の一篇を他のものと一緒に雑誌「人間」に寄せ置き候へども

時節柄発表むつかし様子編輯者より申越有之　もとより無辞ながら折角作りしものなれば　せめては貴下だけにでもお目にかけ置き度、在に筆録叱正を願上候

（表紙）

（カバー）

皇国の　文の
林に　わけ入
りて　奥処を
きはめ　かぐ
はしき　心の
花も　にほひ
しを　大君の
任のまにま
に　剣佩き　遠の御門に　さむらひて　帰るさの　八月二十日
戦の　勝たぬうらみに　わが友の　ますらたけ男は　マレー
なる　ジョホールバルに　ぴすとるを　己がこめかみに　あて
がひて　命すぎにき　みたま今　きみがつかへし　大君の　み
国のそらの　いづらにか　かへりておはす

（未定稿）

反　歌

ますらをの道行きつくしかへらざる友をいつまで待たんとすらん

意を尽さず反歌今ひと歌ありしも捨て候　未定稿の大過なくば、そのうちに遺族の方々にも悪筆を揮ってお目にかけたくなど愚考致し候まゝ　夫人又は御子さんのお名前もお判ならばお序の節御教示置き下され度

なほ遺品の時計はもし小生の贈呈のものならば「ミルトン」非ず「ミドー」と申す夜光時計に有之候

文芸文化叢書・解題13

女流日記　清水文雄著
15／7／5刊・260頁・1円30銭（叢書6）

目次　序（副題ふかげろの日記）／形式／蜻蛉日記／更級日記／土佐日記／歌発想／一みやび／一の精神／跋

紹介の言葉　王朝女流の苦悶は生活として己に深刻を極めたものであった。併し女流日記が我々の心を強く捉へるのはかかる生活の表現の故ではない。いはば苦悶が文芸に於て遂げた転身の美しさの故である。この転身の切なさを思ひみる者の胸にのみ古典としての女流日記は蘇生ってくるであらう。著者の探究は正しくかうした姿勢によって貫かれてゐる。

（「文芸文化」昭和15年8月号表紙3）

書評（文芸文化・15年10月号）

一女流日記―を読みつゝ（西下経一）批評にかへて（遠藤嘉基）「女流日記」―の著者にさゝぐ（多胡順）「女流日記」に関聯する一問題（蓮田善明）

小生は当地方の風物に愛情を生じ候ために帰京を延引或はこの冬もここにて越年致候やも知れず候へども　早晩拝眉の機も有之べくとたのしみに致し候　旧文芸文化の同人諸兄へ何卒よろしく御伝声の程願はしく

先は右のみ草々不備

佐藤春夫

清水文雄様

もう一通は、同年十月十日に受取ったもので、この方には表書きに「十月七日」の日付があり、本文の奥には「九月四日夕」と記されてゐる。

拝復　九月卅日付御手紙を拝誦甚だよろこばしく心強く覚えければ　左に蕪辞を連ねて旧文芸文化同人諸子に示さんとす

天つ日を身じろがて見る
一つ巣の鶯の子に似て
友四人かたく結びき

相睦みはげましけるを
そのひとり夜半の嵐に
失せければ三つは残りて

亡き友をなげき惜しめど
あま翔ける志もて

かなしみになどかは沈む

三人して四人の望み
遂げ果し努めざらめや
男々しくも立上る見ゆ

うつそ身の目には見えねど
のこりたる三人の友を
亡きひとり見守り居れば

機を見て蓮田氏遺族には拙筆を揮ひ度くと存じ居ります

＊お序の節　栗山氏等へも可然御致声の程願ひ上げます

先は貴翰拝誦の御礼のつもりにて右未定稿お笑ひ草まで

九月四日夕（ママ）

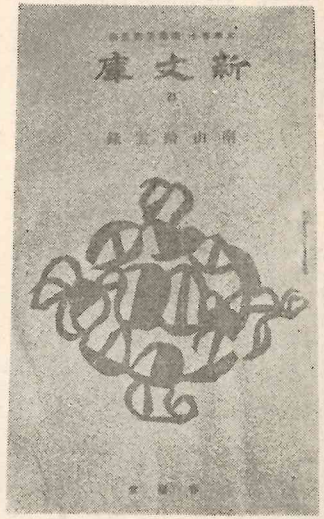
佐藤春夫

清水文雄様

玉几下

＊実は乍失礼もう一方は失念思ひ出さず　老眈の譏免がれがたく候　御憫笑の事

去る十二月八日（この日は奇しくも大東亜戦争の始まった日に当った）に、所用あって熊本に出かけた。幸に午前中に用件が片付いたので、午後は蓮田夫人敏子さんと連れ立って、田原坂公園の蓮田善明文学碑に行った。昭和三十五年秋の除幕式以来訪れることもなく、いつか満六年の歳月が流れた。季節外れで、ここを訪れる観光客も少く、土産物店もひっそりしてゐた。丘つづきが近年開拓され



■刊行趣旨「新文庫」刊行について

監修者　文学博士　斎藤清衛

近年日本の出版は世界の首位を争ふほどの盛況を示しながら、その事業には必ずしも日本的な不抜の信念を有せず甚だ憂ふべき傾向をさへ生じてゐた。然るに事変勃発後年を重ね、世界の情勢また日日に深刻を加へて、今日に処する日本国民の精神錬成は益々至要のこととなって来たにも拘らず、今なほ商業主義的な出版物の氾濫はまことに坐視するに堪へないものがある。しかも国民は決してかゝる現状に満足してゐるものではなく、進んで今日の大国民としての信念を打樹て、熱誠なる精神を養ふべき真の読書を心から切望してやまないのである。然し乍ら信頼して購ひ、読むにたやすく、楽しく心を開かれる、権威のある良書といふものは惟ふに甚だ稀である。こゝに於て、我々は確乎たる識見と周到な組織とによる良書出版の必要を痛感し、真に国民的文庫とも称すべき「新文庫」の刊行を企てた次第であるが、これ実に一つには読書界の刷新を期し、一つには国民の新しい渇望に応へんとする試みにほかならない。その方針の大要は、わが国民の精神を根抵から養ふに必要な古典をその中心として、古今東西に亘る第一級の典籍を之に配し、特に各書の編輯印刷等には周到の意を用ゐ、適切な解説・註釈・口語訳等を施して

潑剌たる読書慾を誘導し、或はつとめて原著者の肖像写真を掲げてその風格に親しませる等、読者が直截にその書の真髄に触れ得るやうに志した。

如上の趣旨を諒とせられ、ひろく読書子の支援と激励とを得て、本文庫の使命達成に近づくことが出来るならば余の幸甚とするところである。

■体裁　新書版軽装・発行部数　五千・春陽堂刊

■「新文庫」刊行書目

番号	書名	校注者	刊行年月日（刊行に至らなかった）	頁数	価・銭
1	古事記	蓮田善明	一三五頁	50	50
2	海ゆかば		一六五頁	50	50
	歴代愛国和歌集		一六六頁	50	50
3	二天一流	栗山理一	17・3・30	50	50
4	人麿と赤人	池田勉	17・8・13	50	50
	福沢諭吉				
5	日本国民の覚悟	八尋瑞雄	17・1・10	50	50
6	二宮尊徳	高藤武馬	17・1・15	50	50
7	国木田独歩　武蔵野	安田新太郎	17・1・10	50	50
8	韃靼漂流記	清水文雄	17・1・15	50	50
9	新編藤村詩抄	栗山理一	17・5・20	50	50
10	俳諧寺一茶	栗山理一	17・7・15	50	50
11	現代の俳句	野村望東尼夢かぞへ	17・7・15	50	50
12	野村望東尼夢かぞへ	八尋瑞雄	17・7・15	50	50
13	天狗芸術論	栗山理一	17・8・13	50	50
14	吉野拾遺	高藤武馬	17・11・25	50	50
15	福本日南・日南歌集	今田哲夫	17・12・1	50	50
16	口訳対照　更級日記	清水文雄	18・3・5	80	80
17	遣唐使その他	仲原善忠	17・11・18	50	63
18	芭蕉百句解	阿川燕城	18・11・5	50	73
19	堤中納言物語	狩野恕文	19・6・13	50	73
20	心の掟木	吉野裕	19・6・13	50	77
21	南山踏雲録	栗山理一	一六九頁	50	1円
22	国学のしるべ	池田勉	一六九頁	50	

て密柑畑になり、まだ植ゑて間もない稚木を手入れするらしい農夫たちの声がすぐ近くから聞えてきた。敏子さんが附近の農家でもらってきた水で碑を浄め、携へた黄菊を花立てに差した。それから植木の町で買った密柑と広島から持参した菓子を台石の上に供へた。碑前の枯草原に並んで腰をおろし、密柑と菓子のお下りを頂きながら、暫くの時を過した。折から小春日和の午下りで、この高台の裾を走る九州本線の汽笛が、時折丘上の静けさを破った。

ふるさとの駅に下り立ちながめたるかの薄紅葉忘らえなくに

斎藤先生の染筆になるこの碑銘も、浄めの水のためにしっとりと字面をうるませてゐた。

私ははからずも、佐藤春夫先生のことを思ひ出してゐた。南方前線で蓮田が託した「おらびうた」の歌稿を大事に守り届けて下さった先生。戦後頂いたお手紙に二度とも蓮田の遺族のことを心にかけてゐられた先生　そして、あの温い言葉で、失意に沈む私どもを励まして下さった先生。さういへば、垣内先生も、『文芸文化』終刊号で「一休みしてから、……」といたはりとはげましの言葉をかけて下さった。その垣内先生も、佐藤先生も、すでにこの世にはおはさぬ。両先生より先に、蓮田もすでにこの世を身まかってゐる。そして、ここからは見えないが、有明海を隔てたかなたの諫早には、昭和二十八年春病ひにたふれた伊東静雄の詩碑がある。

一瞬、何か一筋の光る物が私の五体を貫いたやうに思った。

○

若き日の友情に支へられ、勿体ないほどの恩頼にすがって、「志」を浄く守り通さうとした往時を顧みることは、一片の差ぢらひなしにはかなはないとしても、さういふ私どもの足跡を、今改めて検討の俎上にのぼせようとされる『バルカノン』同人各位には、感謝の言葉もないほどである。

「恩頼記」と銘打ったこの文章には、本来なら、このほかまだ沢山の方々を招じて来なければならぬ。さきに名前をあげた西尾実先生・岡崎義恵先生・斎藤清衛先生・久松潜一先生・伊東静雄氏については、もっと詳しく語らねばならないし、そのほか、今月十八日朝他界された東条操先生、土井忠生先生・風巻景次郎氏・高村光太郎氏・中勘助氏・吉井勇氏・棟方志功氏・保田與重郎氏・浅野晃氏・田中克己氏、……。名もない小誌のために声援と寄稿の労をいとはれなかった学者、文人は数へ上げればきりがない。これらの方々については、いつか「続・恩頼記」を物して、御厚志に報いる時を持ちたいと思ふ。ここでは、主として垣内松三・佐藤春夫両先生を偲ぶ一文を綴り、その高恩を感佩することにした。

（四一、一二、二四）

愛の灯
社会にともす
善意銀行
広島県連絡協議会々長
景山勝義

「文芸文化」総目次

1　標題は本文の見出しに従ひ、副題も併記して、原型の保存に留意した。

2　連載回数の表紙は原則として、本文に従ふを旨としたが、松尾聡「平安朝散佚物語攷」は省略して「考①」の如く表示した。

3　論文、作品の形態の分類は、毎年12月号に掲載された「文芸文化」総攬に原則的に準拠し、巻頭言、研究・評論、詩、短歌、俳句、小説、随筆、書評、雑に分類した。

4　補註は紙面の都合上雑誌の内容構成又は変更等の簡単な補足説明に留めざるを得なかった。

5　目次中《》は特輯を表示する。

6　広告は、紙面の都合上すべて除いた。

（隠岐国彦）

年月号	巻号	通巻	頁数	価格
標題	執筆者名	掲載頁		

創刊号昭和13年7月（1の1）第1号55頁15銭

機（巻頭言）　垣内松三　1
創刊の辞　池田　勉　2～3
日本的性格の批評性※研究　斎藤清衛　4～9
神話にことよせて※研究　風巻景次郎　10～15
富永仲基の方法※研究　栗山理一　16～20
伊勢物語の「まどひ」※研究　蓮田善明　21～26
平安朝散佚物語攷①（以下「考」と略す）　松尾　聡　72～34
心高き高宮宣旨物語
〈考説〉
文学の神語　池田　勉　35～36
懐郷・ロマンティシズム・本意考　井本農一　36～37
枕草子の注釈について　吉田精一　37～39
対詠精神　清水文雄　39～41
稲妻（詩）　伊東静雄　42～43
言葉の問題（随筆）　西尾　実　44～47
〈批評〉
谷川徹三著神話と科学　池田　勉　48～49
西下経一著日記文学　清水文雄　49
近藤忠義氏「俳諧性」の成立過程―庶民性と町人性の問題　栗山理一　49～50
藤田徳太郎氏国学の理想　蓮田善明　50
日本文学講筵（第一講）　久松潜一　51～54
近世に於ける小説批評（第一回）※研究　55
会規　55
編輯後記　（蓮田）　55
※会規は編輯後記の上段に15字詰23行組みで、16年2月号まで、同じスタイルで掲載されてゐる

※発行兼編輯人　蓮田　善明
※印刷所　東京市神田区鎌倉町五の二　東陽印刷所
※発行所　東京市世田谷祖師谷二ノ六六　日本文学の会
※発売所　東京市世田谷区北沢三ノ九八四　倭書院

昭和13年8月号（1の2）第2号48頁15銭

基礎工作（巻頭言）　斎藤清衛　1
文芸精神―文芸学の対象としての※研究　池田　勉　4～12
防人歌に見うるもの※研究　藤森明夫　13～17
土佐日記序章※研究　清水文雄　18～23
河霧の物語（考②）　松尾　聡　24～27
〈問題〉
源氏物語の価値　藤田徳太郎　28～31
的と性　栗山理一　31～33
〈序説〉
カロッサ「指導と信従」　上泉一郎　34～36
ロレンス「翼ある蛇」　坂本　浩　36～39
モールス先生「日本その日く」　蓮田善明　39～41
斎藤清衛「批評文学」　四賀　薫　41
〈文芸文化〉　42～43
日本文学講筵第一講　久松潜一　44～47
近世に於ける小説批評（第二回）　（蓮田）　48
会規・後記
※〈文芸文化〉は読者から寄せられた建設的意見や文化短評を中心にした投稿欄

昭和13年9月号（1の3）第3号48頁15銭

古典（巻頭言）　久松潜一　1
日本文芸と日本美術※研究　岡崎義恵　4～10
騒人（ヘルデルリーンの一句）※研究　栗山理一　11～14
万葉末季の人※研究　蓮田善明　15～21
駒迎への物語（考③）　松尾　聡　22～26
〈序説〉
小宮豊隆「夏目漱石」　小野好夫　27～29

頴原退蔵「俳諧文学」　四賀薫29～30
垣内教授「基本語彙学」　清水文雄30～33
〈文芸文化〉　34～35
高野山日本文学講筵の記　36～37
古典の倫理※研究　池田　勉40～42
道遠し（随筆）　斎藤清衛43～47
会規・後記　（蓮田）48
※大阪支部新設―堺市七条通五丁四一栗山

昭和13年10月号（1の4）**第4号**50頁20銭
学のために（巻頭言）　蓮田善明1
文学の歴史的研究※研究　斎藤清衛4～10
狂※研究　栗山理一11～15
続・文芸精神論（富士谷御杖の道）※研究　池田　勉16～19
美術史より見たる源氏物語※研究　源　豊宗20～26
有明の別れの物語（上）（考④）松尾　聰27～31
〈序説〉
雪鳥遺稿「修善寺日記」　清水文雄32～33
山陽朱批「細香女史詩稿」　多胡　順34～36
この時を見よ（時言）　佐竹　健37～39
〈文芸文化〉　40～41
日本文学について※評論　保田與重郎42～46
日本文学講筵第一講
近世における小説批評(三)久松潜一47～49
大阪支部例会予告　19
会則・後記　（は）50

昭和13年11月号（1の5）**第5号**53頁20銭
正風（巻頭言）　池田　勉1
風流論（討究第一稿）※研究　栗山理一4～17
志賀直哉論覚書※研究　井関　保18～24
青春の詩宗（大津皇子論）※研究　蓮田善明25～30
有明の別れの物語（下）
夢語りの物語（考⑤）　松尾　聰31～36
水族館にて（短歌）　伊東志夏37
〈短歌革新の問題〉
列挙的に　中河与一38～39
短歌革新について　岡山　巌39～40
短歌の革新　藤田徳太郎41～42
短歌革新について　柴生田　稔42～43
短歌の革新について　岡野直七郎43～44
実行と文学の相剋（時言）　坂本　浩45～47
〈文芸文化〉　48～49
ある日の反省（随筆）　斎藤清衛50～51
各人各語（会員通信）　52
大阪支部例会予告　24
会規・後記　（ふ）53

昭和13年12月号（1の6）**第6号**51頁20銭
知性の動力性（巻頭言）　斎藤清衛1
風流論（討究第二稿）　栗山理一4～15
形象戦斗の分析※研究　興水　実16～25
貫之の文学※研究　加藤惣一21～25
―土佐日記正月廿日の条の解釈―
うきなみの物語（考⑥）　松尾　聰26～31
古典にして斬新（時言）　池田　勉34～36
〈文芸文化〉　32～33
日本の知性※書評　三浦常夫39～43
保田與重郎「戴冠詩人の御一人者」について
冬日静穏（詩）　宮崎丈二44
詩史余談（随想）　岩城準太郎45～48
各人各語　37～38
文芸文化第一巻総攬　49～50
会規・後記　（清水）51

昭和14年1月号（2の1）**第7号**58頁20銭
荒魂と和魂（巻頭言）　栗山理一1
日本の風流（討究第三稿）　池田　勉4～12
古今集の抒情性※研究　西下経一13～17
王朝発想の地盤※研究　清水文雄18～23
―曽祢好忠序論―
岩うつ波の物語（考⑦）　松尾　聰26～30
野分に寄す（詩）　伊東静雄24～25
伝統（短歌）※五首　斎藤　史40
※文学伝統の問題※
※「貴下は日本文学の伝統をいかにして、いかなる方向につき進めんとされるか」
一つの欲求　阿部六郎33～34
※無題　中河与一34～35
※無題　中島栄次郎35
感想　保田與重郎35～36
※「1、貴下は日本文学のいかなる作品、いかなる作家を自己の血統とされるか。
2、貴下はいかにして新しい伝統を作らんとされるか」
※無題　伊東静雄36～37
※無題　田中克己37～38
実作者として　中村草田男38～39
古典の国民化の運動（時言）　斎藤清衛41～43

〈書評〉
斎藤清衛著「精神美としての日本文学」　栗山・池田・清水46～48
大場俊助著「日本文学様式論史」　興水　実49
〈ぶんげいぶんくわ〉
赤彦歌碑のこと（随筆）　藤森朋夫50～53
菊など（随筆）　蓮田善明54～57
書斉瑣言※会員通信欄　31～32
会規・後記　（清水）58
※カット　工藤正義・野田信

昭和14年2月号（2の2）**第8号**50頁20銭
相聞（巻頭言）　清水文雄1
新風の位置（討究第四稿）　蓮田善明4～9
―志貴皇子に捧ぐ
幸若舞の隆替※研究　市古貞次10～14
―戦国武士と音曲
西行的人間※研究　池田斉斐15～21
※池田斉斐は池田勉の筆名
モラル探究の精神①※研究　坂本　浩22～26
緒絶えの沼の物語（考⑧）　松尾　聰29～35
蓮田君に寄す（短歌）※六首今田哲夫36
文芸人の古典関心その他（時言）　斎藤清衛37～39
〈ぶんげいぶんくわ〉　40～41
詩について※評論　中島栄次郎42～46
身についた言葉（随筆）　嘉納とわ47～49
岩野泡鳴氏に対する記憶※随筆　水野葉舟50～54
書斉瑣言　27～28
会規・後記　（清水）50

昭和14年3月号（2の3）**第9号**59頁20銭
「源氏」の洪水（巻頭言）　斎藤清衛1
みやび（討究第五稿）　清水文雄4～11
上田秋成論※研究　栗山理一12～21
西行的人間（二）※研究　池田斉斐22～24
モラル探究の精神(二)※研究坂本　浩25～29
隠れ蓑の物語（考⑨）　松尾　聰32～38
日本の春（詩）　田中克己30～31
〈「文芸文化」の問題〉
文芸と文化　保田與重郎39～40
文芸と文化とに対して　風巻景次郎40～42
日本と世界　三浦常夫42～44
文化と文芸と　森本治吉44～45
「文芸と文化」の問題　中島栄次郎45～46
感想一つ　柴生田　稔47～48
わが文芸と文化との交渉　斎藤清衛48～49
日本文化に関聯して(随筆)岡野直七郎52～55
託摩野雑記（随筆）　蓮田善明56～58
〈ぶんげいぶんくわ〉　50～51
会規・後記　（清水）59

昭和14年4月号（2の4）**第10号**57頁20銭
青山義雄の絵（巻頭言）　中河与一1
天正年間府内学林における編纂※研究　土井忠生4～13
上田秋成論（二）※研究　栗山理一14～27
モラル探究の精神(三)※研究坂本　浩28～31
隠れ蓑の物語（下）（考⑩）　松尾　聰34～37
春還る（俳句）※五句　飯田蛇笏40
〈ぶんげいぶんくわ〉
風流論討究を読む※批評　斎藤清衛38～39
今日の書（書評）　48～49
中河与一著「全体主義の構想」　50～51
（高藤）50
成瀬一三遺著「能楽の研究」（市古）50～51
川田順著「吉野朝の悲歌続篇」
（斎藤）51
春星台東皐集　（斎藤）51
岡山巌著「短歌鑑賞論」　（清水）51
随筆二題　山口誓子52～57
〈国文学の現状批判〉
国文学界の現状批判　藤田徳太郎41～42
国文学の将来　石井庄司42～44
国文学界の現状を慨す　塩田良平44～46
古典の評価　池田斎斐46～47
会規・後記　（S）58

昭和14年5月号（2の5）**第11号**64頁20銭
扉　カット
文学の歴史的研究の本義※研究　斎藤清衛4～8
他界の花※研究　池田斉斐9～13
西行的人間についての覚え書　井関　保14～18
尾崎士郎の芸術※研究
―意欲の必然と宿命
共同芸術としての俳諧※研究　瀬群敦18～22
みつの浜松の物語(上)(考⑪)　松尾聰23～27
響き（短歌）※五首　前川佐美雄28
佐伯祐三の絵※評論　栗山理一29～35
※相聞の文学※

現代相聞歌の運命　岡山　巖36～39
相聞の文学　藤田徳太郎40～41
相聞について　三浦常夫42～43
些か具体的に　船越　章43～45
相聞文学聴書　高崎正秀45～48
相聞四十首選　中河与一49～51
　52～53
〈新風言〉
※従来の「ぶんげいぶんくわ」に代る投稿欄
随筆　中　勘助54～59
小さい歌帖（随筆）　蓮田善明60～63
会規・後記　（S）64
※扉　―前号までは巻頭言が掲載されゐたが本号からカットが入った。青山義雄。
※表紙デザイン変る。

昭和14年6月号（2の6）第12号55頁20銭
建部綾足のこと※研究　杉浦正一郎4～9
古今集の花の歌※研究　清水文雄10～15
上宮聖徳法王帝説と帝記※研究　藤井信男18～22
文学史に於ける「転機」の問題※研究　袖崎　修22～24
みつの浜松の物語(二)(考⑫)松尾　聰25～29
乙女峠（詩）　丸山　薫30～31
東洋の回想※評論　池田斉斐34～38
梵燈庵の奥州漂泊記（古典新生）　斎藤清衛16～17
〈詩精神と散文精神〉
詩精神と散文精神について　保田與重郎39～43
詩精神と散文精神　中島栄太郎43～46
詩のための雑感　蓮田善明46～50
〈新風言〉　32～33
山廬随筆　飯田蛇笏51～54
会規・後記　（K）55

昭和14年7月号（2の7）第13号54頁20銭
試論日本の抒情（討究第一稿）池田勉4～7
文人論※研究　栗山理一8～21
―建部綾足について―
食味と文学味　斎藤清衛22～24
みつの浜松の物語(三)(考⑬)松尾　聰25～29
岩つつじ（古典新生）　清水文雄30～31
美の創造※研究　坂本　浩32～37
―「雪国」と「天の夕顔」―
〈新風言〉　38～39
〈現代の詩人〉
現代の詩人　田中克己40～42
無題　亀井勝一郎43～45
練習機（俳句）　山口誓子46
草二題※隋筆　水野葉舟47～53
通信紙随筆　蓮田善明54～58
会規・後記　（S）59

昭和14年8月号（2の8）第14号80頁30銭
抒情の体系（討究第二稿）　池田　勉4～8
〈特輯　文学と風景〉
日本文芸における風景の成立　風巻景次郎9～15
精神としての風景　高橋義孝16～19
文学と風景　戸山六郎20～25
文学に於ける風景について小野好夫26～27
日本の気候・風土・文学　斎藤清衛27～29
永福門院（古典新生）　久松潜一30～31
建部綾足―続文人論―※研究栗山理一32～48
西鶴論※研究　後藤興善49～56
―「本朝桜陰比事」小考―
みつの浜松の物語(四)(考⑭)松尾　聰57～63
桜その他（短歌）※十首　青木敬麿64～65
「かげろふの日記」について（書評）　清水文雄66～69
〈新風言〉
恒春園（随筆）　高藤武馬70～71
恋のらくがき（戦地随筆）　蓮田善明72～76
会規・後記　（S）80

昭和14年9月号（2の9）第15号56頁20銭
抒情の系譜（討究第三稿）　池田　勉4～9
連歌随想※研究　小島吉雄10～16
太祇の抒情性※研究　杉浦正一郎17～22
三河にさけるの物語（上）(考⑮)松尾聰23～27
女人形の記（古典新生）　栗山理一28～29
山上憶養館（短歌）※10首　松下武雄42～43
※昭和13年10月9日なくなったコギト同人松下武雄の遺稿から50首「その友人保田與重郎氏に乞うてその中から短歌10首を選んでもらひ書名をそのまゝ冠し」（後記・S）載録したもの。
山と川※評論　唐木順三44～46
鬼貫「七久留萬」合評（一）　野間光辰・中島栄次郎・杉浦正一郎　池田　勉・栗山　理一・山崎　喜好48～49
〈新風言〉

高原随想※随筆　斎藤清衛50～55
会規・後記　（S）56

昭和14年10月号（2の10）第16号77頁20銭
〈国文学エッセイ〉
作品伝承の運命※研究　斎藤清衛4～7
現代の旧本文学※評論　岡山　巖8～11
日本の情熱※評論　山岸外史12～16
日本文学に関する随想※評論　福士幸次郎17～21
明治文学回想の一面※評論　水野葉舟22～26
和歌に関する随想※評論　斎藤　瀏27～31
ひぐらし※評論　柴生田稔32～36
二つの発想※評論　小野好夫37～39
天気図※研究　栗山理一40～45
ゆつきが嶽（古典新生）　藤森朋夫46～47
奥山の鞍の色※研究　後藤興善48～51
更級日記※研究　清水文雄52～56
三河にさけるの物語(中)(考⑯)松尾聰60～67
〈新風言〉　68～69
〈新刊書評〉
唐木順三著「近代日本文学の展開」（吉武操）70
松下武雄遺著「山上憶養館」（技清江）70
荘田安太郎著「竹取物語栞」（宮川ひろし）70～71
岡山巖「短歌文学論」（斎藤清衛）71
公園にて（詩）　田中克己58～59
応召記（随筆）　丸山　学72～76
会規・後記　（S）77

※扉カット―詩人でもある宮崎丈二に変る

昭和14年11月号（2の11）第17号59頁20銭
〈古今和歌集〉
子規に於ける古今集※評論　中河与一4～6
古今和歌集と現歌壇※評論岡野直七郎7～16
詩と批評（上）※研究　蓮田善明17～34
―古今和歌集について―
三河にさけるの物語(下)(考⑰)松尾聰38～42
日のひかり（俳句）※五句中村草田男35　池田　勉36～37
物語の女（古典新生）
〈新著評〉
斎藤瀏氏の近業　斎藤清衛43～46
岡崎義恵氏の「日本の芸の様式」について　小野好夫46～48
西尾実氏著「国語教育の新領域」　四賀　薫49
松下武雄遺著「山上憶養館」について　田中克己49～51
〈新風言〉　52～53
出動記（戦地随筆）　丸山　学54～58
会規・後記　（S）59

昭和14年12月号（2の12）第18号68頁20銭
文芸復興―真淵の方法※研究栗山理一4～11
古今和歌集に関聯して※評論　保田與重郎12～15
詩と批評（中）※研究　蓮田善明16～21
―古今和歌集について―
憧憬の姿勢※研究　清水文雄22～28
―更級日記二―
初雪の物語（考⑱）　松尾　聰32～37
被葉の浮流くが如く（古典新生）　石井庄司30～31
時言　斎藤清衛42～44
〈新著評〉
保田氏の「後鳥羽院」を読みつゝ　池田　勉45～46
岡野氏の「歌壇展望」について　高藤武馬46
好色一代男と源氏物語※研究　後藤興善47～55
―故山口剛先生の研究態度の一面
鬼貫「七久留萬」合評（二）　野間　光辰・池田　勉・栗山理一　山崎　喜好・中島栄次郎・伊東静雄　杉浦正一郎　38～41
〈新風言〉　56～57
林泉（短歌）※五首　斎藤　瀏29
支那人と文字（戦地随筆）　丸山　学58～61
「文芸文化」第二巻総攬　62～67
会規・後記　（S）68

昭和15年1月号（3の1）第19号85＋30頁40銭
若き文化　老味の文芸※研究斎藤清衛4～9
―皇紀二千六百年を迎へるに際して―
詩と批評（下）※研究　蓮田善明10～21
―古今和歌集について
文芸復興―荒魂と和魂※研究栗山理一22～29
民衆と詩人※研究　池田　勉30～36
子規の文学論※研究　北住敏夫37～43
二つの心―更級日記三※研究清水文雄44～58

露のやどりの物語（考⑲）　松尾　聰61～63
高層雲
「詩集夏花」をめぐって
―伊東静雄論―※書評　四賀　薫59～60
富士正晴69～73
小曲（詩）―富士正晴に―　伊東静雄74～75
鬼貫「七久留萬」合評（三）
野間　光辰・池田　勉・山崎喜好　76～79
栗山　理一・中島栄次郎・伊東静雄
杉浦正一郎
枯野の琴（古典新生）　蓮田善明80～81
塔（戦地随筆）　丸山　学82～84
附載《現代国文学者譜》　附1～30
会規・後記　（S）
※文化短評欄《新風言》を《高層雲》と変へ毎月三頁宛一人で担当することになった。

昭和15年2月号（3の2）第20号60頁20銭
超現実研究態度の限界※研究　斎藤清衛4～8
伊勢物語小論※研究　高崎正秀9～15
文芸復興※研究　栗山理一16～25
―「ますらをぶり」と「たをやめぶり」
みづから悔ゆるの物語（考⑳）松尾　聰28～34
「勘」と国語の美※研究　山田正紀34～38
紅梅（古典新生）　岡崎義恵26～27
「日本的性格の文学」について※書評
風巻景次郎41～43
「詩集夏花」をめぐりて（二）※書評
―伊東静雄論―　富士正晴43～47
高層雲　池田　勉39～40
「文芸文化」に寄す※書評小糸夏次郎50～53
白衣（戦地随筆）　丸山　学47～50
会規・後記　（池田勉）51

昭和15年6月号（3の6）第24号56頁20銭
預言と回想※研究　蓮田善明4～8
南総里見八犬伝の時間※評論高橋義孝9～15
愛誦千句※研究　栗山理一16～28
歌ごころを読んで※書評　多胡　順29
壬申の行軍（古典新生）　高藤武馬30～31
俳諧について※随想　富士正晴32～36
かはほりの物語（考㉔）　松尾　聰36～40
春泥（短歌※五首　斎藤　史41
山にて―その二（随筆）　蓮田善明42～43
詩集夏花のこと※書評　保田與重郎44～45
夏花集に贈る歌※書評　山岸外史45～47
抜群の詩集※書評　田中克己47～48
伊東さんの詩※書評　池田　勉48～49
高層雲　池田　勉50～51
壁（北京印象記一）※随筆　斎藤清衛52～55
会規・後記　（池田勉）56

昭和15年7月号（3の7）第25号70頁20銭
王朝の精神※研究　池田　勉4～8
道長のこと※評論　保田與重郎9～13
王朝の風流※研究　遠藤嘉基14～18
―伊勢物語の一章を契機として
王朝美の形成※研究　風巻景次郎19～22
―枕草紙論―
古今の恋歌について※評論　山岸外史23～29
竹取の翁※研究　高崎正秀30～34
日記する女※研究　喜多義男35～39
桐壺の一句※研究　後藤興善40～44
道心すゝむるの物語（考㉕）松尾　聰44～48
天童懐去（古典新生）　安良岡康作49～50
聯詩の発生と其根拠に就て※研究
福士幸次郎51～64
上代中古の遺香（北京印象記二）※随筆
斎藤清衛65～68
会規・後記　（池田勉）69～70
※扉カット―本号以降二階堂顕蔵に変る

昭和15年8月号（3の8）第26号77頁30銭
日本の古典について※評論　青野季吉4～8
古代精神と近代精神※随想　西下経一9～16
物語文化について※評論　森岡常夫17～21
竹取の翁※研究　高崎正秀22～27
はこやの刀自の物語（考㉖）　松尾　聰28～35
女人哀歌（古典新生）　清水文雄36～37
藤村氏の「巡礼」※評論　戸山六郎38～45
小さい市で（詩）　田中克己46～47
現代詩人論（上）※評論　富士正晴48～56
愛誦千句（二）※研究　栗山理一57～61
古典への回想※書評　唐木順三62～63
―池田君の近著について―
礼讃と疑問※書評　藤田徳太郎63～65
畳※随筆　丸山　学66～70
《塹壕の書》（54氏）　71～76
会規・後記　（池田勉）77
※本号から扉カットの下に和歌が掲載され始めた。

昭和15年9月号（3の9）第27号53頁20銭
荷風の小説精神※研究　寺島友之12～15
子規の写実主義※研究　木内　進15～19
良寛の「隠」※研究　瀬群　敦19～25
ふせごの物語（考㉒）　松尾　聰28～31
催馬楽その他（古典新生）　藤田徳太郎26～27
落日（詩）　高村光太郎32～33
一つの方法※研究　斎藤清衛34～38
―自己反省的に―
高層雲　池田　勉39～40
山河（戦地随筆）　丸山　学41～44
村とその周囲の自然（随筆）　水野葉舟44～51
会規・後記　（S）52

昭和15年5月号（3の5）第23号51頁20銭
文化宣伝の問題※研究　斎藤清衛4～8
民族文学の特質※研究　木本通房9～13
―上代文学研究序説―
大伴家持の一歌境※研究　斎藤　貫14～20
宣長・親鸞・若き日本※研究井関　保21～22
かばね尋ぬる宮の物語その他※（考㉓）
松尾　聰23～30
安土の春（俳句）※五句　日野草城31
世阿弥の基礎教育論（古典新生）
西尾　実32～33
山にて※随筆　蓮田善明34～38
風流論について※書評　岡崎義恵39～40
「風流論」を読みつつ※書評
中島栄次郎40～41
「風流論」に就いて※書評　伊東静雄41～42
「風流論」を読む※書評　小糸夏次郎42～44
高層雲　池田　勉45～46
愛誦千句（三）※研究　栗山理一4～19
竹取の翁※研究　高崎正秀20～23
国文学の再編成※評論　新屋敷幸繁24～28
有賀長雄の文学論について※研究
藤井信男28～33
見二神崎遊女宮木古墳一作歌（古典新生）
後藤興善34～35
玉藻に遊ぶ権大納言の物語（考㉗）
松尾　聰36～40
現代詩人論（中）※評論　富士正晴41～47
恭仁の京※随筆　南蠻寺万造48～52
《続塹壕の書》（2氏）33
会規・後記　（清水）53

昭和15年10月号（3の10）第28号68頁20銭
境の表現停止※研究　金原省吾4～8
三つ或は六つの神話世界※研究
橘　純一9～14
新古今集について　小島吉雄15～19
愛誦千句（四）※研究　栗山理一20～31
父性愛（古典新生）　山岸徳平32～33
玉藻に遊ぶ権大納言の物語（考㉘）
松尾　聰34～39
荒村の絵（詩）　神保光太郎40～41
現代詩人論（下）※評論　富士正晴42～48
戦争文学「野戦風情」を読む※書評
斎藤清衛49～51
「女流日記」を読みつゝ※書評
西下経一51～53
批評にかへて※書評　遠藤嘉基53～55
「女流日記」の著者にさゝぐ※書評

「女流日記」に関聯する一問題※書評　蓮田善明57～58
黄龍の国※随筆　丸山　学59～67
会規・後記　（清水）68
※表紙・扉　カット本号から終刊まで棟方志功

昭和15年11月号（3の11）第29号53頁20銭
「莫忘の問題」※研究　児山敬一4～8
在原業平※研究　池田　勉9～17
玉藻に遊ぶ権大納言の物語（考㉙）　松尾　聰18～22
公任卿集覚書※研究　清水文雄23～28
散歩（俳句）※五句　臼田亜浪29
新防人（古典新生）　本位田重美30～31
詩集大陸遠望※書評　富士正晴32～35
「日本の味」※書評　戸山六郎35～37
「日本の味」について※書評　南蠻寺万造37～39
「日本の味」を読みて（短歌）今田哲夫38
大山先生と私※書評　山下寛治40～41
遊心と伝統※研究　栗山理一42～47
大陸の教室※随筆　斎藤清衛48～52
後記　（池田）53

昭和15年12月号（3の12）第30号57頁20銭
文学研究と新体制時代※評論斎藤清衛4～9
真淵論断片※研究　井上　豊11～15
本居宣長の学問※研究　笹月清美16～20
在原業平※研究　池田　勉21～26
霞隔つる中務宮の物語其他（考㉚）　松尾　聰27～32
磯なき国土（短歌）※五首　河野慎吾33
筒井ノ浄妙明秀（古典新生）　塩田良平34～35
国文学界の傾向について※研究　井本農一36～40
竹内勝太郎の出版※書評　富士正晴41～47
秋草二題※随筆　水野葉舟48～52
「文芸文化」第三巻総攬　53～56
後記　（池田）57

昭和16年1月号（4の1）第31号105頁30銭
森鷗外の文学論※研究　岡崎義恵4～11
源氏物語と漢文学※研究　市村　平12～21
国民文学史の問題※評論　斎藤清衛22～26
万葉の美について※評論　北住敏夫27～31
詞書について※研究　栗山理一32～44
在原業平※研究　池田　勉45～52
能因法師伝（その一）※研究　清水文雄53～62
岩垣沼の中将の物語其他（考㉛）　松尾　聰63～70
古今和歌集紫抄（一）※研究本位田重美71～75
二条派の歌（古典新生）　石田吉貞76～77
表現について※評論　中島栄次郎78～82
文芸批評について※評論　保田與重郎83～86
「文学の発生」※書評　石山徹郎87～90
武漢※随筆　丸山　学91～96
越の海※随筆　高藤武馬97～104
後記　（池田）105

昭和16年2月号（4の2）第32号56頁20銭
国文学の再建※評論　風巻景次郎4～8
国文学の使徒※評論　藤田徳太郎8～11
国文学の方向について※評論吉田精一12～15
国文学の使命について※評論池田　勉16～18
詞書について（2）※研究　栗山理一19～32
紙鳶（短歌）※五首　岡山　巌33
真の道（古典新生）　東条　操34～34
をぐら山たづぬる民部卿の物語（考㉜）　松尾　聰36～40
古今和歌集紫抄（二）研究　本位田重美41～45
民族の抵抗※随筆　丸山　学46～49
「滴瀝」の星※書評　野尻抱影50～51
試練※随筆　斎藤清衛52～55
会規・後記　（池田）56
※蓮田善明の召集解除を後記は伝へてゐる。

昭和16年3月号（4の2）第33号50頁20銭
詞書について（3）※研究　栗山理一4～19
上代歌謡に於ける自然の一考察※研究　瀬古　確20～27
在原業平※研究　池田　勉28～33
頭巾（古典新生）　岩田九郎34～35
あやめかたひく権少将の物語（考㉝）　松尾　聰36～40
古今和歌集紫抄(三)研究　本位田重美41～44
朴の木の歌※随筆　南蠻寺万造45～49
後記　（池田・蓮田）50

昭和16年4月号（4の4）第34号55頁20銭
清純※評論　斎藤清衛4～7
在原業平※研究　池田　勉8～20
能因法師伝(その二)※研究　清水文雄21～27
むさしののこころ(古典新生)高松　秀28～29
あやめもしらぬ大将の物語其他（考㉞）　松尾　聰30～34
古今和歌集紫抄※研究　本位田重美35～39
鴨長明※研究　蓮田善明40～54
後記　（池田・蓮田・清水）55

昭和16年5月号（4の5）第35号45頁20銭
故国の雅韻※評論　斎藤清衛4～7
鴨長明（2）※研究　蓮田善明8～15
揺らぎ止まぬ心（古典新生）　栗山理一16～17
能因法師伝（其の三）※研究清水文雄18～26
在原業平※研究　池田　勉27～32
あやめうらむ中納言の物語其他（考㉟）　松尾　聰33～37
古今和歌集紫抄(五)研究　本位田重美38～41
母※研究　丸山　学42～44
後記　（蓮田・池田）45

昭和16年6月号（4の6）第36号47頁20銭
小倉山荘色紙和歌※研究　栗山理一4～10
在原業平※研究　池田　勉11～17
あかる三日月や（古典新生）　仲原善忠18～19
鴨長明（3）※研究　蓮田善明20～33
よもぎのかきねの物語他一篇（考㊱）　松尾　聰34～36
古今和歌集紫抄(六)※研究本位田重美37～39
初期「明星」の思ひ出※随筆　水野葉舟40～45
後記　（清水・蓮田）46～47

昭和16年7月号（4の7）第37号69頁35銭
和奈佐少女物語併序(劇詩)　佐藤春夫4～14
王位覬覦者（詩）　田中克己15～17
蕨とりに（詩）　富士正晴18～20
詩のこと※評論　中島栄次郎21～23
左大臣橘宿祢の家の宴遊について※評論　保田與重郎24～33
倪雲林※随筆
沢の螢（古典新生）
「いはぬにひとの」の物語（考㊲）　棟方志功35～37
初夏の印象※随筆　清水文雄38～39
死の芸術※随筆　松尾　聰40～44
―山頭火の道―　水野葉舟45～50
小倉山荘色紙和歌(二)※研究栗山理一54～67
後記　（蓮田・清水・池田）68～69

昭和16年7月号（4の8）第38号47頁20銭
建速須佐之男命※研究　池田　勉4～9
鴨長明（4）※研究　蓮田善明10～33
たわやめ（古典新生）　森　敬三34～35
埋れ木の物語他二篇（考㊳）　松尾　聰36～40
日本・支那・伝統文学※随筆　斎藤清衛41～45
後記　（池田・清水）46～47

昭和16年9月号（4の9）第36号49頁20銭
哭泣の倫理※研究　（池田勉）4～10
鴨長明（5）※研究　（蓮田善明）11～29
具レ妻行三丹波国一男於二大江山一被レ縛語　斎藤清衛30～31
（古典新生）　松尾　聰33～36
唐国の物語（考㊴）

花ざかりの森※小説　三島由紀夫37～47
後記　（は）49

昭和16年10月号（4の10）第40号48頁20銭
秋風国語談※評論　豊永秀也4～11
鴨長明（6）※研究　（蓮田善明）12～28
残心（古典新生）　（栗山理一）29～30
古今和歌集紫抄(七)※研究本位田重美31～34
朝倉の物語（一）（考㊵）　松尾　聰35～38
花ざかりの森(二)※小説　三島由紀夫39～46
後記　（い・清水）47～48

昭和16年11月号（4の11）第41号50頁20銭
記述より倫理へ※研究　斎藤清衛4～8
―文学の歴史研究に関する一考察―
鴨長明（7）※研究　（蓮田善明）9～20
蓮華ノ想ヲ作セ（古典新生）（　）21～23
朝倉の物語（二）（考㊶）　松尾　聰24～27
玉藻にあそぶ物語の作者について※研究　堀部正二27～34
花ざかりの森（その三上）※小説　三島由紀夫35～41
有間皇子※研究　（池田勉）42～47
後記　（い・は・清水）48～50

昭和16年12月号（4の12）第42号65頁30銭
時局と国文学者※評論　斎藤清衛4～6
有馬皇子※研究　（池田勉）7～19
独座観念（古典新生）　今田哲夫20～21
宿執※評論　（栗山理一）22～31
朝倉の物語（三）（考㊷）　松尾　聰32～37

鴨長明（8）※研究　蓮田善明38～51
花ざかりの森（その三下）※小説　三島由紀夫52～60
文芸文化第四巻総目録　61～62
後記　（い・清水・は）63～65

昭和17年1月号（5の1）第43号95頁40錢
≪新しい国学について≫
誕生日の観察※研究　垣内松三4～7
国学と詩人の伝統※評論　保田與重郎8～17
国学管見※研究　井上　豊18～22
わが国学※研究　伊藤　裕23～31
新国学観※研究　斎藤清衛32～39
―歴史認識の根本について―
今日の国学の精神※研究　藤田徳太郎42～46
―山田孝雄博士「国体の本義」を機縁として
国学と「民間伝承」論※研究　久松潜一47～50
みくにの文章※評論　浅野　晃51～55
―久松潜一博士「国学」をよむ―
国学入門※研究　蓮田善明58～64
和泉式部日記の作者について※研究　清水文雄65～71
実感の恢復※研究　栗山理一72～79
悲願の学び※研究　池田　勉80～88
目前心後（古典新生）　古賀行義40～41
わたくしの希ひは熾る（詩）三島由紀夫56～57
朝倉の物語（四）（考㊸）　松尾　聰89～93
後記　（清水・池田・蓮田）94～95

昭和17年2月号（5の2）第44号48頁20錢
内気者と文学表現※研究　斎藤清衛3～8
宣戦の大詔を拝して（短歌）　今田哲夫9～10
式子内親王（一）※研究　清水文雄11～16
伝へ―鈴の屋の翁のまなびごと※研究　蓮田善明17～24
天武天皇（一）※研究　池田　勉25～32
帰一する心（古典新生）　鈴木知太郎33～34
「古典的感覚」（書評）池田・蓮田・栗山35～40
朝倉の物語（五）（考㊹）　松尾　聰41～45
後記　（蓮田・清水・池田）46～48

昭和17年3月号（5の3）第45号32頁20錢
天武天皇（2）※研究　池田　勉1～12
草の春※随想　栗山理一13～15
春の雪（詩）　伊東静雄16～17
式子内親王（2）※研究　清水文雄18～23
回天のいきどほり（二）※研究　蓮田善明24～27
―鈴の屋の翁のまなびごと―（二）
夢野の鹿（古典新生）　蓮田善明28
朝倉の物語（六）（考㊺）　松尾　聰29～30
鉄斎の絵（池田）民の心（清水）　31～32
〈無題〉（蓮田）

昭和17年4月号（5の4）第46号32頁20錢
文化普及※随想　斎藤清衛3～7
式子内親王（3）※研究　清水文雄9～12
中世隠者の歌（古典新生）　江藤保定13
大詔（詩）　三島由紀夫14～15
天武天皇（3）※研究　池田　勉16～25
からごころ※研究　蓮田善明26～29
―鈴の屋の翁のまなびごと（三）
朝倉の物語（七）（考㊻）　松尾　聰30～31
大御代（清水）後記（蓮田）　32

昭和17年5月号（5の5）第47号
夢の浮橋（藤原定家論）※研究　栗山理一3～9
天武天皇（四）※研究　池田　勉10～17
あはれあな面白（古典新生）　蓮田善明18
式子内親王（四）※研究　清水文雄19～26
やまとだましい※研究　蓮田善明27～32
―鈴の屋の翁のまなびごと―
朝倉の物語（八）（考㊼）　松尾　聰33～36
明日への展望※随想　斎藤清衛37～40
えにし（栗山理一）御稜威かしこみ（池田勉）無題（蓮田善明）　41～43
※蓮田善明「鈴の屋の翁のまなびごと」は近く出版される著書にまとめて世に出ることになったのでこの号を以って掲載中止となった（同年七月号後記）

昭和17年6月号（5の6）第48号
言霊について※研究　池田　勉3～10
みんなみのおほみいくさ（和歌）　田中克己11
言向※研究　蓮田善明12～30
朝倉の物語（九）（考㊽）　松尾　聰31～33
夜雨（古典新生）菅原道真）安田新太郎34～35
研究室余録（一）※随筆　斎藤清衛36～38
古歌の新生（榊田凌次郎）母の話（沢田浜司）神ぞ知るらむ（清水文雄）・39
無題（蓮田善明）

昭和17年7月号（5の7）第49号33頁20錢
羽衣を見る※随想　蓮田善明3～7
粥の歌（短歌）※八首　吉井　勇8～9
つれづれのながめ（古典新生）清水文雄10～11
古今の季節※評論　三島由紀夫12～18
式子内親王（5）※研究　清水文雄19～22
天武天皇（5）※研究　池田　勉23～32
後記　（池田）33

昭和17年8月号（5の8）第50号39頁20錢
古事記を誦む事※研究　蓮田善明3～7
別離（短歌）※七首　中河与一8～9
≪伊東静雄・田中克己　透谷賞受賞記念≫
私信のかたちで　小高根二郎10～14
祝ひの詞　富士正晴14～15
田中克己氏に報いる和歌　山田重正16～17
青い眼（詩）　林富士馬18～19
ほととぎす（詩）　桜岡孝治20～21
祝詞にかへて　清水文雄23
―伊東静雄氏へ―
透谷賞の詩人たち　栗山理一24～27
詩人伊東静雄　池田　勉27～30
供茶（古典新生）（南坊録）　水島　倭22
玉葉・風雅（一）※研究　谷　宏31～35
研究室余録（二）※随筆　斎藤清衛36～38
献詞　（蓮田善明）39

昭和17年9月号（5の9）第51号42頁20錢
≪和歌≫
報告的発想の歌※評論　中河与一3～5
「うたげ」について※研究　池田　勉6～12
言霊のしらべ※研究　清水文雄13～17
謄臣巴提便（古典新生）（日本書紀）　室　季雄18～19
長歌に関聯して※研究　蓮田善明20～36
研究室余録（三）※随筆　斎藤清衛37～41
詩人の声（清水）無題（蓮田）　42

昭和17年10月号（5の10）第52号42頁20錢
荒都の悲歌※研究　池田勉3～8
近代の悲劇※研究　栗山理一9～13
かの花野の露けさ（詩）　三島由紀夫14～15
華の園（古典新生）（粱塵秘抄）四賀　薫16～17
玉葉・風雅（二）※研究　谷　宏18～25
宣長翁自伝に関する一つの質疑※研究　蓮田善明26～36
研究室余録（四）※随筆　斎藤清衛37～39
〈書翰〉三島由紀夫（清水文雄宛）池田勉（蓮田あて）井上豊・居を移して40～41
―栗山理一・豹と兵隊―蓮田善明

昭和17年11月号（5の11）第52号43頁20錢
俊成九十賀※研究　蓮田善明3～13
みのもの月（小説）　三島由紀夫14～30
相聞※研究　池田　勉31～32
玉葉・風雅（三）※研究　谷　宏33～37
研究室余録（五）（完）※随筆　斎藤清衛38
伊勢物語のこと（三島由紀夫）「神風連のこころ」（蓮田善明）　40～43

昭和17年12月号（5の12）第53号40頁20錢
利鎌舎大人の歌　今田哲夫3～11
藤原家隆（一）※研究　袖崎　修12～17
―その忠節と上方詩人の伝統
式子内親王（八）（完）※研究　清水文雄18～24
笈の小文（古典新生）（芭蕉）蓮田善明23～26
「笈の小文」余言文学の「古さ」※研究　蓮田善明27～34
文芸文化第五巻総攬　35～37
便り（鹿田令爾）うたはあまねし（三島由紀夫）桜島（清水文雄）所感（蓮田善明）　38～40

昭和18年1月号（6の1）第54号52頁20錢
寿※随想　三島由紀夫3～8
藤原家隆（二）※研究　袖崎　修9～15
淀の河辺（詩）　伊東静雄16～17
朴の木の歌（歌）※十首　南蠻寺万造18～19
文芸の世界※評論　栗山理一20～28
人麿について※評論　池田　勉29～33
衣通姫の流※研究　清水文雄34～39
研究室余録（六）※随筆　斎藤清衛40～42
日の出前※随筆　大山澄太43～48
浜木綿の歌（栗山理一）大君の辺にこそ死なめ（清水文雄）新年言志（蓮田善明）　49～52

昭和18年2月号（6の2）第55号25頁20錢
うたのこころ※扉（補註参照）池田　勉1
建礼門院右京大夫考※研究本位田重美2～9
衣通姫の流（二）※研究　清水文雄9～13
詩一篇　林富士馬14～15
藤原家隆（完）※研究　袖崎　修16～24

—その忠節と上方詩人の伝統—
松坂の一夜の事に就ての異見※研究　蓮田善明25
※扉カットの下部には前号まで和歌が掲載されてゐたが、今月号から「古典新生」欄がこの頁に掲載されることになった。

昭和18年3月号（6の3）第56号18頁20錢
勇進の古道※扉　蓮田善明1
衣通姫の流（三）※研究　清水文雄2〜5
愛ぐしをとめら（詩）　稲葉健吉6〜7
世々に残さん（一）（小説）三島由紀夫8〜13
古事記展　蓮田善明13〜14
—附・真福寺本古事記書写について
学界随語（一）随筆　斎藤清衛15〜17
国しぬび歌（池田勉）無題（蓮田善明）18

昭和18年4月号（6の4）第58号19頁20錢
駅頭に立ちての詩※扉　清水文雄1
風雅のみなもと※随想　池田　勉2〜5
世々に残さん（二）（小説）三島由紀夫6〜11
衣通姫の流れ（四）※研究　清水文雄12〜18
古言古意　蓮田善明19

昭和18年5月号（6の5）第59号29頁20錢
以筆比梓※扉　栗山理一1
與謝野寛覚書※研究　坂村真民2〜7
スマトラにて（短歌）※五首田中克己8〜9
世々に残さん（三）※小説　三島由紀夫10〜17
衣通姫の流（五）※研究　清水文雄18〜20
蜻蛉日記に於ける「日記」※研究　西山忠太郎21〜28
神遊び（清水文雄）無題（蓮田善明）29

昭和18年6月号（6の6）第60号33頁20錢
文学※扉　蓮田善明1
讃岐の院　池田　勉2〜8
世々に残さん（四）※小説　三島由紀夫9〜13
泉に寄せて懐を述ぶる歌並に短歌　房内幸成14〜15
紅旗征戎（定家伝2）※研究　栗山理一16〜23
わがなげきうた（詩）　林富士馬24〜25
衣通姫の流（六）※研究　清水文雄26〜29
学界随筆（二）※随筆　斎藤清衛30〜32
歴史（池田勉）無題（蓮田善明）33

昭和18年7月号（6の7）第61号31頁20錢
忠霊にたてまつる※扉　蓮田善明1
那智（詩）　伊東静雄2〜3
久爾能麻本呂婆※研究　池田　勉4〜10
衣通姫の流（七）※研究　清水文雄11〜14
達磨歌（定家伝3）※研究　栗山理一15〜25
世々に残さん（五）※小説　三島由紀夫26〜30
枯枝の柳　（栗山理一）31

昭和18年8月号（6の8）第62号36頁20錢
歴史※扉　清水文雄1
思（くにぬび）国の文学※研究　池田　勉2〜10
定家かづら（定家伝4）※研究栗山理一10〜22
林富士馬の詩（一）※評論　富士正晴23〜28
わがやどの花（歌）※十首　南蠻寺万造29
世々に残さん（六）※小説　三島由紀夫30〜35
万古　（蓮田善明）36

昭和18年9月号（6の9）第63号33頁20錢
文の学び※扉　池田　勉1
長い序みたやうな文章と並びに詩のやうな断片　林富士馬2〜4
転機（定家伝5）※研究　栗山理一5〜17
うた（歌）※七首　蓮田善明17
世々に残さん（七）※小説　三島由紀夫18〜28
学界随語（三）※随筆　斎藤清衛29〜32
山頂にHの大神を迎ふ　（清水文雄）33

昭和18年10月号（6の10）第64号35頁20錢
草の花は※扉　蓮田善明1
西天研文暁※研究　今田鉄甕2〜9
養心（定家伝6）※研究　栗山理一10〜19
世々に残さん（完）※小説　三島由紀夫20〜34
国風の勢ひ　（池田　勉）35

昭和18年11月号（6の11）第65号19頁20錢
面を墻に※扉　栗山理一1
懸詞　三島由紀夫2〜4
林富士馬の詩（続）※評論　富士正晴5〜8
かたくなにみやびたるひと　蓮田善明8〜13
伝誦歌一首並に短歌　房内幸成13〜15
国文学随語（四）※随筆　斎藤清衛16〜18
心ある言　（蓮田善明）19

昭和18年12月号（6の12）第66号38頁20錢
一筋のみやび研究　池田　勉1
有心（定家伝7）※研究　栗山理一2〜13
西行の道※研究　池田勉14〜20
皇居を拝してかへるさ（詩）　蓮田善明21〜22
衣通姫の流（八）※研究　清水文雄23〜28
大陸の表情※随筆　丸山　学28〜34
柳桜雑見録※雑記　三島由紀夫35〜36
文芸文化第六巻総攬　36〜37
一流の誓願　（栗山理一）38

昭和19年1月号（7の1）第67号
門出に※扉　蓮田善明1
無心の風雅※研究　池田　勉2〜10
古座の玉石※随筆　三島由紀夫11〜13
—伊東静雄覚書—
林富士馬の詩（三）※評論　富士正晴13〜18
衣通姫の流（九）※研究　清水文雄19〜21
かむいくさ※短歌十首　木俣　修22〜23
家づま※詩　臼井喜之介24〜25
有心—定家伝8※研究　栗山理一26〜34
後記　（池田・清水・栗山）35〜36

昭和19年2月号（7の2）第68号32頁20錢
一人※扉　清水文雄1
芭蕉※研究　栗山理一2〜9
うた一つ（長歌並反歌）　鈴木　享10〜11
楠公論※評論　池田　勉12〜22
林富士馬の詩（四）※評論　富士正晴23〜28
衣通姫の流（十）※研究　清水文雄28〜31
文学史　栗山理一32

昭和19年3月号（7の3）第69号31頁20錢
神の道二章※扉　1
時局と自分の問題に就いて　斎藤清衛2〜5
小枝の紅梅※研究　栗山理一6〜10
言霊の幸はひ※研究　池田　勉11〜16
衣通姫の流（十一）※研究　清水文雄24〜20
ひと筋の道※評論　林富士馬24〜30
唯一の神造　（池田　勉）31
—保田與重郎小論

終刊号昭和19年8月号（7の4）第70号78頁20錢
終刊のことば　文芸文化同人4
終りを知る※随想　垣内松三6〜7
遭遇—スラバヤに於ける蓮田善明君　佐藤春夫8〜13
世阿弥の能楽論について※研究　久松潜一14〜17
偶感※随想　斎藤清衛18〜20
池田勉を送りて詠める長歌並短歌　今田鉄甕21
文人の道※評論　保田與重郎22〜24
寂厳※随筆　棟方志功25〜27
終焉（詩）　林富士馬28
夜の車※小説　三島由紀夫29〜36
朴春秋（短歌）　南蠻寺万造37
皇都の古意※研究　池田勉38〜44
歌枕※研究　栗山理一45〜48
衣通姫の流（十二）※研究　清水文雄49〜54
おらびうた（長歌及び短歌）　蓮田善明55〜73
文芸文化第七巻総目録　74
述志（池田勉）わがねぎごと（栗山理一）後記清水文雄　75〜77
表紙（迎女）扉（万衆華仏女）棟方志功板

執筆者別索引

執筆者名を、五十音順に配列し、最初の同漢字は一括して揃えることにした。数字は「文芸文化」通巻番号である。

ア　行
青木　敬麿　14.
青野　秀吉　26.
浅野　晃　43.
阿部　六郎　7.
安良岡康作　25.
池田　勉（池田斉斐）＊略
石田　吉貞　31.
石山　徹郎　31.
石井　庄司　10. 18.
市古　貞次　8. 10.
市村　平　31.
伊東　静雄　1. 7. 18. 193 23. 45. 55. 61.
伊藤　志夏　5.
伊藤　裕　43.
稲葉　健吉　57.
岩城準太郎　6.
岩田　九郎　33.
井関　保　5. 11. 23.
井上　豊　30. 43
井本　農一　1. 21. 30.
臼井喜之介　67.
臼井　亜浪　29.
江藤　保定　46.
枝　清枝　9. 16.
遠藤　嘉基　25. 28.
大山　澄太　37. 55.
岡崎　義恵　3. 20. 23. 31
岡野直七郎　5.9. 17.
岡山　巌　5. 11. 16. 32
小高根二郎　50.
小野　好夫　3. 14. 15. 17

カ　行
垣内　松三　1. 43. 70.
風巻景次郎　1. 9. 14. 20 25. 32
加藤　惣一　6.
金原　省吾　28.
嘉納　とわ　8.

完全アフターサービスの店

時計はヒラモト

呉・本通7・劇場通入口
TEL ㉑ 4788

広島県指定精神病院

長尾病院

院長
長尾邦雄

呉市阿賀町254
TEL ㉑ 代8508

株式会社 上田工舎

代表取締役 上田吉広
呉支社 呉市寺西町十二番地
電話 ㉑ 5147・5148・2960番
本社 東京都江戸川区西一之江一丁目二二八
電話 江戸川(651)325・8418番
東京営業所 東京都千代田区丸ノ内1丁目 鉄鋼ビル内
電話 和田倉(201)4308番
広島出張所 広島市江波地先 三菱造船所構内
電話 ㉛ 5563番

カ行つづき

亀井勝一郎 13.
唐木 順三 15. 26.
木内 進 22.
木本 通房 23.
木俣 修 67.
喜多 義男 25.
北住 敏夫 19. 31.
栗山 理一 ※略
小糸夏次郎 20. 23.
小島 吉雄 15. 28.
児山 敬一 29.
興水 実 6. 7.
河野 慎吾 30.
上泉 一郎 2.
古賀 行義 43.
後藤 興善 14. 16. 18. 25. 27.

サ 行

斎藤 清衛 ※略
斎藤 貫 23.
斎藤 史 7. 24.
斎藤 瀏 16. 18.
佐藤 春夫 37. 70.
坂本 浩 2. 5. 8. 9. 10. 13. 21.
坂村 真民 59.
榊田凌次郎 48.
桜岡 孝治 50.
笹岡 清美 30.
沢田 浜司 48.
四賀 薫 2. 3. 10. 11. 12. 17. 19. 52.
鹿田 令爾 54.
塩田 良平 10. 30
清水 文雄 ※略
柴生田 稔 5. 9. 16.
新屋敷幸繁 27.
神保光太郎 28.
杉浦正一郎 12. 15. 18. 19.
鈴木知太郎 44.
鈴木 享 68.
瀬古 確 33.
瀬群 敦 11. 22.
袖崎 修 12. 54. 55. 56.

タ 行

田中 克己 7. 9. 13. 16. 17. 21. 24. 26. 37. 48. 59.
多胡 順 4. 24. 28.
高藤 武馬 9. 10. 11. 12. 14. 15. 16. 18. 20. 21. 24. 31.→南蛮寺万造
高崎 正秀 11. 20. 25. 26. 27.
高橋 義孝 14. 24.
高松 秀 34.
高村光太郎 22.
橘純 一 28.
谷 宏 50. 52. 53.
寺島 友之 21. 22.
土井 忠生 10.
東条 操 32.
徳田 浄 22.
豊永 秀也 40.
戸山 六郎 (下程勇吉) 14. 26. 29.

ナ 行

中勘 助 11.
中島栄次郎 7. 8. 9. 12. 15. 18. 19. 23. 31. 37.
中河 与一 5. 7. 10. 11. 17. 50. 51.
仲原 善忠 36.
中村草田男 7. 17
南蛮寺万造 (高藤武馬) 27. 29. 33. 55. 62. 70.
二階堂顕蔵 25. 26. 27
西尾 実 1. 23
西下 経一 2. 7. 26. 28.
西山忠太郎 59.
野尻 抱影 32.

ハ 行

蓮田 善明 ※略
林 富士馬 50. 56. 60. 63. 69. 70
久松 潜一 1. 2. 3. 4. 14. 21. 43. 70.
日野 草城 23.
富士 正晴 19. 20. 21. 24. 26. 27. 28. 29. 30. 37. 50. 62. 65. 67. 68
福士幸次郎 16. 25.
房内 幸成 60. 65.
藤井 信男 12. 27.
藤田徳太郎 2. 5. 10. 11. 26. 22. 26. 32. 43.
藤森 朋夫 2. 7. 16.
船越 章 11.
堀部 正一 41.
本位田重美 29. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 40. 56.

マ 行

前川佐美雄 11.
松尾 聰 1.→48.
松下 武雄 15.
丸山 薫 12.
丸山 学 10. 16. 17. 18. 19. 21. 22. 23. 26. 28. 31. 32. 35. 66.
三浦 常夫 6. 9. 11.
三島中紀夫 39, 40. 41. 42. 43. 46. 49. 52. 53. 54. 55. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 70.
水島 倭 50.
水野 葉舟 8. 13. 15. 21. 22. 30. 36. 37.
源 豊宗 4.
宮川ひろし 16.
宮崎 丈二 9. 17.→24.
棟方 志功 28.→70.
室 季雄 51.
森 敬三 38.
森岡 常夫 26.
森本 治吉 9.

ヤ 行

矢野 巌 20.
安田新太郎 (池田勉) 48.
保田與重郎 4. 7. 9. 12. 18. 24. 25. 31. 37. 43. 70
山崎 喜好 15. 18. 19.
山下 寛治 29.
山岸 外史 16. 24. 25.
山岸 徳平 28.
山口 誓子 10. 13.
山田 重臣 50.
山田 正紀 20.
山西 すみ 14.
吉井 勇 21. 49.
吉田 精一 1. 32.
吉武 操 15. 16.

あとがき

バルカノン第22輯をお届けします。本号は、かの我国危急の日に、軍国調と指導理念のみが横溢してゐた時代に日本の古典の美と精神を護り継いだ志高き雑誌『文芸文化』を特輯して、その本姿を鳥瞰展望した。寄稿頂いた諸先生、並びに指導資料提供など援助頂いた清水先生に厚くお礼申上げます。(隠岐)

バルカノン(22)・昭和42年2月11日発行・発行人笹本毅・編輯人隠岐国彦 ©
頒価250円〜〒50円)・発行所 火の会(呉市宮原通7丁目126 笹本方)

昭和四十二年二月五日印刷・昭和四十二年二月十一日発行

酒王

千福

三宅本店謹

株式会社

呉興行倶楽部

社長
海生逸一

専務
下原次郎

呉市中通7丁目
TEL㉑3783

バルカノン第22輯（あさあけ通巻42号）